
The CHEATER !

フリークス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The CHEATER!

【Nコード】

N3699W

【作者名】

フリークス

【あらすじ】

クリスマスの日、主人公の安梨^{やすなし} 升雄^{ますお}は自身で一ヶ月かけて企画した実験を行い、詰めを誤り致命的な失敗を起こしてしまった。そして彼は、自身の作った装置に吸い込まれてしまう。吸い込まれてしまった彼を待っていたのは、彼が望んだ世界でありそして拒絶したい現実だった。彼は彼が自ら望んだチートという力で抑圧された人々を助けるという目標を目指す……。。

プロローグ前編

この文章を誰かが読んでいる頃には、世界は大きな変革を向かえて
いる事だろう。

今日、この日行われる実験によって、これまでの常識は覆される。
その結果、俺は俺という枠組みを遥かに超え、新たな存在として
ここに居る。

これを読んでいるモノよ。

俺はいつでも在るがままに存在し、変革を行う。

これを読んでいるモノよ。

俺の行う変革が、この世界にとって素晴らしいものであることを、
俺は確信している。

これを読んでいるモノよ。

もし、俺が志半ばで倒れたら、その意思を引き継いでほしい。

貴方の住んでいる未来が、幸多からんことを。

20##年12月25日

安梨 升雄

P.S.

家族へ、もし俺に何かあったときは、この文章は消したあと、ゴミ
箱も空にしておいて下さい。

くれぐれも、間違っても、何があっても、他の人の目に触れるよう
なことは無いように。

頼みます、お願いします、マジ頼みます。

カタカタ…

「こんなもんで良いか、良し保存…っ」と

さて、唐突に思いついた理論と、それを実証する装置を作り始めて今日で丁度1ヶ月になる。
最初から行き当たりばったりで、成功する目論見すらさっぱり無いが、それでも完成品を見るのは感慨深いものが有ると、適当に思いついた言葉で修飾して思ってみる。

俺の名前は安梨^{やすなし} 升雄^{ますお}。

ただの科学が好きな高校2年生だ。

科学が好きと言っても、計算とか閃きが得意というワケでもない。実験での爆発とか感電や刺激臭等の雰囲気が好きで、科学者というのに懂れてる普通の人だ。

ちなみに、スタイルと顔については自慢できるモノじゃないとだけ言っておく。

漫画なんかではモブキャラF辺りがお似合いだろうと思うし、俺もそれで文句は無い。

……なワケ無いだろうがー！ー！！

俺だって一度は光って目立ちたいし、主人公的冒険してみたい。

ついでに、女の子とも付き合ってみたい。

普通で健康的な願いを持つ俺が、今の状態に満足できるわけ無い！そんな現実が許せるかっ！？ 許せねえよなっ！っ！

……と、いきがっては見たものの、現実とはどうしようもないワケで。

日々、ゲームとラノベとアニメ等々で現実逃避をする毎日です。

なんか、自分語りをしたい時は、自己紹介をするのがお約束らしいよ……。

まあ、それは良いとして。

さっき書いて保存した意味不明の頭の悪い文章は、気晴らしと只の発破掛けで大した意味は無い。

まあ、ちよつとした保険……の意味もあるが。まあ、ありえないから良しとしよう。

ちなみに、ファイルネームは『遺書 ver3 rev0004.txt』だ。

良い男というのは、どんな時でも最悪の事態を想像するものらしいからね。

さて、この装置だが

「マスオー！ お風呂沸いたから先に入りなさい！」

「おかーん！ いま手が離せないから、俺最後でいいーっ！」

「最後だったら、ちゃんと釜の電気を落として上がってね！ たまに、忘れてるでしょ！」

一階からオカンの空気を読まない知らせが来たが、いまは良いところだ。

やめるわけにはいかない。

おさなりに返事を返し、装置に向き直る。

で、この装置だが、簡単に言うと『世界を作成する装置』（予定）なのだ。

.....

.....

.....

……言いたい事はあるだろうが、暫く俺の妄想に付き合ってくれ。

まず、これを思いついた経緯を語らせてもらう（次のページ）けど、
長いし、読みにくいしで、飛ばしてもらって結構です。

俺はさっきから、なんでこんなに独り言が多いんだろうな？ と、
つぶやいて一月前のあの日に思いを馳せた。

プロローグ中篇

俺はその日、壮言な音楽が頭の中で鳴り響く中、夢（女の子がコウノトリを運んできて、その女の子と炬燵の上の鍋を囲み、一緒にクルクル回っていた）から醒めた。

先ほどの夢（女の子がコウノトリを以下略）を頭の中から消去し、夢（女の子が以下略）から醒める一瞬前に思いついたことに思いを馳せ……高笑いを始めたのだった。

思いついたこと……それは、今まで誰も考えなかった（で、あろう）理論である。

簡単に説明すると、「サイコロの好きな目を出す方法」である。

コレだけでは何のことかわからないだろうから、順を追って説明することにする。

そう、サイコロである。

言い換えれば……確率を操作するという事だ。

これを考え始めた切欠は、クソゲーをやっている時に出た、ある場面が考える発祥だった。

それは、RPGなんだが……目の前に宝箱があって、その手前の足元にはセーブポイントがあって、おまけに宝箱の中身は完全ランダムという。

こんな場面があれば、だれでもこう考えるはずだ。

「欲しい物が出るまで、セーブとロードを繰り返せば良いじゃん」と。

当然俺だって、そういう事を考えた。

もちろん話しはコレだけではない。

セーブとロードを繰り返しつつ、更に俺はこう思った。

これよりも、データを弄って好きなものが出るようにしたほうが早い……と、そう思って、実行した。

それが答えなんだと、俺は今朝の夢（女の以下略）から醒める瞬間に理解した……という事だ。

翻ってこの事実を現実世界に持ってくるとしたら、どういう風にすれば良いだろうか。

言うほど簡単には行きそうに無い。

三日三晩ほど夜も寝ないで昼寝して、考え付いたのが……、先ほど言っていた「世界を作成する装置」（予定）だ。

この装置は簡単に言えば、手のひらサイズながら、大容量のデータメモリ（希望）を内蔵して、ランダムでデータを記述して即座にデータを解放する（予定）、というのを基本骨子とした装置である。

つまり、「自動的にデータが消えるようにした記憶領域に、ランダムでデータを書き込んで、そのデータが自分で自分を消させないように、装置に働きかけることが出来るようになってるが、外部からモニターしているモノ（つまり俺）の指先一つで削除およびデータの書き換えができるようになってる装置」である。

もし、なんらかの運とか奇跡とか運命とかが作用してランダムデータで世界が出来て、その世界が装置の消去プログラムを止めれる意思と手段を持ってて、更に、その世界を俺が気に入データって消さなければ、無事世界が出来るというわけである。

用はランダムである。 ランダム。

都合の良い言葉入りましたー！ のランダムである。

うん、オカルトだね。

ちなみに、名前は「カオスメモリ」と名づけました。

世界の容器としては、小さすぎないかと思うかも知れないが、ある程度の容量以上があれば、圧縮と解釈で何とかなるんじゃないかと、はかない希望を持ってるから、多分大丈夫だ。

いま思いついた量子力学ってので、何とかなると、俺は信じてる。

と、いうことにしておいて欲しい。

が、こんなチャチな装置で実現できるとは思えない。

だけど、全ての可能性はゼロじゃない…筈なので、何か起きれば儲けというところ。

……最悪、爆発しても消火器は準備してるし抜かりはない。

続けるけど良い？

ただ、世界を作るといっても普通の世界じゃ満足できない。

俺が、本当に作りたいもの。

それはずばり、平行世界だ！

何故、平行世界なのか。

何かの間違いでも構わないが、とにかく装置の中に世界が作成出来たでしょう。

これだけでも、歴史に残る偉業なワケだが、これで満足出来ない俺はこう考えた。

もし、装置の中に平行世界が誕生したとすると、その平行世界の中でも俺の平行存在は、同じように平行世界を装置によって作成しているのではないかと。

その平行世界の中で、平行存在である俺が更に平行世界を作った。さらにその平行世界の中で、平行存在の俺が……。

これを繰り返していけば、ひょっとしたら、俺の平行存在は「俺の世界」を作った奴がいるのではないかと！　こう思ったわけだ。

そうなれば、俺という存在とこの世界は、装置を挟んでループ上に存在し、俺が「作った」平行世界への干渉は、全て巡り巡って自分の世界への干渉となるのでは無いだろうかと思ったワケだ。

その時、もし平行世界の自分に対して『改造』を行ったらどうなるだろうか。

あたかもゲームのデータを書き換えるように、平行存在を書き換える。

平行存在は『俺の世界の俺』にリンクしている。

ここまで言えば、もうお分かりだろう。

不老不死、透明化、魔法、奇跡実行、過去改変、過去視、未来視、存在抹消……。、

想像しうる全ての願いが叶うのだ！！

もちろん、確率の操作など余裕である。

……実験に成功すればだが。

これが俺の考えた「平行世界の運営」である。

まあ、自分でも痛い妄想であるとは思っている。

これが噂に聞く中二病、いやさ、高校生だから高二病と呼ぶべきか。

自分が感染するとは思っても見なかったよ……。

しかし、思いついてしまったからには、やるしかない！

プロローグ後編

というわけで、実験を始めます！

「主電源ON！」

「メイン電線への通電、んっと、確認！」

「変圧器の作動、確認！」

「電磁スイッチ正常作動中！」

「続いて、カオスメモリ（例の装置）の中へ干渉開始」

一人で大規模実験ごっこは痛い、とかいうな！！
自分でもわかってるよ！！
こういうのは気分だからな！。

「電磁スイッチへ端末からパルス発振開始」

「コイルへの通電を確認」

「カオスメ……面倒だ、装置の周囲に磁界形成確認！」

「装置のメモリ、ランダム記述おそらく成功」

「そして、装置と端末の双方向回線……繋がりませんっ!!」
ぐふ
っ……」

まあ判った事だよ。

所詮妄想は妄想でしか無いと。

しかし、ここまでは予想通りだ。

こんなチンケな装置の中に、チンケな設備で干渉し変化がある可能性だけを確率として取り出し、更にはランダムで世界を作るなどという確率はどのような数値となるだろうか？

おそらく天文学的数値になると思う。

だけど、確率0%は存在しないとかいう、矛盾に満ちた言葉があるらしい。

だったら、目的の物が出来るまで繰り返せば良いのさ！ キラツ☆ミ

そういうわけで、装置の中にランダムで『世界が出来て、しかも平行世界で、地球があって、もちろん俺の平行存在がいて、その平行存在は平行世界の作成に成功していて、それでいてその平行世界は俺の端末に接続できる能力があって、端末とはデータのやり取りが出来て、端末に平行世界を書き換えることが出来るアプリケーションを作成し送りつける能力があって、おまけに装置自身のデータ消去のための電磁スイッチの信号を書き換える能力を有している世界という存在』が出来るまで頑張る所存で御座います。

1分経過……

3分経過……

5分経過……

いくらなんでも無理すぎでした。

「こうして、少年は現実に汚染されて大人になるんだな」
ため息一つついて、俺はどうとう現実を受け入れた。

不可能な事は存在し、それはどうあってもそれは覆らないと。

電気を落とそうと手を伸ばした瞬間、視界の端……チンケな装置が
……光った。

ような気がした。

目を擦って、もう一度見ても何も変化はない。
爆発するって訳でもなさそうだ。

「まあ、そうそう何か起こってたまるかってね。
日々平穏が何よりだよ、やれやえ？」

装置からのデータを受け取る予定の装置にぶっ刺さったLANケー
ブルの繋がった端末……いや、パソコンの様子がおかしい。

画面には見慣れないアプリケーションが起動しており、見慣れない
フォントで理解出来ない……いや、理解したくないタイトルが書か
れている。

『世界運営ソフトウェア』

.....

.....

.....

え？ いや、ちょっと待った。 これは唐突すぎる！
じゃなかった、えっと…。

と、とととととりあえず、じっくり確認から。

画面を近くで見ようと、手を伸ばすが震えてる。

足が自分の物じゃないみたいに麻痺して崩れ落ちる。

目がかすんで前が見えなくなってくる。

息をするのを忘れていたようだ。

激しく急ぎ立てる心臓の鼓動を聞きながら、呼吸を何度も何度も行うことで、どうにか正常な思考が戻ってきた。

汗が背中と首筋からあふれて気持ち悪い。

「ヒッヒッふー、ヒッヒッふー、……ヒッヒッふいー！ー！」

うん、落ち着いた。 コンディションもグリーンでオールオーケーだ。

まだ腕と指は震えてるが、動かないって訳じゃない。
今度こそ、キーボードを掴み、近くに引き寄せる。

モニターには、間違いなく…俺を発狂寸前まで追い込んだ文章が書かれたままだった。

「夢じゃない。幻覚って訳でもない。
だとしたら現実……なのか？ まさか!？」

俺が落ち着くのを待ってたかのように、画面に動きがあった。

『管理者登録と設定を行います。
以下の空白に必要な情報を入力して、登録ボタンを押してください』

「って、どんなアプリなんだよ!!」

思わず突っ込んでしまったが、口元がにやけて来る。

おまけに、狂ったような笑い声がどこからか聞こえてくる。

その声を鬱陶しいと思いつつも、ものは試しと空白を埋めてみる。

「名前は……安梨 升雄っと。
パスワードは、えっと、あれで良いや。次はニックネーム？」

震える手で一文字ずつ入力していく。

依然、笑い声は続いている。

いい加減鬱陶しいと思った頃、

「ちょっと!! 麻由あんた大丈夫!？ 変な笑い声出して、どうしたの!？」

戸をドンドンと叩いてる音と言葉で正気に返った。
狂ったような笑い声を上げてるのは……俺だ。

汗がどんどんあふれてくる。

どうしたら……。。

何か言い訳を！！

「あ、あ、ああ、今、何だっけ、あれだ。

マンガ、そうマンガが面白くてさ、笑ってたんだよ。

俺は大丈夫だから」

「そう〜？

もう夜も遅いんだから、お父さんがお風呂から上がったら、次入って早く寝なさいよ」

誤魔化せたっ！！

ドアに鍵を付けて貰って正解だったな。

汗で服が湿って気持ち悪いが、そんなのは後だ。
続きを埋めなければ！

よしっ！ 気分も落ち着いてきたし、笑いも出なくなった。

「えっと、ニックネームか。ニックネームねえ。

この際、神様の名前をつけても良いんじゃないか？ とか思ったが、
普通すぎてつまらないよな！。

うーん、自分の名前にあやかりう。 えっと『Cheater』
と」

俺の名前、升雄の升の字はカタカナでチートとも読める。

その所為で学校で数少ない友達から揶揄されたりしたが……このソフトが本物なら、あいつがひどい目に遭うように設定してやろう。

カタカタと入力する。

そろそろ興奮も冷めてきて、頭の冷静な部分が「胡散くせー（笑）」とか言ってるが、考えるのは全部やれるだけやった後だ。

「投影コンソールの可視化？　なんだこれ？　このパソコンのことか？」

見えなきゃ話にならんだろ。　YESっと。

次は、他の人もコントロール可？　当然っ、NOだろ！」

全部埋め終え、間違いは無いと確認して登録ボタンをクリックする。

画面が切り替わる。

「えっと、なにに。　世界の広さを指定してください。か」

意味がわからん。

スライダーバーと数字が表示されていて、右にずらすと数字が増え、左にずらすと減る。

ちよっと迷った末、デフォルトボタンを押したあと、決定ボタンを押して設定を終わらせた。

設定に問題があるなら連絡くれるだろ。　妙に親切設計なアプリ？　だし。

「あ、設定できた。　えっと次は……。」

環状並行世界を環状元多連接続世界にアップグレードしますか？
だって？

意味が解らない……そういう時は、ヘルプのボタンを押してつと……」

自己主張している「？」のマークのついた見慣れたボタンをクリックする。

カチっと。

「なにになに……この設定をアクティブにする事で、世界の定義を行えばその設定で別世界を環状世界の下位に作成出来ます、と。」

作成された世界は、いつでも観測及び干渉が可能です……？ え、まさか！？

世界の定義方法は……嘘だろ！ つまり、創作物の世界を作ること
も可能ってこと……なのか？

YES！YES！YESだっ！！！」

考える事を放棄し、「はい」と書かれたボタンをクリックする

まあ、ここまでやられると、夢の中とかジョークソフトとか疑うけど、それでも今は良い。

『世界の作成と接続をしています。しばらくお待ちください。

この作業には時間が掛かる場合があります』

と、書かれたメッセージが点滅している。

進捗バーがゆっくりと、範囲を埋め尽くそうと左から右へ領域を増やしている。

どこからどう見ても、普通のアプリケーションだ。

書いてある文章は正気を疑うようなものだが。

えっと、思わぬ休憩時間が出来た。

興奮も醒めてきて、体の熱も下がってきてる。

シャツが汗で肌に張り付いて気持ち悪い。

「とりあえず、服を着替えるか」

.....

.....

.....

着替え終わったあと、机の上のパソコンの画面を見ると、作成は終わってるようだ。

画面が一新され、一見しただけでは判らない数字の羅列と、見たことも無い映像が表示されている。

更に、一番手前に新しい小さなウィンドウが開かれ、『ツアーを始める』と書かれたボタンが、点滅している。

「これってあれだよな。 操作説明だよな。 どこまで親切なんだよと……」

乾いた笑いが出る。

急に冷えてきたなと思い、窓の外を見ると案の定雪が降ってきた。ホワイトクリスマスか……また、今年も一人だったなあとはいつつ

暖房を入れるため、エアコンのリモコンを手にとった。

リモコンを使いスイッチを入れる、古いエアコンの室外機は電気を貪欲に食う。

部屋が一瞬暗くなり、エアコンが動き出す。

「さて、続き続きっと。え」？

画面にはまたしても、小さなウィンドウが開いており、そこにはおなじみの警告アイコンと『致命的なエラーが発生しました』と書かれていた。

「………は？　ちょっとまった。　なんで？　バグった？　ととととにかく！　このヘルプってボタンを押そう」

『不明な理由で世界への圧力が減少しました。』

そのため世界が膨張を開始しており、崩壊の危険性があります。

管理者は速やかに問題を解決し、リカバリーボタンを押下してください

注意…管理コマンドのため投影コンソールでは利用できません』

「ってやばいだろ……！！　平行世界なんだから、この世界まで壊れるし！

しかも、不明な理由って何だよ！　意味わかんねえ！

圧力ってなんだ圧力って！　装置には電気しか使って無いぞ！

って電気！？　……エアコンだー！！！！」

エアコンのリモコンをひったくるようにして取り、すぐさま停止ス

イッチを押す！

すでに、可能性の箱（平行世界入り）は心なし小さく見え、周りの景色も引っ張られてるように見える。

「つ、つつつ次は、リカバリーボタンを押すんだったな。
てか、コンソール？　コンソールってなんだよ！！」

次の瞬間、羽音のような音が聞こえると、目の前に半透明の画面が現れる。

S Fでおなじみの空間投影ディスプレイっぽいものだ。

「っ！　キーボードはこれだな！　って、押し方がわかんねーって！！
ええい、ままよ！　画面を指で押してって、エラー！？　なんでっ
！」

『ERROR…端末の権限レベルが低いため実行されませんでした』

部屋の扉が強く何度も叩かれてる。

「いいかげんにしなさい！！　今何時だと思ってるの！　なに一人で騒いでるのよ！　明日も学校があるんでしょ！？」

「うるさい！！　黙ってろ！！　……なんでだっ！　くそっ！
あつ、こっちのパソコンで押すのか！！
えっと、自動で修復しますか、か。　『Y』だ！！
おまけに、自動安定化ってチェックもトグルで入れておけ！！」

「マスオ!! 親に向かって、その言い方はなに!!? ちよっとお父さん呼ぶわよ! ……おとーさん!!!」

画面に映る緑色の『修復中』の文字を見ながら一息付く。

「信じられねえ。 エアコンのスイッチ入れただけで、世界が崩壊するとか。 ネタにもならねえ。

夢なら性質悪すぎだろって、うわああー……っ!!!!」

目に映る光景、いや、世界がおかしい!! 色が抜けてる、いや、色が吸われてる!?

手を見ると、輪郭が引っ張られている!

引っ張ってる方を見ると、やはりと言うか世界が入ってるらしい装置が原因のようだ。

どうすることも出来ず、どんどん装置に吸われている。 どんどん どんどん。 際限なく。

離れようとするが、どうすることも出来ない。

片半身はすでに吸われている。

幸いというか痛みは……ない。

むなしく伸ばした手がノートパソコンをつかむ。

やがて逃げようとする意思すらなくなり、ついでに意識もなくな… …。

「う、まぶしっ……！ ……青？」

目に飛び込んできたのは、真っ青だった。

いきなりの光景に戸惑っていると、視界に影が出来た。
が、ぼやけていて輪郭しか解らない。

まばたきを数度、目を擦り、漸くそれが人であると気が付いた。

いや、それよりも。

「きゃっ！ いきなり動かないでよ、ビックリしたじゃない！」

「こ、ここに、ここは何処だ！？ お前らは何モンだ！ どうして
オレがこんなところに居る??」

いつでも逃げれるように中腰で……になろうとして、足がもつれて
尻餅をつく。

立ち上がって逃げる準備をしたいが、体が上手く動かない。

気ばかりが勢威って、俺の足は空しく地面を蹴り、ズリ下がるのが
限界だった。

「はぁ？ また説明しなきゃいけないの??」

いゝい？ ここはトリステインの魔法学校。

あんたは使い魔召喚の儀式で呼ばれた、あたしの使い魔よ」

トリステイン？

魔法学校？

そして、使い魔？

この条件に符号する、シュチュエーションをオレは知っている。

まさか！　ここはっ！！

「ゼロ魔の世界かっ！！??」

「ゼロ……ですってえ……！　あたしの嫌いな言葉をつっ！！
それに、世界？　世界ってなによ？　この世界の名前はハルケギニ
アよ」

そんな有り得ない……。

おれのつぶやきを無視して、彼女はさらに続ける。

「……まったく、こんなことも知らない平民が二人も出てくるなんて、どうなってるのよ！」

二人?!　二人だって？　まさか！

「お前がゼロだってのは、平民すら知ってるみたいだぜ!!」

俺を遠巻きにみている奴が何かをいうと、またしても沸き起こる、
笑い声。

それらの笑い声に、いきり立ちながら怒鳴り返してるルイズっぽい
人に、オレは気が付いたら質問していた。

「ちょっとまって！　いま、二人？　二人って言った？
もしかして、もう一人いるのか？　それは――」

「あいたたた。　ひどい目に遭ったぜ。

おー、目が覚めたか？　そろそろ、起きあがれよ。

客をひどい目にあわせるアトラクションを作った奴に、一緒に文句

言いに行くぜ。

もしかしたら、新興宗教の教祖様かもな」

ルイズっぽい人から返答が来る前に、何時の間にか隣に来ていた、パーカーを着て髪をツンツンに立ててる男から話しかけられた。

この模様取れねえ。まさか、刺青じゃねーよな？ な？

と、左手の甲のルーンを擦ったり引っかいてる男……才人だよな……を、呆然と見る。

「ミス・ヴァリエール。時間も押しています。もう一人とも契約を」

「はーい。コルベール先生……。日に二度も平民とキ、キスするなんて……ツイてないわ」

やはり、ルイズだったか。 って、契約？ だれと？ 才人とはもうやったんだろ？

……まさか、オレともか！？

というか、この契約はまずい！ なんとかしてでも、止めなければ！！

「ま、まった……！！」

「待たないわ。先生もおっしゃってる通り、時間が無いの」

「だから、待ってって！ えーっと、ルイズ・フランソーワズ・ル何とかヴァリエール……！」

押しとどめようと、咄嗟に口から出た言葉は、彼女のフルネーム（

未完成版）だった。

「ひ、人の名前を何とか、って何よ！ あんた、貴族の家名を馬鹿にしてるの！！??」

「待ちなさい、ミス・ヴァリエール！——その君。何故、ミス・ヴァリエールの名前を知ってるのですかな？
彼女はまだ、自己紹介はしておりませんか？」

げっ！ 更に危険な状態に！

コルベール……先生？ も杖を向けようとしてるし……なんとかして、この状況を改善しなくては！！
しかし、口からでたのはまたしても、適当な思いつきだけの言葉だった。

「あ、あー、有名、そう！ 有名だから！ 名前を知ってるんだよ！」

「確かに、ミス・ヴァリエールはある意味、有名だが」

「平民の分際でえー！！ コルベール先生、どいてください。
こんな平民は一発殴って躰けないと！」

いきり立つルイズとはうって変わって、コルベール先生は杖を下ろしつつナルホドと頷いてる。

よし！ なんとか、場をかき回せた。

ここで、一気にたたみ込む！！

「あー、無理やり契約とかするんなら逃げ出すぞ！」

進級は、あー、出来そうだが、使い魔に逃げられたとかなったら、恥をかくんじゃないのか！？」

だから、そうならないために話し合おう！」

「~~~~っ！ 平民が貴族を脅したら、どうなるか判ってるんでしょねえ！？」

「ふむ、仕方ない。ミス・ヴァリエール。

彼の話を聞くだけでも聞いてあげたらどうです？

使い魔との良い関係もメイジの必須条件ですぞ」

「えー、こんな平民とですか？ 仕方ないわね、コルベール先生がそうおっしゃるなら……。

あんた感謝しなさいよね！」

さっきまで、俺の自由意志を無視して契約させようとした言う奴のセリフじゃないが、とりあえず第一関門突破だ。

「ただし、私も同席させてもらいますぞ。

使い魔の契約を確認しないといけないですからな。

それでは、学院に戻りますぞ」

「ルイズー！ お前は歩いて来いよ！」

「ルイズは歩く事しか出来ないんだって！ フライもレビテーションも使えないんだから！」

おっと、コントラクト・サーヴァントもか！ はははは……」

「~~~~っ！！！！ もー！！ 平民の所為でええええー！！！！」

ルイズの叫びが青い空に吸い込まれる中、宙に浮かび学院へと戻る人達を眺める、

「すげー！ー！！　なんだあれ？　ワイヤーで吊ってるのか？　にしては、クレーンとか見えないけど。　どうなってるんだ。　あれ？？」

才人とも話さないとなく。

これからどうしたもんかと、オレは頭を抱えるのだった。

……

……

：

「この部屋で良いでしょう。　早めに済ませましょう。

午後は授業はないとは言え、あまり時間は掛けられませんからな」

案内されてきたのは、ソファと机があるどっからどう見ても応接間だった。　ただし、豪華な……と付くが。

貴族というイメージで有りがちな、キンキラキンの高価な置物等が置いてある部屋といえば、解りやすいだろうか。

ここに来る道すがら、俺はこれからの話し合いを有利に進めるため、物語のあらすじを思い出していた。

出た結論は、知識というアドバンテージを有効に生かそうという作戦だけだった。

「それで、えっと平民。あんたの名前はなんていうのよ？」
ルイズが明らかに不機嫌そうな顔をして名前を尋ねてくる。

「さっきも言ったと思うが、俺の名前は平賀 才人だ。
で、ここの責任者はどこだ？」

こんなアトラクションを作った奴に一言文句ぐらい言わせてもらおうぜ。

あと、さっき飛んでたのはワイヤーアクションだよな？
あんなチープな仕掛けで騙そうだったって」

「はいはい。イラガ サイトウ？ 言いくいわね、どこの平民よ。
それにしても、平民が苗字を持ってるなんて珍しいわね」

「ヒ・ラ・ガ サ・イ・トだ。 平賀が苗字、才人が名前！」
才人は適当に言われたことに腹が立ったのか、一つずつ区切りながら名前を言った。

「もう、怒鳴らないでよ。 うるさいわねえ。
苗字が先なんてまったく何処の田舎よ。
で、次はあんたよ」

「あ、ああ。オレの名前は安梨 升雄だ。
その、平賀……クンと同じように、安梨が苗字で、升雄が名前」

「同じ変な場所に誘拐されたモンどーし、サイトでいーよ」

「ああ、それなら、サイトく……サイトで。 オレもマスオと呼んでくれ」

「で？ 言いたい事はそんなことじゃないんでしょ？」

さっさと言いなさい。 時間をもったいないわ」

腕組みをしながら半目で睨みつつ、ルイズが先を促す。

「あー、今から、色々喋るが、これは俺にとっての事実なんで、突っ込みは最後まで取ってほしい。ここまでもいいか？」

「いいからとつと喋っちゃいなさい。」

平民のたわごとぐらい軽く流して見せるわよ」

「言質は取ったからな。」

まず、俺はこの世界の人間じゃない。

俺の居た国には貴族も魔法も無い」

「そうそう。 って、魔法に貴族か……どこのロープレかと。」

マスオ、お前もそんなこと本気で信じてるわけじゃないよな？」

サイトがうんうんと頷きながら、茶々を入れてくる。

「ふう……いいわ。 続けて。 大方、国と世界の違いも解って無いんでしょけど」

「そして、俺の国、日本と言うんだが、この世界を題材とした物語がある。 題名は『ゼロの使い魔』」

「くっ！ あんたねえ！」

「ミス・ヴァリエール、とりあえず話を聞きましょう」

怒鳴り散らそうとするルイズを、コルベールがとどめる。
さきほど、軽く流すとか言っておきながら、簡単に激情するとか…
…。

「ちよちよちよつ、ちよつとまった！

この世界の物語があるだって？

俺はそんなもん聞いたこと無いぞ？

そんなにマイナーな作品なのか？

って、世界だって…俺も染まってきてるな！

ずりいぞ、マスオもこいつらとグルだったなんて」

もう十分驚いたよ。で、カメラは何処だよ？ と、周りをキョロキ

ョロと見回すサイト。

おれは、そんなサイトに向き直り告げる。

「あー、オレとサイトの日本は似ているが、違う世界だ」

「もう十分驚いたつつつてんだろ！ もう今更ドッキリなんてはや
らねーんだよ！！」

胸倉をつかみかかってくる勢いでサイトが向かってくるが、手を出
して牽制する。

「いいから、話を聞いてくれ。

小学生の時、通知表で先生から、人の話を良く聞きましょうって
書かれてたんだろ」

「何で知ってんだよ！！」

「もう！ いい加減じゃれあうのはやめなさい！！ いい加減私も

怒るわよ!!

時間をもったいないって言ってるでしょうが!」

「じゃ、続けるぞ。いいな。

主人公は平賀 才人。 サイト……お前のことだ。 そして、ヒロインは君。

大人気のコメディアクション作品だ」

ダンッ! とルイズが机を叩く。

「もう、結構よ! たわごとはもううんざり。

結局あんた、私と契約する気がないだけなんでしょう?

それでつまらない嘘について、煙にまこうと! そうなんですよ? そこまで言うなら、証拠があるんでしょうね!? 何とか言いなさいよ!!!!

大体、わたしが物語の登場人物ですって? ふざけんじやないわよ!」

「もしかして、さっきのは、それで出たのか……? 嘘だろ。

もう、わかんねえ! ここは何処なんだよ……お前は誰なんだよ!」

「言いたい事はわかる。 だから、ひとつずつ証明していく。 まず、ルイズ……君だ。

君には姉が二人居る。 片方はアカデミーに在籍していて、もう一人はえっと、名前はカトレア。 自宅で療養していて、部屋には動物が多い。 君はちい姉さまと呼んでいる。 特技は動物と会話が出来る」

「え……。 そっそそそ、そんなの、ちょっと調べれば判ることだわ

！
」

「んじゃ、更に続けるよ。この国の王女つとと、さまとは、子供の頃から知り合いで遊び相手、どっかの湖だっけかの園遊会では王女様は天幕から抜け出して、君は影武者をやったって書いてたな」

「な、なななな……っ」

「ミス・ヴァリエール！彼の言ってることは、全部本当のことなのですか！？」

「いいいい今のところは、本当よ……あんたどこで調べたのよ！スパイとかじゃないでしょうね！」

「書いてたんだって。
んで、次はコルベールえっと先生。二つ名は炎蛇で間違いないよね」

「次はわたしですか？まあ、そのくらいは知っていてもおかしくはないですぞ。
インパクトはありませんな」

「んじゃ、こういうのはどう？
コルベール先生は、昔、上司に騙されて、罪も無い村人を……って、こわっ！！」

「先生！先生っ！！落ち着いてください！」

「……ぐぐぐっ！私は！私は！！」

「すみませんでしたー!」
すぐに頭を下げる。

ものすごい目で睨まれて、生きてる心地がしなかった……。
今度から言葉は選ぼう。

その後、断片的な当たり障りの無い情報を、反応を伺いながら立て
続けにだしてみた。

……

…

「で、信じてくれた？」

「まだよっ! あんたがスパイなら、このぐらゐの情報は集めれて
も不思議じゃないわ」

「いや、私は彼の言ってる事はあながち間違っではない」と

「それに、あんた」

「名前は、マスオだ」

「マスオの言ってることは矛盾があるわ。」

主人公がここに居るサイトなら、あんたはこの世界の日本人よ?」

そういえばそれもそーですな。 と、コルベール先生も頷いている。
どうしようか、下手に説明をばかすと先ほどまでの話しの信憑性が
無くなる。

どうしたものかと考えあぐねるのだった。

／SIDE サイト

「もしかしくなくても、ひよっとして平行世界か？」

色々と突っ込みたいが、とりあえずぱっと頭に浮かんだのは、ありふれたSFな台詞だ。

なーんか、違うような気もするが、とりあえず名前を出してみる。

「「へーこーせかい？」」

「うーん、その可能性はあると思う。

でも、ひよっとしたら、宇宙は広いんだし、違う惑星だけでも同じような歴史を持つ星かもしれない」

マスオ……と言ったか。 同じ場所に攫われた、いや話を聞く限り現れた奴が、ピンクの髪のタカビー女とハゲちゃんを無視して同意する。

「そんな可能性がありえるのか？」

「オレが居ることが証拠だしなー。 兎に角証明のし様がないからなー。

いまはどうとでも取るしかないね」

マスオと向き合い、お互いウンウンと頷きあう。

「ちょっと、その平民二人！」

勝手に話しを進めないで、あたし達にもわかるように説明しなさい！
そもそも、ヘーコーセかいつて何よ？」

「こっちでは、概念というか言葉すらないのか。

えーっと、なんと説明したら……。

あ、そうだ。今日ルイズが召喚して出てきたのが、オレとサイト
だったけど、

サイトだけ出てくるとか、まったく違う人や動物が出てくる可能性
もあったわけだ」

「召喚とか魔法とか貴族とか異世界とか、まだ信じられないんだが
……。

その儀式がまったく何も起こらなかったという可能性もあるな。

つまりだ、その可能性の数だけ世界は存在しているという考えが、
平行世界っていう考え方だったはずだ」

だよな？ と、マスオに話しを振るとその通りとばかりに頷いてく
れた。

って、だめだろ！！　なんでオレもこの空気に染まってるんだよ！
平常心平常心と唱えつつ、トンデモ論も含めて話しを進めていこう
と思う。

「……はあ？　なにその変な考え。

そんなことがあってたまるものですか！」

「わたしもちょっとそれは荒唐無稽というか、納得できませんぞ」

ルイズとかいう、可愛いがちょっとコーマンが鼻に付くピンクの髪

の女の子と、コ……コルベ？　なんとかというハゲちゃんびんが反論する。

「俺も納得できねーよ。

だから、宇宙のどっかには同じ歴史のある星があるんだろうなーって話しあってたんだよ」

そう。マスオの発言だけを取るなら、そんな感じだ。

だが、こいつなーんか隠してるっぽいんだよな。

頬を引っ張って見たが痛てーし、これは夢じゃなさそうなんだが。

「同じようなモンでしょうが。

何よ！　その都合のいい解釈は……」

まだも言い募ろうとするルイズを遮り、マスオが先に進める。

「いまの問題は、俺がこの世界のことを、物語として見ていたという事で、先のこともある程度判るという事だ」

ただし、ストーリーは俺が居る所為で変わっているの、確実な未来というわけじゃないけどね。
と、続ける。

「……という事は、未来のことがある程度なら、判るのね。　だったら、今すぐ教えなさい」

コーマン女がマスオに命令するが、マスオは胃の辺りを押さえつつぶつぶつ呟いたかと思うと、
掛かった！　といわんばかりに薄く笑い話を切り出す。

「条件次第……といっておくよ。

おっと、まった!

貴族というのは、無抵抗な人に暴力を振るって、力づくで目的を達するような存在なのか?」

目を怒らせて立ち上がろうとしたコーマン女……言い難いなルイズでいいや、の機先を付き、マスオが一つ質問を投げかける。

「違うわよ!! 貴族とはその力と意思で人々の手本となる存在よ!」

「それを聞いて安心したよ。

少なくとも、すぐに拷問に掛けられたりするわけじゃ無さそうだからな」

「ごっ、拷問だって!! おい、お前ら自称貴族って奴はそんなことまでするのかよ!

信じられねー!!」

拷問とかどんな冗談だよと、表面では驚いて見せたが直ぐに冗談だって解ったのでルイズをからかう。

えーんがちょ!

「だから、そんなことはしないわ!」

「そうか、それを聞いて安心したよ。

作品に出てきた貴族というのは、大抵がどうしようもなかったからね」

「貴族である私たちがどうしようもないですって!?」

「少なくとも、俺たち日本人の常識からすればな」

「ふんっ！ 貴族も居ない野蛮な世界の常識なんてアテになるもんですか！！」

「その野蛮な俺らからみて、拷問だの言ってるお前らは野蛮にみえるんだっつーの！」

と、茶々を入れてみる。

って、オレもずいぶんとなじんだもんだぜ。

「とにかく契約の条件をだすよ。

こちらから提示出来るのは、未来……じゃなかった、物語の情報、科学技術の提供だな。 後、君の護衛。

そちらから提供してほしいのは、俺達の生命財産の保証と、尊厳の保証。そして魔法の知識だ」

「生命と財産の保証ってのは大体判るとして、尊厳ってなによ？

それに、魔法の知識なんてどうするのよ？

まさか、魔法を覚えると言っても言いたいのか？

平民じゃ一生掛かって無理よ無理」

「生命と財産の保証はあれだ。

俺達を殺したり危害を加えたりするのはやめてくださいよ。 ってことだな。

食べるものとか寝る場所の提供とかだなー。

あと、俺等の物を許可無く力で強引に奪わないでくださいね、とか。尊厳の保証ってのは、契約が交わされても奴隷にはなるつもりはないってことだな。

君のことは、ご主人様とかではなく名前で呼びたいし、俺のことは名前で呼んでほしい。

犬畜生扱いされたりとかは、さすがに勘弁してほしいからな。

あ、ルイズを守るといふ仕事は出来るようにするよ。

魔法の知識はあれだ、折角魔法があるんだから覚えてみたいし、ルイズを守るためにはこの世界の技術、魔法を知らないと不利だからな」

マスオが長々と説明して、自分でも長かったか……と呟いて締めた。

「確かに長いわね。 えっと、最後の方は良いとして…。

なによ、そのあんたにばかり都合の良い条件は！

私が受けるメリットが全然ないじゃない。

未来のことにしても、本当に価値があるか疑わしいわ。

それに、科学技術ってなによ？

あんたみたいな平民が貴族に教えることがあるなんて信じられないわ」

その点については俺も同意見だ。

俺もマスオも勉強が得意ってツラはしてない……が、マスオは自分ではさり気なくだろうが、バリバリバレバレな視線で自分のノートパソコンを見てる。

その中に何か切り札が入ってるのか？

他人のパソコン……特に男の持ってるパソコンなんぞ、他の奴が見ても理解出来ないしたくないファイルしかないと思うんだがな（笑

異文化交流は前途多難

／SIDE マスオ

「俺達はこの世界に身寄りが無いんだぜ。

食うものと寝るところが無いと生きていけないしな。

これぐらいは基本だと思っんだが。

技術についてはあとで簡単なところを教えるよ。

それに、人間二人を一生飼ひ殺しにするのか？ 問題ありまくりだろうが。

さすがに一生ものの契約を不利な条件で受けろとか言われたら逃げるぞ。

まあ、ちょっとだけ情報を開示するからさ。 これを聞いて判断してくれ。

あ、そうそう。 周りに吹聴するなよ。

コルベール先生もこれは誰にも言ったらダメですよ」

「ふんっ！ 期待して無いわよ」

「え？ あ、ま……まあ、内容にもよりますぞ」

「んじゃ、早速。

物語では主人公とヒロインは、あっちこっちに冒険するんだけど、普通の一般人……平民であるサイトと、魔法が使えないメイジで冒険とか出来ると思う？」

「ぶっ！ うはははははははは！！

お前魔法が使えない癖に、貴族だ魔法だの言ってたのかよ！

今年一番のベストヒットだぜ!!」

「う、う、う、うるさーい!!」

ちよっと、マスオ!!」

あんたねえ……いい加減にしないと、怒るわよー!!」

さっきから怖いもの知らずで茶化すサイトにハラハラしつつ、杖を出そうとするルイズに恐々しながら、話を続ける。

「最後まで話を聞いてくれて!!」

でだ、この物語のタイトルになってる『ゼロの使い魔』、俺達の国の言葉で、ゼロってのに別のルビが付いてるんだ。

————『虚無』ってね」

「ええええええええええええええええ!!!!!!」

「なんですとおおおおおお!!!!!!」

「はあ? 虚無だったってゼロはゼロだろ? なんでこの人らこんなに喜んでるんだ??」

解ってないサイトを残し、ルイズとコルベールが大騒ぎし出した。

「あと物語ではサイトには使い魔の契約を結ぶことで、『ガンダールヴ』のルーンが刻まれ、武器を自在に操ることが出来るようになった。とさ」

「げ、これやっぱり刻まれてるのかよ。

この取り方は……あとで教えてくれよな?

てか、武器ってなんだよ?」

「ほほほほ本当に私が虚無の系統？ 始祖と同じ？？
じゃ、じゃあさ、どうやったら魔法が発動するのよ！？
お・し・え・な・さいいよー！ー！！」

「まった、落ち着け！ く、び……を絞めるなって！
呪文は長くて覚えてない、が！ どうやったら判るかは覚えてるっ
……から！」

詰め寄ってくるルイズをなんとか宥めすかし、距離をとる。

「嘘じゃないでしょうね！？ 嘘だったら、あんた、ひどいわよ！」

「ルイズは魔法を使おうとしたら、爆発するよな？ それが虚無の証だよ。」

普通は魔法を失敗しても、何も起こらないらしい」

コルベール先生が、今気が付いたと言わんばかりに納得している。
良く考えればおかしな光景だ。

いまだかつて、魔法の失敗を見たことがないのだろうか。
そして、それらはすべて爆発していたと言いたいのだろうか。

「た、確かに、普通は魔法を使って失敗しても、何も起こらないが
――」

だからと言って、それが即虚無であるという証であるとは言えない
のではないか？ と、ぶつぶつ呟いてるコルベール先生を無視して、
ルイズの様子を伺う。

「私の魔法は確かに爆発するわ。 でも、こんなのが本当に証拠になるの！？」

それよりも、早く教えなさいよ！」

「契約を締結したらな！」

それよりも、条件を覚えてるか？」

見せた札の効果を確認しながら、さらなる条件の確認を要求する。

「え？」

えっと、尊厳とやらの保障と、命とお金の保証、そして魔法の知識でしょ？

忘れてはいないわよ」

指折り数えて続きを話せといってくるが、こちらにはまだ確認しておかないといけないことがある。

「生命と財産とえっと、あと尊厳の保障に関連しているんだが、俺らを元の世界に戻すことへの協力、

……そして、一刻も早くサイトのルーンを外す事に協力する事も含まれてるんだ」

「なんですって？！」

どうして、私が元の世界に戻る方法に協力するのよ？！それに、サモン・サーヴァントは元々この世界に居る生き物と呼ぶ魔法よ。

元の場所に戻す呪文なんてあたしは知らないわ。

それに、ルーンをサイトから外したりしたら、わたしの使い魔が居なくなるじゃない！」

「元の世界へ帰る方法にはアテがある。

『虚無』の魔法の世界扉『ワールド・ドア』を使えばいいはず。

誘拐みたいな真似しておいて、帰しませんとか……どこの北、いやどこの半島だよ。

あと、サイトのルーンを消すのには理由があるんだ」

「って、なにをする気よ!」

ルイズに近づいて、こっそりと囁こうとしたが、逃げていつてしまった。

「あー、出来れば、サイトには知られたくなかったんだが……」

そう呟くと、すぐさまサイトからチェックが入る。

「おいおいおい、ここまで来て秘密はねーぜ？
とつと吐いて楽になっちまえよ」

溜息を大仰に吐き、本当に良いんだなとサイトに確認し、俺はルーンの効果を説明する。

「その『ガンダールヴ』のルーンだが、武器を持つことで使い方が理解できるってのと、

身体能力が上がるっていう設定のほかに……洗脳効果があるんだよ」

「せつ、洗脳だって!!!!!!!!!!!!!!」

おい、早くこいつを消せ!!!!!!

うがああああああああ……俺が俺でなくなっていく前にはやくううううー!!!!!!

……って、そんな感じはあまりしないんだが。

もしかして、俺はもう洗脳されてるのかー!!!!!!」

左手を突き出したり抱えたりして、暴れまわってるサイトに落ち着くように言葉を掛ける。

「落ち着けサイト《落ち着けるわけ無いだろう!!》まあ、そうだよな。

気をしっかり持てば大丈夫だ。あと、洗脳効果を知っていたらだ。洗脳の効果は、『元の世界に帰りたくなる』だ。

やばそうな時は、俺が声を掛けてやるから、今は落ち着いてくれ」

ハアハアと肩で息をしつつ「本当だな!？」と何度も確認してくる、サイトを横目にルイズを見る。

「と、言うわけだ。人の心を弄ってまでルイズは、使い魔にこだわるのか？」

それも、平民の心なんざ君は気にしないタイプなの?」

勤めて冷静に尋ねる。

じつは、このことを思い出して、頭は怒りで煮立っている。

人間を洗脳して従わせる……しかも、俺の同胞っつか日本人を……?

こんなこと、普通に許せることじゃないよなっ!

「わ、わかったわよ。

でも、ルーンは消さないで、洗脳効果だけを……」

まだ拘るか……境遇を知れば解る気もするけど、虚無が使えるだけじゃコンプレックスは解消されなかったか……。

「そいつは一刻も早くルーンを消す方法を見つけて、洗脳効果をなくす方法も調べて、再契約とかそういう形にしてくれ。

その際は、良く話し合ってからやってほしい。

サイトもそろそろ起きて、契約の確認してくれ」

ルイズが頷いたのを確認して、サイトもノロノロと立ち上がる。

「気を落とすなサイト。こっちの世界には美人さんが多いぞ。

それに、物語の中のサイトは、美人さん達といい関係まで行ってた――」

と、ここまで言うとかバツと起き上がり、詰め寄ってくる。

「本当だな！ 本当なんだな！？」

いよっしゃー！ 一瞬、目の前が真っ暗になったが、俺はやるぜー
ー！ー！」

と、腕を振り上げ気合を入れ始めた。

サイト（主人公）はどこまでもいっても、主人公だった。

／SIDE ルイズ

「それじゃ、マスオ。

さあ、魔法の使い方の情報をキリキリ喋って貰いましょうか！？」

まったくこの妙な、そう場所が場所なら異端審問に引き出されそうな平民マスオのたわ言を、ここまで我慢して聞いてあげたのは、全部この瞬間のためよ！

貴族であるアタシをここまで焦らしたのだから、しっかりはつきり吐かせないと。

それにしても、虚無か。どんな魔法なんでしょう。
ファイアーボールよりもっとすぐくて爆発もすごい奴？ いやいや、
それだと今までの失敗魔法じゃない！

とにかく、虚無よ虚無。伝説の力！！

これを使うだけで、全ての人、貴族平民問わず私の前に平伏す、
そんな魔法よ。きっと。

さっきマスオが言ってたワールド・ドア？ だめよ、そんなの。

反応に困る魔法は、虚無には必要ないのよ。

「残念ながら、さっきも言っただけ魔法の呪文、ルーンって言うの
かは覚えてない」

バラ色の幻想が打ち砕かれた音がしたわ。

……たしかに、そんなことを言ってたきがするけど、兎に角、虚無
よ虚無！！

最終的に使えばいいのよ。

でも、私の気分が急下降してるのは紛れもない事実よ。

「……で、呪文を知る方法が二通りあるんだが、まずキーとなるの
が、始祖の指輪をつけることだ。

これは、この国の王女さん様！ が持っている奴で、何とかのルビ
ーって名前らしい。

そして、もう一つ目が始祖の何だっけ、音が出る奴。 ん？ コン

ポはこの世界にはねーよ！

ああ、思い出した。オルゴールだ。

これを奏できれば呪文がわかるって話だ。

普通だと音が聞こえないと書いてあった」

「へー……。」

……それで？」

自分でも声が冷たくなって行ってるのが解るわ。

指輪を探せ？ このトリステインだけで何個指輪があると思ってるのかしら、この平民は。

おまけに聞こえないオルゴール？ コンポってのがなにかわからないけど……っっ！！

「で、もう一つが何とかの本……何も書いてなくて真っ白な本だ。えっと、思い出した！

始祖の祈祷書だ。これもこの国の城に保管してあるはずだ。

婚姻の儀のとき、ルイズに王女様から貸し出されたってエピソードを見たことがある」

つまり、こういうこと？

この、マスオ、いや平民はアタシを……貴族であるアタシを馬鹿にしてるっていうのね！？

「あ・ん・た・ね・ええ！！ 適当なことを言ってるんじゃないわよ！！

大体、どれもらしいとか、読めない、聞こえないとか、確証がない話しばっかりじゃない！

しかも、確認するのがすごく難しい事ばかり！

おまけに、始祖の祈祷書がどれだけの数あるとおもってるよ。

一つ一つ調べてたら時間がいくらあっても足りないわよ！」

そう思った瞬間あたしの口からは言葉が飛び出していた。

「……あー、確かに。いやまてっ。

始祖のルビーだったら、この場に一つあるぞ!」

思わず手が出そうになったアタシをだれが責められるっていうのよ!?

でも、その瞬間その平民は無礼にもコルベール先生を指差しそんなことを言ったわ。

あたしもややあって、コルベール先生を見る。

「え? わたしがなんですか?」

「あー、信じてくれ。いま、コルベール先生がもってる赤い指輪。それが、始祖の秘宝の一つの『火だか炎だかのルビー』だった筈だ」

「「「はああああああ?」」」

驚愕と呆れと不審をこちゃ混ぜにした声が、あたしとサイトと先生の口からでたわ。

「さっき、アンリエッタ王女が持ってる指輪だって、言ったじゃないのよ!

同じものがたくさんあるとでもいうの? わけわかんないわ!!

モノは始祖の秘宝よ秘宝!」

「落ち着け落ち着け! 始祖の秘宝の指輪は複数あるんだよ!」

「ふーん、複数、複数ねえ。そのうち、虚無の使い手も沢山いるとか言わないわよね?」

「非常に言いにくい事なんだが、その通りだ。

知ってるだけでも、4人の虚無の使い手がいる。

これから、この世界は虚無の使い手の陰謀が渦巻き、戦争が勃発しまくる危険な世界になる。

おまけに、虚無の使い手というのは隠しておかないと、便利な兵器扱いされるだけだぞ。

時間の問題だと思うが」

アタシの揶揄の言葉に返された言葉は、そんな大事な言葉だった。

「~~~~っ!!」

私は虚無の系統なのよ! みんなが賞賛してくれるんじゃないの! ? 始祖の再来だって!!

それが何で他に3人もいるのよ。 陰謀って何よ!!」

「ミス・ヴァリエール。 落ち着きなさい。

祈祷書については、王城に問い合わせれば良いでしょう。

中身は白紙の祈祷書との事ですので、ある意味解りやすい目印ですからな。

……この指輪もお貸ししますぞ。 わたくしが持っていても意味がないですからな。

ただし! 虚無の魔法を覚えても悪用をしないというのが条件ですぞ!」

「えっ? 良いんですか?

でも、これはこの平民が言ってるだけで、本当に……その」

「その指輪は本当に名前が『炎のルビー』というのだよ。

始祖の秘宝に関するものだとは思ってもいなかったがね。

もはやマスオ君を疑う余地は無いだろう。

それにしても、本当にこの世界のことが解るんですなー。

すこし、日本という世界に興味が湧いてきましたぞ」

「ええええええええええ！！
本当に、本当にこれは始祖の秘宝な
んですか！？？」

まさか、この平民の肩を持つてゐる訳じゃ……。
つて、ありえない
ですよねえ。

まあ、いいわ平民。先生がああ言ってるから信じてあげるわ」

「ふー……平民じゃなくてマスオなマスオ。」

日本は世界の名前じゃなくて、国の名前だって。

あと俺達の世界には名前なんて付いてないんだよ、せんせー。

惑星の名前は『地球』って付いてるけどね」

「ふん、貴族も魔法も無い野蛮な世界なんですよ。」

あたしは興味ないわ。

…まあ、いいわ。

「今日の虚無の曜日に王城に行って、王女様に祈禱書を見せて頂きま

「それでは、解散いたしますぞ。」

魔法の知識については、ミス・ヴァリエールに聞くように。

彼女は優秀な生徒ですからな。まあ、使えるようになるとは思いませんがな。

あと、サイト君もマスオ君も食事や部屋が必要でしょうから、学院にお金を入れてもらいますぞ」

「やっぱり必要なのか（ね）」

アタシとサイトとマスオが声を揃えて言う。

「当然ですな！ 部屋を共同で使うなら部屋の分は免除しますが、

食費は必要ですぞ」

「ゴチになりまーす！」

「何よそれ！
ム力つくわね！」

あああゝゝゝ！
痛い出費だわ！
お父様になんて説明すればいいのよー！？」

「普通に『食費が3倍かかるから、仕送りお願いします』じゃ駄目なのか？」

「良いわけ無いでしょー！ー！ー！ー！ー！」

SIDE
マスオ

「おいっ！ 見てみろよ！！」
うっひゃーマジかよ。信じられねえ」

というサイトの言葉を聞いて、サイトが見ている窓の外を見ると、月が出ている。

日本……というよりは、地球でというべきだろうが、それと比べるのがおこがましいほどの巨大な月が見える。

それも、赤と青の月だ。

知識としては知っていたが、実際見るとなると初めて見た魔法に次ぐビツクリ具合だ。

ちなみに、いま居るのはルイズの部屋。

部屋に案内されて来る途中出合ったメイドさんに、布団を2セット頼み、運び終わったのが今さっきだ。

本物のメイドさんに合った後の、俺とサイトの共通認識は本物は有り難味がない……だった。

後、実はずっと悩んでいたのだが、ルイズの部屋に入るとき「クンカクンカ テンプレ」の一節でも言うべきかと迷ってた。

確かにネタ的にはおいしだろうが、ここは異世界……だーれもそんなネタは知らない。

その中で、あのテンプレを言うのは、ここで生活する以上死活問題に繋がりがねないため俺は諦めた。

たしか、俺のノートPCの中に別作品のテンプレが入ってたはずだから、これをサイトに読ませてから、やってみようと思う。

ただ、やはりというかなんと言うか、おれが飛ばされた時間とこちらの時間ではかなりのズレがあるようだ。

腕時計をおおよその時間で合わせていると、ルイズが信じられないという風にこちらを見ている。

何？ と問いかけようとすると、

「マスオあんた犯罪者だったの！ それ手枷でしょ！！ もーっ、信じられない！！」

という、こっちが信じられない言葉が飛んできた。

「「はあ？」」

おれとサイトは思わず顔を見合わせたが、その視線みると俺の腕時計に向いていた。

その直ぐ後にどちらともなく噴出し、笑い出したのは言うまでもない。

お腹を抱えて笑う俺たちをルイズは最初ポカーンと見ていたが、「先生を呼んでくる!!」とか言い出したので、この説明をするハメになった。

「ぶふっ! くくくっ……ははーはははー……、ふーふー、いあいあ、ルイズ、マスオのこれはそんなモンじゃねーぜ。これはな、腕時計だ。時計だよ時計。」

黒くて腕に填めてるが、手枷なんていう……ぶはー!! ははははっ!! はらいてー!! くく、ものじゃないから安心しろって! 手枷だよ!! ひーっひっひひひひ!

サイトが苦しげに笑いながら、それでいて要点を説明したためかルイズもドアの取っ手から手を離れたが、それでも信じられない顔をしている。

俺が腕時計を外し、それをルイズに渡すとおっかなびっくり受け取ったが、それを眺めているとさらに信じられない顔をして問いかけてきた。

「なによこれ! なにか文字……が変ってる? これは一体なにによって……!」

サイト! あんたコレが時計ですって? 嘘つかないで! 針がないじゃない!」

「くくくくっ……ふーふー、それはデジタル時計っていうタイプだね、数字で時間を表してるんだよ。」

大きい数字の左側が時間、点を挟んで右が分。小さい数字が秒をあらわしてるんだよ。

だから、決して手枷なん、なんかじゃ……ぶっくくくく、ははは

「ははっ！」

俺もルイズに説明する。

が、最後に手枷じゃないと言おうとしたら、またしても噴出してしまった。

それはどうやら、サイトも同じ見たいで、二人ともまたしても笑い出すのだった。

「わかったから、笑うのをやめなさい！！！」

………

………

…

「信じられないわ……。」

あなた、自分の世界には魔法が無いって言ってたわよね！ 騙したの！？」

「魔法じゃなくて、科学っていうんだよ。魔法の言い変えとかじゃ無いからな。」

えっと、物が上から落ちたり、電氣いやさ雷が高い所に落ちやすいと言った法則を使う技術のことで、だれでも使えるものが科学なんだぜ」

サイトが簡単に科学について説明するが、ルイズは意味がわかってない様で考え込んだり腕時計を見たりしている。

やがて、自分の中で折り合いがついたのか納得した表情になった。

「魔法だって法則があるわよ。 系統魔法はルーンを唱えないといけないとか、杖を身に付けて無いと駄目とか。

貴族にしか使えないから、マスオの言う科学の定義には入らないのでしょうけど。

ああ、科学ってのは要するに、魔法の使えない平民の知恵って所ね」

妙な返し方をされて思わず言葉に詰まってしまった。

詭弁だ！ と言ってやりたいが、この世界には魔法がある訳で。

説得力を持たせられる説明は、本物の魔法使い相手には厳しい。

「科学者の皆さん、偉大なる先人よ申し訳ございません」

いつか、この世界の魔法と呼ばれる技術も科学して見せようと心に誓った。

もつとも、俺が科学者かと言われれば否定するし、作った装置は再現性も無い『なんちゃって科学』の産物だったりするが。

「あー、もう！ いきなり空に向けて謝りだすなんて、変な奴！」

「と言うわけで、魔法を教えてください」

ポケットを漁るとメモ帳とペンが見つかったので、それを取り出しルイズに講義をお願いする。

サイトも興味があるのか、ルイズに注目している。

「何が、と言うわけか解らないけど、時間もあるし約束だから教えるわ。

まず、平民は貴族と魔法には絶対に敵わないから、杖を向けられたら……」

「いやいやいや、そういうものじゃなくて。

杖の契約の方法とか、ルーンの唱え方とか、魔法の種類とか、心構えとかだって！」

「あきれたわ……。 やっぱり、魔法を使おうと思ってるんじゃない。

良い？ 何度も言うようだけど、平民には魔法は使えないの。

マスオ、あなたの世界にも魔法があって、あなたも使えたとかなら、貴族という条件は100万歩譲って撤回してあげるけど、そうじゃないわよね？」

そもそも、魔法と言う存在すら無いんだからと続ける。

出来の悪い生徒に教え諭すように言われて、少し心が傷ついた。

「まあ面倒だけど、早々に諦めてもらった方が、今後言われなくて済むだろうから、仕方ないから教えるわ。

まず、心でイメージしたものを、ルーンを唱え外部の精霊に念じて伝える事で、望んだ場所にイメージした現象を起こす事が出来る者をメイジと呼ぶのよ。

魔法を使うためには、杖を持っていないと駄目なのだけど、只の杖では駄目よ。

ああ、例外がいたわね。 エルフは杖が無くても魔法が使えるわ。

私達は先住魔法と呼んでるわね。

続けるわよ。

杖は契約しないと使えないわ。 それに、自分に合った物を使うのが一般的ね。

契約には時間が掛かるわ。 契約の方法だけれど……。 ここ迄で何か質問はある？」

メモする手を止めて、質問を考えてみる。

いくつか疑問が浮かんだので、それを聞こうとしたその時、ルイズがおれの持つてるものを見に来た。

「そういえば、マスオのそのペン変ってるわね。それにインク壺がないじゃないの？」

ちよつと見せてみなさい…って、何よこの落書き…！」

メモ帳を覗きこんだルイズがいきなり怒り出した。

「へ？ 落書きって、これがか？」

確かに綺麗な字じゃないが、落書き呼ばわりされるのは心外だぞ」

「もう、信じらんない！ 一生懸命教えてあげてたのに、あんたは落書きしてたなんて！」

何が落書きと言われたかいまいち釈然としなかったが、所謂ガイジンには日本語は複雑な文字に見えるという事を思い出して納得する。

「これが、俺の国の文字だ…の…！」

「嘘！ だって、同じ形の文字が一つも…たまに見えるけど、ほとんど全部違う形じゃない…！」

「あーっと、ひらがなとカタカナがそれぞれ51音で計102音。こっちで言うアルファベットだな。

それと、漢字と呼ばれる象形文字…ルーンが確か50000文字ぐらいある」

サイトが意外な博識を発揮して、ルイズに説明するが、一瞬ポカーンとした後やはりというかなんというか、やっぱり怒ったのでした。

「はあっ？ 50000文字？ そんな言語があるわけ無いでしょ
ーーーー！！」

「俺も信じられんが、本当の事なんだーーーー！！」

魔法が使いたい！

／SIDE サイト

「ウル・カーノ（発火）！　ウル・カーノ（発火）！！」

マスオが布団の上で横になったまま、天井に指を向けてさっきルイズから教えてもらったルーンを唱えてる。

たしか、火を出す魔法だったと思うが。

じつは、俺もさっきまで練習してたが、まったく出る気配がなくて諦めた経緯を持つ。

溜息をついていると、ルイズも起き上がり……睨んでくる。

「あのね。　そう簡単に平民が魔法をつかえるわけないでしょ。

只でさえ、平民は魔法を使えないのに、あんたはまだ杖の契約すらしてないのよ？

魔法が出るわけ無いでしょ。

まあ、杖があっても同じことでしょうけど。

フワッ…それよりも！　私の睡眠をこれ以上邪魔するなら、私の魔法を見せてあげるわ！」

たしか、このルイズの魔法（失敗とか言われてるらしいが）は、全部が爆発するらしい。

爆発なんて物騒なものを食らいたくない俺たちは、コクコクと頭を縦に振って大人しくするのだった。

俺も、もう今日は寝ることにして、寝る前にマスオとトイレに行くことにする。

トイレの場所は、先ほど聞いておいた。
この棟のトイレは全て女性用なので、1Fに降りて平民用の宿舎にあるトイレに行け、と。

「トイレすらも平民と貴族を分けるとはね。俺には理解できん。大体だな、俺はトイレが近いんだよ。遠く離れた場所に行くのは面倒すぎる……」

マスオはそう呟きつつ、階段を下りる。

ふと気が付くと、奴はメモ帳を持ったままだった。

ぶつぶつと「魔法の呪文が英語みたいなドイツ語みたいな、この感じは欧州系？　みたいというか、そんな感じがする。まさかねえ」等と呟いてる。

不思議といえば、こいつも不思議な存在だ。

俺のいた世界とは違う平行世界？　みたいな所から来たという奴。今度深く追求して、隠している事を吐かせようと思う。

……

……

…

「うーん。そうだな、考えていても仕方がない。やってみるしかないか！」

と、用を足した後、部屋に戻る途中マスオが言い出した。

俺は何のことかわからず、何が？　と返すしかなかった。
マスオから返って来る言葉も、半分は意味がわかったが、半分は何が言いたいかわからない。最初は解らなかった。

だが、後になって思う……。

この日、異物である俺たちの話しは、先ほどルイズから教えてもらった魔法の授業を覆す……それこそ『魔法』の始まりだった。

「サイトはさ、『ネギま!』ってマンガ知ってるか？」

「おう、知ってる、知ってる。あれ面白いよな!　というか、マスオの世界にもあったんだな!」

「まーな。あーんな感じで魔法が使えるば、この世界でも生きていきやすいと思ったんだがなー。

さっきから考えてたのは、その『ネギま!』で出た、呪文が使えるのかな?　とか考えてたんだよ。

こーやって、指を振りながら、プラクテ・ビギナル〜って」

その続きの言葉も俺は知っていた。

じつは、自分でも試したとは言わない。だって恥ずかしいじゃないか。

でもまあ、ここは魔法の世界らしいし、やっても悪くないと思い、思わず気軽に口に出していた。

「「アールデスカット! (火よ灯れ) ってな〜」」

指をマスオに向けて (無論、マスオも俺に向けてる) お互い指差し合い、そして笑い合う……予定だった。

お互いの指先に火が灯るのを見るまで……は。

着いた火は直ぐに消えたが、俺たちにはそれで十分だった。

顔を向け合い、言葉が出ないので必死にジェスチャーで何かを伝え合う。

そして、いまの出来事を反芻する。

……！？ えええ！！ 魔法だ！ 魔法！ 俺達が魔法を使った！？

頭から一瞬で落ちた血が、また一瞬で頭に戻る。眩暈と吐き気に耳鳴り、そして喉の渇きがあるが、じっとしては居られない。すぐさま、俺達は走り出した。ルイズの部屋に！

「ルイズルイズルイズっ！！」

階段を一気に駆け上り、ルイズの部屋を確認してドンドン！とドアを叩き、俺の部屋でもあった事を思い出し、ノブをひねり中に駆け込む！

「魔法だ魔法！ 魔法が魔法が！！！」

自分でも、何を言って何をしてるのかわからないが、とにかく落ち着いては居られなかった。

が、ムクリとベッドから起き上がったルイズの目を見て、またしても、頭から血の気が引いた。

「いい加減に寝させなさい！！」

今日、この日、ここに来たときに聞いた覚えの有る爆発音が、部屋に響いた。

……

……

：

「で！？ 私の至福の時間を邪魔してまで、あんた達が言いたかったことは、私の魔法を食らいたかった……訳じゃないわよね？ そうでしょ？ そういいなさい！」

音と衝撃で倒れた俺達を見下ろし、ルイズが恐ろしい目で睨んでくる。

耳が爆発音でバカになっていたが、回復を待っていたかのように質問をぶつけてきた。

この質問に答えられないと、また魔法を食らう羽目になると、なんとか判断した俺はすぐさま立ち上がり、理由を説明する。

「ままま魔法が、いや、違う。大丈夫だ。んっんっん！ 実は、魔法が出たんだ！！」

危険な雰囲気で見つてくるルイズを真正面から見ながら一息で言う。

「そりゃそうよ！ いま私が魔法であんたを吹き飛ばしたんだから！ って、私の部屋が！！」

あんたね！ ちゃんと片付けるのよ！！ もういいわ、私寝る！！」
理不尽な命令を出して、寝ようとするルイズに待ったをかけ、説明を行う。

また、先ほどの危険な雰囲気を出す彼女にビビりながらも、事情を説明する。

話を聞いてるうちに、ルイズは俺を可哀相な者を見る目で見つめてくるが……証拠を見せるのが手っ取り早い！

「いいか、見てろよ。……プラクテ・ビギナル　アールデスカット（火よ灯れ）！！！」

再び、おれの指先に火が灯る。　今気がついたが、指の上に火がでてるが指が焼けるようには熱くは無い。　精々暖かいぐらいだ。

ルイズはポカーンとした表情を浮かべたが、やがて気が付くと、火に手を翳し……すぐさま手をどけた。

「っ、あつつう……！　うそ！　これ、魔法の火よ。　なんで……ルーンも違うのに……？」

手を押さえつつ、呆然とするルイズ。

火が消えるのを待って、詰め寄ってきた。

「ななっとななんで、平民のあんたが魔法を使えるのよ！　おかしいじゃない！！」

「俺にもわからんが使えてしまったんだよ！」

「ルーンも違うのに、どうして火が出るのよ！？」

「それはだな！　……なんでだろう？　わかるか、マスオ」

ルイズの魔法から漸く回復したらしいマスオが起き上がるところだったので、尋ねてみたらガクッと崩れそうになった。

言いたい事はわかるが、俺だって考えてみたが解らなかったんだ。

こういう訳の解らん事は、同じく存在からして訳がわからんマスオに尋ねるに限る」

「サイトお前なあ。

それは俺からも言えるんだぜ、訳が解らん存在ってのは」

いつの間にか、俺まで魔法に掛けられてたらしい。

まさか、考えてることがバレルなんて。

しかし、これだけは言ってやらないと気がすまない。

「何で俺の考えてること知ってるんだ？　それも魔法か？　ずりいぞ、プライバシーの侵害だ」

「「しっかり口で言ってたんだよ（わよ）！！」」

／SIDE　ルイズ

マスオから説明された魔法が使える理由というのは、俄かに信じられないものだったわ。

だって、話を聞く限り『漫画』とかいうお話の中で出た、魔法のルーン……いえ、呪文だったのよ？

しかも、マスオが言うには……

「あと、どうやらこの世界の魔法のルーンってのは、ドイツ語とかの欧州系みたいな雰囲気がある」
とか言われても、さっぱりだわ。

サイトも「そういえば、今までこの世界で会った奴は、全員ヨーロッパ人っぽいな」とかい出し始末。

大体何よ？　そのヨーロッパって？

「ヨーロッパってのはあれだ。　イタリアとかドイツとかオランダとかフランスとか、そんな感じの国が集まった地域のことだったよ
うな気がする。」

え？　おれの国の地域の名前じゃねーよ。　地球って言って、星の中に国が幾つもあってだな……」

「星、ですって？ それって、あの空で光ってる星よね？ あんな真っ白くて小さいモノがあんたの言ってる世界なの？ あんた達、頭大丈夫なのかしら……」

「「ぶっ！！ くくくっ！！」」

ま……また、こいつらは笑い出すし！
いい加減にしなさいーい！！

……

……

：

「と……とりあえず、話を戻してだな。

俺等が使った魔法なんだが、それはヨーロッパって地域で昔使われてた、『ラテン語』っていう言語なんだよ。

その『漫画』って物語では、魔法の言葉はラテン語で書かれてて、それを言ったら発動した、という訳だよ」

むむむ。

マスオが言うには、ラテン語とやらが重要なようだ。

平民の彼らでも魔法が使える？

そそそそそ、それって！ 私でも使えるってことじゃないかしら？
幾ら私が虚無の属性って言っても、マスオが言うには目立つから使えないって言うし……。

虚無が使える私ですもの、平民が使える魔法ぐらい使えるはずよ！！
となれば……。

「そそそそつ、そのラテン語とやらの呪文を教えなさい!!
いえ、そういえば、さつきサイトが唱えてたわね。えくと、プラ
クテ・ビ、ビギナル? アゝ……」

「「まった!!!!!!」」

気合を入れて呪文を唱えようとしたら、サイトとマスオが同時に止
めてきたわ!

なによっ! 折角、私が平民でも使える魔法を使おうとしてたのに、
二人して水を差すなんてっ!!!!!!

「「爆発したら危ないだろ!!」」

またしても同時に危険性を訴えてくる、私もすかさず反論するわ、

「私が平民でも使える魔法を失敗するとしても言いたいわけ!？」
と、睨むと二人は何やら相談を始める。

何やら押し付け合いをしだし、やがてマスオが神妙でいて態とらし
く慇懃無礼に話し始めた。

「えくと、なんと言うかですね、我々は先ほどルイズ嬢が使われた
魔法に恐怖しており、可能であれば至近では受けたくない、そう
思っ居るのであります。

ですので、どうしても魔法を使われるのでしたら、どうぞ、広い広
場等で使われるのがよろしいかと存じ上げ奉ります」

「ようするに、あんた達、また私が失敗するって言いたいんでしょ
ーがー!!!!!!」

私が杖を振り回しながら、二人を追い掛け回したのは言うまでも無
い。

「ふー、ふー、解ったわよ。私も早く魔法使いたいし、窓から杖と手だけ出して外に向かって使うわ。それならいいでしょ。まったく、面倒だわ。

いくわよ……！ プラクテ・ビギナル アールデスカットオオオオ（火よ灯れ〜）！！」

次の瞬間、巨大な火の線が向こうに伸び……た？
うそ！ 爆発は、してない！！ けど、なによこれ……！！

「ちょっと！ なによこれ！ 普通に火が着くんじゃないの？ なんでこんなに、すごい火がでてるのよ！！」

以前、火のトライアングルの先生が見せてくれた火の魔法でも、こんなに大きな火は出なかった。
しかも、火の勢いがすごくてウルサイ。

どうしたらいいのよーっ！？ と、慌てようとしたら、火が消えた……？

「「「ふいーっ！」「」」

思わず3人そろって汗をぬぐったわ。

部屋でやってれば大惨事になるところだったもの。

寮に住んでいる生徒達が窓を一斉に開けて、音の出所を確認した後、文句を言いながら窓を閉めたわ。

『いい加減にしないよ！ ゼロのルイズ！！』

『もう、夜中まで騒がないでよ！』

『早く退学にしてほしいわ!』

「うううう……っ……爆発はしなかったけど、平民でも使える魔法を失敗するなんて、どうしたらいいのよー!!」

私はやっぱりゼロなんだわ……と続けようとしたら二人が

「「魔力込めすぎ」」

とか、言ってきたわ。

そもそも、魔力って何よ？

「魔力ってのはあれだ……ああ、こっちの世界じゃ精神力とか言うんだっけ。　それが多すぎたんだろ、今のは」

む？　マスオが言うには魔力ってのは精神力のことを言うみたいね。

「いやー、びっくりしたな。　それにしても、こっちの世界じゃ、魔力とかMPとか言わないで、精神力？　って言うのか？

第二次の時の日本に魔法があれば、最強だったのにな」

サイトも同じようなことを言ってるみたいだけど、『えむぴー』って何よ？

それに、第二次の日本？　　日本はあんた達の国らしいけど、あれば何が変わるっていうのよ？

まあ、それはおいといて、いまの魔法は精神力が多すぎってのが二人の共通意見だそうだけど、私は普通に魔法を使っただけよ？

「あれだ、今度は俺たちみたいに、杖を使わないで、更に精神力って奴？　を物凄く少なくして使ってみろよ」

いま気になる台詞が出たわ。

杖を使わない？

そ、そういえば！！

「あんた達、杖を持ってないけど、どうやって魔法を使ったのよ！
？ まさかエルフ？ 先住魔法なの？ コレ！？」

「はあ？ 俺たちがエルフに見えるのか？ べつに、耳はとんがってないぜ。
そういえば、杖が必須とか言ってたな……？ けど、杖なんてつかってないしな」

この平民二人がエルフかどうかは、大きな、物凄く大きな問題だけど、とりあえず今は横に置いておきましょう。

まずは、あたしの魔法よ。

うーん、っと考えた末、杖を腰に挿して手を窓の外に向けて、さっきと同じ呪文を唱える。

今度は、精神力とやらを少なくして、というかどうかやるかはわからないんだけど。

「プラクテ・ビギナルー アールデスカットオ（火よ灯れ）ー」
さっきよりも心持ち気合を少なくして魔法を使ってみたわ。

目の前には……轟々と燃える炎。 たしかに、さっきよりかは火の勢いもかなり弱いけど。 それでも大きい。

「もっと、精神力を減らせよー！！」

と、サイトの言葉に解ってるわよ！ と答えつつ、精神力とやらを少なくしていく、気分的に。

だって、どうすればいいか解らないんだもん！

やがて、炎は大きくなったり小さくなったりを繰り返しつつ、あたしもコツをつかんだようで、それすらもコントロールして行き……。

「で、できたわ！！ やったーーーー！！ 出来たのよーーーー！！
ああ、これがアタシの魔法……」

手の先には、小さな火が踊っている。
間違いなく、あたしの作った炎。

例の二人が「「おめーーーーっ！！」と訳のわからない事を言
って騒いでるけど、今は何も気にならないわ。
でも後で必ずやる、と心の中で誓い、手の中の炎を抱きしめようと
して、思わずのけぞるあたしだった。

／SIDE サイト

「それで、マスオ。 あんた達二人いや、あたしもなんだけど、杖
も使わずに魔法が使える理由って解ったの？」

「それなんだが、いくつか仮説を立ててみた。 検証の仕様が無い
から本当かはわからないんだが……」

ルイズの問いに、マスオが歯切れ悪く酔っ払った口調で答える。
そう、俺等は今、ルイズに最高級だって言われて出されたワインを

飲みながら話してるんだ。

行き成りダンス？　を開けたと思ったら、ワインとグラスを持ってきたルイズ。

そして、こんなことを言い出したのだった。

「飲むわよ！　いえ、あんた達も飲みなさい！　これはタルブで取れた最高級のワインよ！

この今日という日に飲まないで何時飲むって言うの！？」

「いや、俺達はまだ未成年だから…」

「私は飲めと言ってるのよ？　あ・た・し・は命令してるの。判ったら……とつとと、グラスを持ちなさい！！！」

というわけで、俺等は揃って酒盛りしてるというわけだ。

かなり酔いが回ってるところに、ルイズがさっきから聞きたがった理由を話せと言ってきたわけだ。

「俺たちは今一体、何語……いや、やめておこう。

まあ、それは良いとして、召喚の影響なんか知らんけど、俺たちはこのハルケギニアの言葉を喋ってる。ここまでは良いよね？　ルイズやさっきのコツパゲ先生の言葉も理解できる様になっている。でも、魔法のルーンと違って、外国語に聞こえるよね？」

「サモン・サーヴァントの影響で、使い魔が人間の言葉が話せるようになるという例は沢山あるわよ？

別の世界の人間にもその例は漏れてないようだし。

あと、魔法のルーンはルーンでしょ。それ以上でもそれ以外でもないわよ？」

何かを言いかけたマスオが言うのをやめた後、質問には答えず、自分の質問を解りやすく尋ねる。

それに俺が答えるより先に、ルイズが答えた。

確かに呪文は呪文だもんなー。意味不明でも問題ないんじゃない？俺等が使えたラテン語の呪文じゃないんだし。

でも、さっき教えてもらった呪文の内のいくつかって、聞き覚えがあるんだよなあ……どこだっけ？

「まあ、それはそうなんだよ。でも、俺も外国語は不得意なんだが、気がついちゃったんだよなー。

例えば、火のルーンって言われてる『ウル・カーノ』だけどさ、これアルファベットで書けば、ヴォルケーノって読めるんじゃないか？」

「！！！！ その単語は知ってる！！

「まさか、噴火か！！」

「ちげーよ！ 火山って意味だよ。 たしか……」

マスオも自信がねーのに、違うとかいうのかよ。

噴火だ火山だのと二人で言い合ってたが、埒が明かない。

「とりあえず、噴火とか火山それに溶岩とか、共通の火とか炎のそんなイメージで良いんだな？

たしかにそう考えると不思議だな」

だろ？ とマスオ。他にも、数点符号しそうな魔法を列举するが、解釈というか訳の違いで、言い合いに何度もある。

「あたしにも解るように話さないよ!!」

「解ってる。つまり、こっちでいうルーンってのは、地球の……さっき言ってたヨーロッパ辺りの言葉に変換できる物もあるという訳だね。」

コモン・マジックって奴は、まさしく英語その物だし。

で、それらよりも更に古い言葉であるラテン語なら、どうかなと思っただけだよ」

ここまで喋って、マスオはワインを口に含む。

たしかに、コモン・マジックを教えてもらったときはなんで英語なんだ？ と疑問に思わなかったわけではない。 本当だぞ。

ちよつと試して使えなかったから、記憶から消し去ったとかそういうわけじゃないからな。

で、とマスオが続ける。

「つまり、杖を通すことで、無理やり？ アバウトな感じで魔法を発動させることが出来て、さらにはさっきみたいに増幅とか出来るんじゃないかと思ったわけだよ」

その答えを聞きながら、あっ！ と思ったことを言ってみる。

「つまり、杖は増幅を行う、アンテナみたいなもんか？

そのアンテナに精神力を通すって方法がわからないから、いままで魔法使って奴以外は使えないとおもってた、見たいな感じで」

マスオは俺の問いにうなづく。

そして、ルイズが質問する。

「アンテナとか無理やりとかアバウトっていうのが良くわからない

んだけど、増幅ねえ……確かにさっきやった感じ、それっぽいわね。それじゃ、私が魔法を使うときに爆発するのは、なんでなの？」

「うーん、これは俺の完全な憶測なんだけどいい？」

俺は精霊とか目に見えないものは信じないんだが、魔法がある以上あるというしかないんだよね……。

で、その精霊に本当は発動しない呪文、ルーンで巨大な精神力を無理やり増幅して伝えたらどうなると思う？

サイトは、精霊をそうだなーナノマシンとかに置き換えて考えてみて欲しい」

ナノマシンって何？ 　って悩んでたルイズだが、サイトと一緒に悩み始め、あっ！ 　と一緒に顔を上げた。

「「爆発（暴走）する！！」」

俺とルイズ二人の答えはそれぞれ違っていたが、概ね似たような答えだった。

なるほどなあ……そういう風に考えることが出来るわけか。

「じゃ、じゃあ、あたしがその、杖を使わずに系統呪文を使えば成功するっていうの？」

「成功するかもしれない。　しかし、しないかも知れないね。　それに、成功しない場合は別の理由が考えられるんだ」

ルイズのその切実な問いに対するマスオの答えは渋いものだった。おれはその別の理由に心当たりがあった。

というか、さっきのナノマシンの説明でなんとなく察しがついた。

「つまり、虚無の属性って奴を持ってるから、波長とか信号みたいなモンが、普通とは違う可能性があるって言いたいんだよね？」

「むうううううう！！ 嬉しいようで、嬉しくなーい！！」

……

……

…

「ああ、そうそう、忘れてたけど、あんた達魔法を使うなら、何か手に持って使いなさいよ。

このハルケギニアでは、杖もなしで魔法を使うのはエルフぐらいしか居ないんだから、人間がそんなことやってると、アカデミーにとっつかまって実験の日々よ。

そうになったら火をつけるぐらいの奴じゃ、どうにもなんないしね」

ワインのボトルを3本開けた頃、ルイズが突然そんなことを言い出したのだった。

当然俺たちは杖になるモンなんざ持ってないし、アカデミーとやらにつかまるのも嫌だ。

攻撃魔法。 攻撃魔法だ。

あの作品には、攻撃魔法が沢山出てくる！ どうして、いままで使わなかったのかが不思議なぐらいだ、早速……と思っていると、マスオが始動キーみたいなのを唱えだした。

こいつもかなり酔っ払ってるようだ。 アイ・アム・プロビデンスとか言ってる。

慌てて、ターゲット（目標）ターゲット（目標）は！？ とルイズに尋ねると、なんと、窓の外じゃなくて、壁を指差している。なんでも、固定化って魔法が掛かって、物凄く頑丈なんだそうだな。なら大丈夫だな。 と、マスオの方を見ると、詠唱に入ってる。

それにしても、お前自分の始動キーとか作ってたのかよ、痛い奴め！

「えーっと、ウナ スピリトゥス ルークス（光の精霊1柱）、コエウンテース（集い来たりて）、サギテント イニミクム（敵を射て）、サギタマガカ（魔法の射手） ウナ ルークス（光の1矢）！！」

と、恰好？ つけて言いながら、例の壁を指差す。

すると、光の弾みたいなのが空気を切り裂く音を出して、壁に向かう。 次の瞬間、――衝撃が走り、そして空気の振動がやってきた。壁は魔法の威力を物語るように、ヒビが入っていた。

「「「おーー！！」」」

俺等3人は思わず感嘆の声を上げるのだった。

次は俺の番だー！ と呪文を唱えようとすると、隣の部屋のドアが勢い良く開く音が聞こえ、次に急いで走ってくる音、そして、この部屋のドアを連続して叩く音が聞こえる。

そして、ドアノブが回され、髪の毛が赤くて、胸のでかい褐色肌の女の人が入ってきた。

「ルーズー！！ よくも、私と私のフレイムの語り合いの時間を邪魔してくれたわね！

私になんの恨みが……って、一杯あったわね……。

「だいたい、こんな夜に、あんた何してるのよ」

赤毛の褐色肌の女の子が俺の頭越しにルイズを睨みつけ、指を突きつけてる。

だが、酔っ払ったルイズは、きよんとして理由を話します。

「何って……魔法の練習だけ？」

「ゼロのあんたが練習するのはわかるけど、部屋でやらないでよ! どっかんどっかんうるさくて、眠れないじゃない」

ゼロのあんたじゃ今の音も納得だけだね、と笑う褐色肌の女に、ルイズの目がつりあがって来る。

「だったら、見せてやろうじゃない！ 私の魔法を……ね！」

笑うのをやめて、あわてて距離をとるキュルケ。

「ちよつと、冗談じゃないわよ！　ま、待ちなさい！　まって…」
「いくわよ！　プラクテゝ・ビギナルゝ　ウル・カーノ！！！！！！
あ、まちがえ」

ド
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ン
!
!

本日3度目の爆発魔法が、ルイズの部屋で炸裂した。

今まで見た中で、一番気合の入った爆発だ……と、今日を振り返り俺は意識を手放すのだった。

学生のお仕事

／SIDE マスオ

なにやらフローリングに、直接寝てたような感覚を覚えつつ、意識が浮上してくる。

やはりと言いかんと言いか、起き上がると体のあちこちが痛い。それに、さっきまで見ていた夢を思い出し、笑いそうになるというお約束を犯しそうになるが、周囲の様子が見えてるので……色々と諦めた。

伸びを一発……体からボキボキという、不健康そうな音が聞こえてくる。

その音に起こされたのか、残る3人も目を覚ましたようだ。

「つつつ、体が痛いわ……。どうしてあたし床で寝てるの……？」

「んっ、イタタタタ。ちょっとルイズ、忘れちゃったの。」

あんたが部屋で魔法を使った所為でしょうが。まったく、巻き添えにしないでよね」

「ふぁ~~~~！　いてててて、ひでえ目にあったぜ。」

これまでの最悪の目覚めシリーズの一位を記録するぐらいだ」

「おー、起きたか。俺もいま起きたところだ」

「って、あんただれよ！！　何で、男が二人も私の部屋にいるのよ！？

って、昨日召喚した、えっと、サイトとマスオか。
えっと、どっちがどっちだっけ？」

「朝っぱらからお約束をありがとう。名前を忘れられる以上に悲しいことは無いんだぜ」

「召喚した〜！？ てことは、この二人はルイズ、あなたの使い魔って訳？」

人間を使い魔に？ また、妙なことをするわね、とキュルケが呟くがルイズは聞こえてないようだ。

ルイズが寝ぼけた顔で、タンスを指差す。

そういえば、そういうイベントもあったなーと思いつつ、軽く睨む。

「んじゃ、下着はそのタンスに入ってるから、着替えさせて……」

みなまで言う前に、キュルケがビックリしながらルイズに詰め寄る。

「ルルルルルイズ！！」

「なによ？ わたしは、早く着替えたいのよ」

「男に着替えさせようとするなんて、何考えてるのよ！！ しかも、こんな朝っぱらから！」

「キュルケ、あんたも貴族ならわかるでしょ、貴族は下僕が……って、マスオ何睨んで……ああ、そうだったわね。って、あんた達は外行ってなさい！！！」

そういつて、ルイズは自分で着替え始める。

「ちよっ！ まっ、ルイズ、あんた何かこの平民に弱みでも握られてるわけ？」

このやり取りに、疑問を持ったキュルケが尋ねるが、一緒に追い出されてしまった。

外に出た後も、俺たちにキュルケが尋ねてくる。

「んで、どんな弱みを握ってるのよ？」

無視して嫌われるよりは、答えて仲良くなるほうが良いと判断して、当たり前障りの無い部分だけを伝える。

ルイズはキュルケの真意を知らないなので、良い顔をしないだろうが……。

「ああ、俺たちが名義上、ルイズの使い魔として契約するときには、色々条件出して契約したんだけど、その時に、奴隷や使い魔やそれに準ずる立場として扱うなっ」と。

そして、お互の尊厳を尊重して接しましょう。

って取り決めたんだ」

俺が、このように話すと、キュルケは信じられないものを見た顔で、俺を眺め、

「あなた度胸あるのね。この世界で、貴族とそんな契約結べる平民なんて見たことないわ……」。

それで、あんた達の名前は？ えっと、あなたがサイトで、こっちのあなたがマスオね。わたしの名前はキュルケよ、よろしく。それにしても、妙な名前の平民ね」

と、呟き自分の部屋に着替えに戻ったのだった。

……

……

：

ガチャリとルイズの部屋とキュルケの部屋のドアが同時に開く。
着替えるのもほとんど同時だったようだ。

「改めて、おはよう。 キュルケ」

「おはよう、ルイズ。」

ああ、あなたの使い魔を見せてもらった代わりに、私の使い魔も紹介するわ。

おいで〜フレイム〜」

その声に反応して、扉の向こうから、でかくて体が燃えてるようなトカゲが出てくる。

なるほど…これまた、予備知識が無ければビックリだ。

ていうか、予備知識があっても、でかくて熱くて怖い！ 今にも襲ってきそうだ。

サイトも思わず後ずさってる。

「どう？ このサラマンダー！ 立派なものでしょ。」

この大きさなら、好事家に見せればいくらでも値が付くわよ」

と、キュルケが自慢を始めるが、ルイズは鼻で笑いこう続けた。

「キュルケー。 自分の使い魔の価値をお金に換算するなんて、どうかと思うわよ。」

それに、いかにもゲルマニアの成金っぽくて悪趣味だわ」

このセリフにキュルケの顔が…：なにも変らなかった。

それどころか、俺達を見て鼻で笑う。 ちよっと悔しくなったのは

秘密だ。

「平民を何処から攫ってくるのよりはマシよ。ちゃんと返してあげなきゃ可哀想よ」

それを聞いて、ルイズが勝ち誇った顔で笑う。

「ふっふーん。こいつらは只の平民じゃないわ。魔法の使える平民よ！」

その言葉にキュルケは驚き、俺達の顔を見る。

俺は一つ頷くことで、それを認めた。

彼女は目を丸くして、ルイズと俺の顔を交互に見る。

「まあ、平民に教えてもらった魔法って言うのが、むかつくけど……

見せてあげるわ！ 私の魔法を！ これでもう、ゼロとは呼ばせないわ……」

それを聞いて慌てたのがキュルケだ。

昨日の夜、そう言って魔法を盛大に失敗して、朝まで床に寝る羽目になったからな。

慌てて止めようとしたが、ルイズは杖を振り回しもう詠唱を始める。

こうなっては止められないと、キュルケは腰を下ろし、腕で顔をかばっている。

あっと、ルイズが忘れてないようにアドバイスを入れておこう。

「ルイズルイズ。気合ね、気合」

「うっ！ わかってるわよ！ プラクテ・ビギナルー アールデス

カット（火よ灯れ）！」

爆発の音と衝撃がこないのを不思議に思ったキュルケが顔をあげる
と、そこには、

「うそ！ 杖の先に火が付いてる……！？ あつっ！！ 本物の火、
よねえ……？」

「ふっふーん！ どうよ！ 私だって本気を出せばこのくらい……」
「ルッルイズ！ おめっ、いえ、なんでもないわ。 わわっわわた
し、先に食堂に行くわね」

と言って、フレイムを連れてスタスタと先に進んでしまった。

「ちょっとキュルケ！ んもう！ 折角私の魔法見せたのに……。
それに、そっちは食堂じゃないわよー！！！」

／SIDE ルイズ

「ここが『アルヴィーズの食堂』よ。 私の席は、つとあそこよ」
「うへー、朝っぱらからすごい食い物だな。 見てるだけで胸焼け
しそうだぜ」

といいつつ、やたら機嫌の良いサイトが私の席を引いてくれる。
ありがと、と返しつつ、あたしは大事なことを思い出したのだった。
それは彼らの食事の用意を頼んでなかったこと。
あっちゃーと思いつつ、声をかけようとしたら、マスオが足元の器
を指差しているの。

中にはテーブルの上と比べると、悲惨に思えてくるくらい貧しいものが入ってた。

それは本来、昨日召喚した使い魔と一緒に食べる予定のものだったもの。

二人にこれを食べろなんて……流石に言えないわよね。

「ま、まさか、これを食べと、う、嘘だよな？ な！？」

「あつ、ち、ち、違うわ！ えーっと、これは昨日の朝頼んでいたものよ。

ほら、昨日はずっと喋ってたから、二人の席を用意し忘れてたのよ。だから、厨房で何かもらってきて。あとで、あたしも先生に申請しておくから！」

口早に説明したのだけど、サイトはむくくっと、テーブルの上にある食べ物を見てたが、溜息を一つついて、マスオと厨房に向かったのだけど、また面倒なことが起こりそうよ。

だって、周りの級友たちが私とあの二人を見て、ひそひそと言いつてるから。

断じて、あんた達が想像してるようなことはないんだから！

あたしが食事を終え、席を立っても二人は戻ってこなかったわ。

先生にあたしの使い魔……サイトとマスオの食事のことを申請にいつて帰ってきて、彼らは帰ってこなかったの。

ちなみにコルベール先生も、忘れていたらしく、今後のこともあるので厨房にも言っておきなさいと言われたわ。

それに……厨房で出されるレベルの食事でも、二人にとっては今まで食べたことの無い食事の可能性もあるわね。

でも、いつまでも食べ続けられるものでないし、迎えに行つてあげようと思い私は厨房に向かったわ。

「で、ですね、俺等の国では醤油っていう、大豆で作ったソース？
が、主に使われてますね。

まあ、ほかにも作り方とかさっぱりなんですけど、基本的に世界中のソースがありますよ！」

「おっ、世界中とは大きく出たな、サイト。じゃあ、自分の国に帰れたら何か持ってきてくれよなっ！」

「まかせてください！ マルトーさん！」

「「「はははははっ！！」「」」」

サイトの声も聞こえるし、何やら笑い声も聞こえる。

もー、食べ終わってるなら、さっさと戻ってきなさいよね！

「お、ルイズじゃないか。どうしたんだ？ まだ食い足りなくて、
厨房に何かもらいに来たのか？」

あたしに気がついたマスオが軽口を叩いた。

以前のあたしなら、余裕なんてなくて怒鳴り散らしたかもしれないけど、いまのあたしは一味違うわ。

ふ、ふんっ！ まあ、別に平民と貴族を同列に置くってわけじゃないわ。ただ、少しか彼らに歩み寄ろうって……何を思ってるのあたしは！

そうこう考えてるうちに、彼らの顔に恐怖という感情が浮かんでるのがわかる。

今気がついたわ、これはダメよ。

昔、かかさまが言ってたわ。

『貴族は貴族なのだから、畏れられるのは良いの。でも、恐れられるのは違う』と。

あの時は解らなかったけど、あの二人……いえ、サイトとマスオと話してみても、今なら解る気がする。

あたしは、精一杯の努力して、勤めて明るく返事をする。

「ちがうわよ！　いつまでたっても、迎えに来ないから、あたしが態々迎えに来たのよ？　感謝なさい。それよりも、ショーユとかって何よ？」

あたしの言葉で厨房の平……人たちの表情が和らぐのがわかるわ。

「ああ、目玉焼きって、こっちじゃサニーサイドアップとか言うんだろ？　それに、何を掛けるかって言い合いになってだな」

マスオが簡単に説明する。

「目玉焼きに何を掛けるかですって？　決まってるじゃない、塩よ塩！　それ以外認めないわ！！」

「えー、貴族様は塩ですかい、わたしも塩が良いですねえ。中にはケチャップをかけるという奴も居るそうです」

と、コック長。　確かマルトーとかって呼ばれてたっけ。　が、あたしに同調する。

「ケチャップなんて邪道よ！ それと、あたしの事はルイズと呼んでいいわ」

「「「「ええ〜っ」「」「」」」」

つとコック長と料理人とあとメイドが何人がか言う。

そんなに衝撃的な言葉だったのかと、こんどからは考えていおうと心に決めた。

コック長はえ〜とかあ〜とか、言ってるが……意を決して、「それじゃルイズ様と呼ばせてもらいます！」とアタシの目をみて宣言した。

「やっば、お前らぜんっぜんっわかってねえ！！ ケチャップなんざ邪道すぎて、話にもならんぜ。」

いっぺん醤油で目玉焼きを食べば、俺の言ってる事が解るって。

な、マスオも言ってるやれよ。日本人なら醤油こそが最高だと！！」

こぶしを突き上げてサイトが言うが、マスオは気まずそうな顔をしてボソッと呟いた。

「いあ、俺はマヨネーズが……」

「「「「ナイナイ、ナイナイ……」「」「」」」」

「??????」

サイト、コック長に料理人更にはメイドまで、手を振りながら「ない」と連呼する。

しかし、あたしはマヨネーズという調味料を知らなかった。

扉を前に、ゴクリと唾を飲み込む。

この扉を開けば、俺は中にいる貴族どもと、見たことも無いクリーチャーに注目されることと思う。

隣のマスオを見ると、奴も緊張してるようだった。

「生徒でもないあんたらが何緊張してるのよ。早く入りなさいよ」

溜息一つ、思い切って扉を開けて、元氣良くみんなに挨拶を……しようとしたところで、ハッと気が付いた。

自分から目立ってどうしろというのか。

そういえば、俺はこの生徒じゃない。挨拶するのはおかしいのじゃないか？

しかも、予想通り貴族どもとクリーチャーが俺達を見つめている。

「こっちよ、ついてきなさい」

軽くテンパっていると、いきなりルイズに袖を引かれ、階段のようになつた座席へと案内された。

3人揃って席に着き、やっと一息ついた。

落ち着いて教室を見回すと、ファンタジーな図鑑でしか見たことのない、動物やクリーチャーが沢山いる。

「あれは…バジリスクだっけ。たしか、石化光線を撃って来る奴」マスオが6本足の緑のトカゲを指差し尋ねる。

「ええ、そうよ。 名前はあってるけど、そんな能力は無いわ」
「えーっと、おお！ あれは知ってるぞ。 バグベアだな！」
俺も負けじと、黒い目玉のクリーチャーを指差す。

「そうよ。 やっぱり生き物はそう簡単に違わないわね。
でも、なんで、判りきったことを聞くのよ？」
と、ルイズがうんうん頷いてるが、ふと疑問に思ったようだ。

「いや、俺達の世界に、サラマンダーやバグベアにバジリスクなん
ていう生き物はいないよ。
言い伝えや想像の中や物語の中でしかないかな」

「？ なんで、そんなことが言いきれるのよ？
あんた達世界を見て回ったこと無いんでしょ？ 知らない生き物
ぐらい居るかも知れないじゃない」

マスオが答えるが、ルイズは俺達の知らない生き物も居ると強弁す
る。

俺達日本人は、大抵の動物を知っていると自負できるだけの自信が
あるが、やはり、テレビや図鑑等を知らない、ルイズ達にはわから
ないんだろうな。 と、一人ごちる。

「ちなみに、あのバグベアーって生き物は一部で有名でさ、エッチ
な男を懲らしめるという物語があるんだ。
口癖は、『このロリコンめ！』だ」

「あんた達の世界には妙な物語があるのねえ……。 ところで、ロ
リコンってどういう意味よ？」

「「ああ、それはだな……」」

と、二人揃って答えようとしたところ、教室のドアが開かれ、ふくよかなお婆さんが入ってくる。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。このシユヴルーズ、こうやって春の新学期に、さまざまな使い魔たちを見るのがとても楽しみですなのです。

おや？ 変った使い魔を召喚したようですね、ミス・ヴァリエール」
教室が一気に笑いに包まれる。

「ゼロのルイズー！！ 使い魔が呼べないからって、平民攫って連れて来るなよ！」

「違うわ、きっと実家から呼んだ下僕よ！」

「というか、なんで平民なんだ？ 猫とかカラスなんかの小動物でいいじゃないか」

「決まってるだろ！ ルイズの失敗魔法で全部逃げたからさ！！」

「「「「わははははははっ」「」「」」」

ルイズを見るとうつむいて、握りこぶしを作り、悔しさに力を込めて震えていた。

その姿をみて、先生と貴族どもに一言抗議をしようと、口を開いたが……。

その瞬間、笑ってる貴族のガキどもの口に粘土が押し付けられた。

「お友達を悪く言うものではありません。あなた達はその格好で授業を受けなさい」

他の笑ってる人達も笑いを止めた。あまりの早業に思わず何が起

きたのか解らなかつたぜ。

続けて先生が授業の開始を宣言した。

ふくよか先生が杖を振るうと机の上に石ころがいくつか現れる。

「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです。『土』系統の魔法を、これから一年、皆さんに講義します。魔法の4大系統は皆さんご存知の通り『火』『水』『土』『風』です。これに失われた『虚無』を含め五つの系統が…」

さっきのざわめきが嘘のように収まり、貴族どもがみんな机に向かって一生懸命、講義に集中している。

先生が呪文を唱えて杖を振るうと、杖の上にある石ころのうち一つが、黄金の輝きを放つものに変った!?

「ミ・ミセス・シュヴルーズ! それはまさか金ですか!?’’
昨日一緒にぶっ倒れてた褐色肌の赤毛の子、たしかキュルケだったかが質問するが、ふくよか先生の返答は意味のわからないものだった。

「いえ、これは真鍮です。わたしはまだ、コホンッ『トライアングル』ですから」
と、自信ありげに言う。

また解らない単語が出た。早速ルイズに『トライアングル』ってなんだ? って尋ねようとしたが、その前にマスオが『元素変換』がどうか言い出して興奮しだした。

って、えええええっ! 元素変換だって!?

「まじかよ! 元素変換なんてそう簡単に起きる現象じゃねーだろ

！　　というか、爆発っていうか熱はどこにいったんだよ！」

「知らんって！　おれも初めて見たんだから、こういう原理でなってるのか、皆目検討がつかないよ！」

「ナンタラカンタラ保存の法則とかいう設定に喧嘩売るとか、マジで魔法とかいうのはありえんぜ」

「質量だよ質量！」

「その平民の使い魔君たち、だったかしら。魔法を見たことが無いのはわかるけど、騒ぐのは外でお願いね。」

それじゃ、実習を……彼らの主人のミス・ヴァリエールにもやってもらいましょうか」

と、騒ぎ立てる俺達とルイズに、教壇に立ってる先生から注意と指示が飛ぶ。

それを聞きながら、ルイズが俺達に聞いてきた。

「あっちゃー……あんたらねえ、って、コレはチャンスかも？！
　　っていうか、あたし鍊金の呪文はまだ知らないわ。　あんた達わかる？」

「ぶはっ！！　　ゼロのルイズが平民にルーンを聞いているぞ！！」

またしても教室中が笑いに包まれる。　　しかしそれは、微笑ましいものではなく、先ほどと同じく薄汚いと思える類の笑いだった。

そして、再び先生から彼らは口を塞がれる。　　学習しない奴らだ。

それらを見無視してマスオが自分の考えを言う。

「たしか、鍊金術師ってのがアルケミストって呼ばれてたと思う。

だから、アルケミとかアルケミーとかで良いんじゃないか？」

俺も確かそんな感じの単語を聞いたことがあるぞ。　　というわけで、うんうんと頷く。

「アルケミー……うん、わかったわ。じゃ、それで何を作ろうかしら。うーん」

「炭素がいいぞ、炭素。　　ようは炭だな」

「やーよ、炭なんて。　　黒くて優雅じゃないわ、っていうか、なんで炭なのよ？」

「マスオ、お前まさか、ダイヤモンドを作ろうとか思ってるんじゃないのか？　分子構造なんて覚えてねーぞ。　テレビで一度見たぐらいだしな」

「はあ？　　なんで炭がダイヤモンドになるのよ。　　適当なことを言わないでよ。　　それに分子構造って」

「ミス・ヴァリエール！　早くいらっしゃい。　仲がよろしいのは良い事ですけど、貴方は貴族なのですよ？」

「はっ、はいっ！　　ミス・シュヴルーズ」

俺等が喋りあっていると、先生からチェックが入った。

まあ、貴族だの平民だの言われるのはこの一日でだいぶ慣れたが、やっぱりイラッとはするなあ。

ルイズも今から元素変換に挑戦か……って、やべえじゃねえか、失敗こいたら俺等蒸発するぜ！？

マスオを見ると、奴は目を瞑って手を組んで何かに祈ってる、って、祈るしかねーのかよ！！

俺も何かに祈ることにする、きっと大丈夫だ。　　根拠なんか無いがきっと。　　たぶん。

ルイズが息を一つ大きく吐き、気合を込めて石ころに向かって、杖を持ってないほうの手で、錬金のルーン「イル　アース　デル」と唱える。

机の上の小石は、乾いた音……昨日聞かされた音に比べれば可愛い

音を立てて爆発するが、あまりインパクトはない。

教室の貴族のガキどもは「ひいっ!」とか言って怯えたが、爆発が極小規模だったので、それに対して悪口を言おうと口を開こうとしたが、ここからが本番なんだよな。

「ミス・ヴァリエール、失敗したからといって気を落とさずに。

あなたは優秀な生徒と聞いています。いつか成功するでしょう。

それにしても、爆発が失敗というのは本当のようですね……」

「あ、もう一度やってみます。うんっ! えっと、もう炭でいいわ。プラクテ・ビギナル、アルケミー(錬金)!」

今度も、爆発は起こらなかった。あとは、成功するか失敗してるかだな。

「「「ははははははっ! 今度は呪文を間違えたぞ! 流石ルイズ

! 期待を裏切らない!」」」

そんな中、先生が震える手でルイズが錬金したものを摘み上げると、その顔が驚愕に変わる。

「そ、そんなっ! これは、確かに炭よ……何故、ルーンが違うのに成功してるの? ミス・ヴァリエール貴方一体何を……?」

「これが、だれでも使える魔法ですもの」

それに対しルイズは簡潔に答え席に戻ったのだった。

教室では貴族のガキどもの声はもう無かった。

「ところで、爆発しなくてよかったなあ。もししてたら、熱核反

応で確か10万度ぐらい行ってたぜ?」

「爆発ってあんたらねえ、ちなみに10万度ってどんな熱さなのよ

「？」

「沸騰したお湯の1000倍の熱さだな」

「ヤケドするじゃない！！！」

「「ヤケドで済むか！！！」」

学生のお仕事（後書き）

取り合えずコレでストック分は終わりです。

続きを書き上げましたら、投稿していきます。

応援よろしくお願いします。

失敗成功大決闘

／SIDE マスオ

あの後、二つ名が赤土とかいう凄いのか凄くないのか、良くわからない中二名を持つ先生は、ルイズの作った炭をもって、慌てて出て行った。

今日の授業は自習です！ の言葉は忘れずに。

急に出来た休憩時間をどうやってすごそうかと考えてたら、回りの貴族どもの様子がおかしい。

教室の外に出て行った奴もいるし、なにやら、2－3人で集まってこつちを、というよりもルイズを見てヒソヒソ話をしている。

まあ、言いたい事は解るが、そういうのはコッソリやれよと、言いたいね」

「コッソリやればやったで、ケツの穴が小さい奴等ってバカにするんだろマスオは」

「当然。精神的肛門狭窄症の末期患者どもにかけてやる情け何ぞ無いね」

「またあんた達、昨日みたいなことやってるし……これだから日本人って奴は」

ヤレヤレとルイズが肩を狭めて呆れている。

「鍊金といやあー、さっきのあれ呪文正しいのか？ アルケミストなんて俺でも知ってるぐらいの単語だぜ？

英単語なんじゃねーのか？」

「あ、そういえばそうかも。錬金術って化学の元みたいなものだから、最近だったかも。じゃ、なんで成功したんだろ？」

「なんでって……あたしだから成功したっていう考えはないのかー！！」

「「ナイナイ」」

爆発が起こって俺等が吹き飛ばされたのは言うまでもない。

「いつつつ……あ、錬金で思い出した。たしか、コッパゲ先生がサイトのノートパソコンのバッテリーを復活させてたな。」

もしかして、俺も自分でこのケータイのバッテリー復活できるんじゃないか？

体を起こしつつ、さっきの衝撃で思い出したことを言いながら、ポケットからケータイを取り出すと、サイトもケータイを取り出すのだった。

てか、作中じゃサイトはケータイ持ってないって設定だったけど、実際持ってるし、まあ気にしないで置こう。

「あたたた……え、マジでケータイとかパソコンの電池復活できるの？ それじゃ、使いまくっちゃうぜ？」

「まったまった、あんた達、それ一体何よ？ なんか四角くて色がついてて紐が一本垂れ下がってるだけのカタマリじゃない。」

そういえば、あんた達が大事に抱えてた『のーとばそこん』とかいう奴の小さい感じがするけど」

「ルイズ鋭いな！ こいつは、ケータイって言ってな機械って奴だ。こいつを使って遠くの人と話しか出来るんだぜ。」

パソコンも機械だけど、あれはこのケータイのなんといったら良いか、もっと高性能な奴だ」

「へえ、遠見の魔法みたいなものね。早速使ってみせてよ」

と、適当に会話していると、青い髪メガネをかけた小柄な女の子たしかタバサ（だっけ？）をつれて、キュルケがやってきた。

「みんな貴方に注目してるわよ。だって、ゼロの貴方がいきなり魔法を成功させたのですもの、どうやったのよ？」

平民が使える魔法みたいなこと言ってたけど。って、あら？　これは何？」

ライバルに褒められて得意満面になってたが、即座に興味が別のものに移ったキュルケを見て歯噛みした風だった。が、即座に「遠見の魔法の鏡みたいなものよ」と教えてあげる。

キュルケもこのケータイを早速使って欲しそうだったが、おそらくというかまず間違いなく……。

「「圏外だ（な）」」

俺とサイトがケータイを開いて、そこに書いてある表示を読み上げる。

だが、周りから反応がなかった。それが気になりルイズ達を見回すと、一様に驚いた表情をしている。

その視線はケータイの液晶画面に釘付けだ。

まて例の『手枷』みたいなことを言われる前に、俺達は説明する羽目になったのだった。

……

……

…

「というわけで、この機械は遠くの人と話したりするだけでなく、

この画面に映像を表示したり音楽を流したり出来るんだぜ」

いろんな角度からの質問を、俺とサイトは持てる知識を総動員して説明したため、知恵熱が出そうだ。

それだけでなく、こんなに長々と女の人達と喋ったことのない俺は、もうパニックの寸前だったりする。

まあ、それは良いとしてカメラの説明を「さっき、サイトが言ってたカメラ？　ってなによ？」と、ルイズが先に聞いてきた。

「そいつはな、写真を撮る機能なんだぜ」と、ケータイの背をルイズとキュルケそれにタバサにむけて構え、ボタンを押すサイト。

「写真？」と、返そうとしたルイズだったが、効果音の『カシャ』という音に一瞬ビクリする。

そして、サイトが画面を見せたとき、彼女達の絶叫が響き渡り、再び俺達は多大な努力を払い説明役に徹するのだった。

「ああああ……あんた達の使う科学って奴は、何かが激しく間違ってる気がするわ」

それは、俺等が言いたい。

呪文一つで、元素変換を行う奴らには、言われたくないと思う。

「じゃ、早速バッテリーを錬金して満充電にしてみますか」

電池容量の減ったバッテリーを取り外そうとすると、シヨックから立ち直ったのかキュルケが「ホーッホッホッホッホ！　そのケータイとやら、わたしが買うわ！」と笑いながら、予想通りなことを言ってきた。

ルイズはコレだから成金は……と呟いてるが、冗談ではない。

「これは売りモンじゃねーよ。　　というか、こいつがないと、元の世界、じゃなかった国に帰る時困るじゃねーか。

まあ、そんな気合を入れて買うもんじゃねーことは確かだな。俺の国の奴なんて一人一台は持つてるようなもんだ。

写真取りたかったらカメラを買えば良いし、音楽聴きたければ音楽プレイヤー買えば良い、大金払うぐらいならパソコン買ったほうがいいぜ」

そう、サイトの言うとおりだ。現代人にとってケータイとは、一つの生命線だからな。

「じゃ、じゃあ、そのケータイは幾らぐらいで売ってる様なものなのよ？」

「ピンキリだけど、俺の奴は2〜3万だな！ 家事とか手伝ってやつと買ってもらったんだぜ！」

と、サイトが言うが、日本の貨幣価値は通じらんとするぞ。予想通りにさんまん？ と鸚鵡返ししてるし。

「ということで、サイトの説明じゃご理解いただけませんでしたよ。なので、不精このマスオがこちらの貨幣価値……は忘れたので、ビッグマック指数もないので、パン指数で説明をいたします。

俺達の国のお金の一万円。単位は円というんだがそれがこちらでは、2個で1食分のパンが、ズバリ100個分です！
その約2〜3倍ですので、200個〜300個となります」

「「安いわ（ね）！」」 「高い……」

ハモった二人が更にハモって、「「えっ？」」と返した先にいたのは、タバサだった。

まあ、家庭の事情があったねえと思い、話題を変える事にする。

「というわけで、このバッテリーを充電してみますか。 I a m

Providence アルケミー（鍊金）！！

むー、……失敗だ」

何も起こらない、いや、爆発とかされても困るんだが、自分でも失敗してると思っている。

「なんで何も起こらな」ところで、なんで、精神力を使っていないの(よ)?」って、はいっ?」

なにか、間違ってたようだ。　　というか、昨日成功したのでそのつもりで使ったのだが、なにかが不味かったようだ。

その原因をルイズに詳しく聞いてみると、杖云々はこの際いいとしても前置きして、

「そもそも、イメージが精霊に届くように念じていないし、魔法を使うという心構えもなく、ただルーンを喋っただけじゃない」

との、ことだった。

という訳で、今度はイメージを深く集中して呪文を唱えてみた。が、失敗。

その後、何度かやったが失敗続きで、3人で悩むが答えはなかった。

「「ところで、最初に呟いて『アイ　アム　プロビデンス』って何?」」

と、キュルケとタバサが言われたので、恰好良いからと適当に作った始動キーで、意味は「我は神意なり」だ。　と、前置きして始動キーの説明をする。

曰く、これから魔法を使うぞ!　という、意識を切り替える呪文。

曰く、何でも良いというわけではなく、後に続ける呪文のために、韻を踏む必要がある。

曰く、初心者には『プラクテ　ビギナル』という始動キーがあつて、これで最初は練習する。

と、そこまで言ったところで、4人が「「「それだ!!」」」
と言ってきた。

思わずビククリして後ろに倒れそうになった。

「マスオ、お前魔法使い始めたの昨日今日じゃねーか。それが、いきなり、自分用の始動キーとかで発動するわけねーぜ」

「まったくよ、最初から上級者用でやって成功するはずないわ！

昨日は成功したですって？ まぐれよまぐれ」

「平民が魔法云々の前に、基礎から出来てなかったのね」

「その始動キーの意味は恥ずかしい気がする」

俺は、「はい、すいません」と、頭を下げるしかなかったのだった。

という訳で……。

「イメージだ！」

「気合よ！」

「しっかりと念じるのよ！」

「……背伸びしないで初心者用で」

周りの暖かい(?) 声援を受け、俺は無事、魔法を成功させたのだった。

というか、ここで失敗したら顰蹙ものだったよ……。

／SIDE ルイズ

授業時間の終わりにかけ、あたしの使い魔二人は教室を抜け出して、部屋に戻ると言い出したわ。

何しに戻るのか聞いてみると、例の『のーとばそこん』とやらを使ってみるそうよ。

食堂で合流すると言い残して二人は部屋に戻ったの。

それにしても不思議なこともあるものだわ。

あの不倶戴天の敵どおしだったツエルプストーと一緒に食事に向かうなんて、今まででは考えられないことだったわ。

まあ、あたしの……ともだ、いえ、使い魔、そう、使い魔よ！ あたしの使い魔達に手を出さなければ邪険にする必要はないかもね！
それでも馴れ合いはごめんだけど。

そういえば、昨日はあいつらの国……日本とかいったわね、その国の事なんて興味がなかったのだけど、あのケータイとかいうあたし達の姿を記録したり、音楽を流したりするキカイとか言うものを作ってる国なのよね。

そうかんがえると、少しは興味が湧いたかもしれない。
あんな変なモノを作る国なんですから、きっと他にヘンで奇妙なモノがあるに決まってるわ。

不思議といえば、あたしの隣でツエルプストーと会話でないようで会話をしているタバサって子も不思議だ。

あたしか、青い髪はガリア王家の髪だったはずよ。

うーん……気になるけど、あまり追求したりはしないわ。 あたしはツエルプストーみたいに、礼儀知らずじゃないもの。

キュルケとタバサと別れて待っていると、サイトとマスオが合流してきたわ。

昼食の席を探していると、突然メイドから失礼致しますと声を掛けられたわ。

「ミス・ヴァリエールと使い魔の方達ですね。 ご指示の通り使い魔の方達用に食事を用意いたしました。 こちらになりますので着いてきてくださいね。

それではミス・ヴァリエール、失礼致します」

と、彼らを連れて行った。

使い魔のくだりで、マスオが不機嫌そうな顔をしていたけど、まあ、仕方ないわ。あたしからそれを否定はできないし、それにあたしがどうこう言う前に、周りがそう言ってるんですもの。

「ここでも使い魔か、むかつくよなー。あー、次は決闘イベントだなー」

「まあ、暫くは諦めるしかねーぜ……。決闘？　ってなんだそれ？　イベントか？」

と、話し合いながら去っていく彼らに、にこやかに手を振ってあげるあたしだった。

……

……

：

それが聞こえたのは、あたしにとっては必然だった。

何故なら、ずっと彼らを見ていたから。食事をしながら。

メイドに混じって配膳を手伝う様も、サイトがメイドをかばって貴族に喧嘩を売る様も、その貴族が平手打ちを食らいワインを頭から飲まされる所も見ていた。

だから、マスオが言った、「お前はその後、決闘だ！　と言う」発言の後、その貴族が言った言葉も必然だった。

「決闘だっ！　くっ！　解ってるじゃないか……平民のしかも使い魔如きが貴族に無礼を働いたらどうなるか、ミス・ヴァリエールは教育しなかったようだね。ならば、この僕が君たちを教育してあげようじゃないか」

と言うのは。

まあ、あたしはその前の『決闘イベント』とやらで、なにか仕出すとは思っていたけど……。

「や、やめて！　あなた達ころされちゃう！！　お貴族様もおやめください！！」

「大丈夫、大丈夫。　こんな二股野郎、かるーくぶん殴ってやんよ！」

「そうそう、だって相手はこいつだぜ？　ここで、勝てんとなんも出来んよ」

「くくくっ！　思い上がった平民め、良いだろう。　自分の愚かさを君達の体に刻んでやるとしよう。　幸い、貴族と平民の決闘は禁止されていないからな！」

「ちょっと、サイトにマスオ！　みてたわよ！　魔法初心者のあんた達が勝てるほど、貴族はやさしい存在じゃないわ！　謝んなさいよ！」

あたしのその言葉に周囲がざわめく。　そして、笑い声がそこかしこで広がっていく。

ギーシュがその笑い声に押されて演説をし始めたわ。

「へ、平民……しかも、使い魔如きが魔法だって！？　ははははは

っ！　ルイズウー、自分が魔法を使えないからって平民をメイジにしたて上げるのは、面白すぎる冗談だよ！」

しかも、ムカつくことに、あたしの揶揄まで入れて！

反論しようとする、キュルケが隣に来て、あたしの援護を始めたわ。　珍しいことをするものね。

ほら、周りの奴ら、あたしの使い魔たちが魔法を使えることを知って、ちよっと途惑ってるわ。

「ふんっ！　所詮平民の魔法だ。　精々あがくんだな。　ほら、広

場はこっちだ」

と、ギーシュの取り巻き達が彼らを連れて行く。
あたしも遅れないように追いかけるのだった。

……

……

…

「諸君！ 決闘だ！！」

ここに居る平民の使い魔達は無礼にも貴族の対面に泥を塗った！
これが許されるだろうか！？

いや、僕は許そう……。 所詮、貴族もない遠い野蛮な国から来た無知な平民だ。

だが！ 僕は彼らのために心を鬼にして、教育をしてあげようじゃないか。 貴族に歯向かうとどうなるかすら知らない、この無知な平民に！！」

「いいぞーギーシュ！！」

「平民なんかになめられるなー！」
等々の歓声が鳴り響く。

「それで……君達は、どちらから僕の教育を受けるんだい？ 僕は二人同時でも構わないよ？ この僕のワルキューレに歯向かう等と思いがった思いを正してあげようじゃないか！！！」

と、バラの造花のような杖を振ると、ギーシュの目の前に3体も青銅で出来たゴーレムが現れたわ。

最悪だわ……せめて1体なら、隙を突いてギーシュに攻撃を届かせたのでしょけど、さすがに3体は……。

と、考えてるところで、サイトが行くと宣言したの。

前に出て行こうとするサイトに、マスオが何か渡した。金属製のナイフみたいなの……って、ああ、食堂にあったナイフね。それを杖として使うのね。

テーブルナイフを手にしたないで、腰のベルトに挿したわ。杖はどうするのかしら？

その後サイトがポケットを漁る。ポケットを漁り出てきたのは、数枚の紙切れだったの。

「いやー、良かったぜ。マスオのノートパソコンに呪文を羅列したページのキャッシュが残ってた。

こーして、メモ出来たんだからな。しかし、難しいし長いし覚えられんな、コレ。

折角だから、大技から行くぜ！ プラクテ ビギナル・えっと、ウエニアント・スピーリトウス（雷精） アエリアーレス・フルグリエンテース（風精）！」

「いきなり、大技から行くのかよ!!」

と、メモを見ながら確認したマスオが言う。

って、あのバカ、杖のこと忘れてるじゃない！

おまけに、それをみて、周りの観客が笑う。

大技……たしかに、サイトの呪文は長い、それだけ威力の高い魔法なんだろう、が、いかんせん長すぎるのよ。

まだルーンを唱えるのに慣れてないサイトでは、すごい隙を作てるようにしか見えないわ。

けど、ギーシュはニヤニヤ笑うだけで、攻撃しようという素振りすら見せない。

失敗する様を見て笑いものにするつもりなんでしょうね。そう上

手くいくかしら。

「クム・フルグラティオーニ（雷を纏いて） フレット・テンペスター（吹きすさべ）……」

「……まだ続くのかい？ いい加減待ちくたびれたよ その、奇妙な戯言は」

「……アウストリーナ（南洋の嵐）！！ 待たせたなっ！ 食らいやがれ、ヨウイス・テンペスター・フルグリエンス（雷の暴風）！！！！」

一際叫び、手の平を突きつけるサイト。

……でも、何も起きなかったの。
まさか、ここに来て失敗！？

「ふっふふふ、まあ、予想通りだね。 所詮平民の嘘にまんまとミス・ヴァリエールとミス・ツェルプストーは騙された、というわけさ。」

さあ、これからはその虚言の代償を払う番だ！ いけ、ワルキューレ！！」

「なっ！ がっ……！！」

突っ込んでくるワルキューレが、手のひらを見つめて呆然としているサイトを殴り倒した！

けど、サイトは防御が間に合ったみたい。 近くにいるワルキューレから離れるように後ずさると、手を見つめながら叫びだした。

「なんでだ！ たしかに何かが出て行った感触はあったのに、発動しないなんて！」

そう、あたしもそれに気がついてた、サイトは精神力と気合は入っていたはずよ！

それが、なぜ……と、考えてると、観客の一人が遠くを指差して、アレは何だ！？ と叫びだした。

観客とギーシュが一斉に後ろを見ると、ここに来てざわめきが最高潮になる。

もちろんあたしも呆然としている。

だって、あたしたちが見てる先には『雷をまとった竜巻』が立ち上ってるのだから。

……ただし、かなり遠くに。

「イメージだ！ サイト、詠唱に集中しすぎてイメージが足りなかったから、『呪文の通り』の現象が発生したんだ！」

と、マスオが言う。

あれが、本当の効果ではないというの！？

じゃあ、アレの本当の効果は一体どれほどの惨事を引き起こす魔法なの！？

「アレは、お前か？ お前がやったのか！ ……貴族が聞いてるんだ、さっさと答えろ、平民！！」

ギーシュがサイトを睨みつけ、怒鳴り散らす。

激高するのもわかるわ。馬鹿にしていた平民があんな魔法を使うなんて。

そう、あれは間違いなく……

「ペンタゴン、いやヘキサゴンスペル……なのか？ 平民が！？」

「ありえないわ！ だって、あれは王家の秘奥よ！ それがどうして、平民なんかに？」

「いや、俺が聞いた王家のヘキサゴンスペルは、水竜巻らしいぞ」
「じゃ、あれはなんだよっ!!」

観客が騒ぎだし、隣の人と更に隣の人も含めてアレの検証を始めて
いるわ。

「ワルキューレーー!!!!」

ギーシュが自分のゴーレムに命令して、サイトを殴りつける。

3体だったゴーレムは6体に加え、サイトを取り囲んで殴りつける。
サイトがその包囲を殴られつつ抜けながら、次の魔法を発動させた。

「……っ、サギタ・マギカ（魔法の射手） セリエス（連弾） ル
ーキス（光の11矢）!!」

光の線が複数個見えたかと思うと、ギーシュのゴーレムに突き刺さ
り、その内3体が崩れ落ちる。

って、昨日の夜マスオが使った魔法の矢の数が多い奴ね!

と、思うまもなく、サイトがふらついたわ。

呼吸が荒く、顔色は真っ青で、汗を大量に掻いている。

あたしはその原因に心当たりがあったので思わず呟いたわ。

「「「精神力の枯渇よ（ね）」」」

キュルケもタバサも同じ考えだったみたい。

それを聞いたマスオが叫んだ。

「サイト!! MPがなくなってるんだ、消費の少ない魔法で行く
か、早く代われー!!」

「交代……なんてするかよ!! こいつは俺の決闘相手だぜ! こ
こまでやられて、下がるかー!!」

「くっそー!! 平民がー!! ワルキューレー!!」

ギーシュが残る3体のゴーレムに命令を出す。

サイトは殴られつつもふらつく足取りで距離を取り、光の魔法の矢

で一体、また一体とゴーレムを倒し、残り1体を残すのみとなった。

だが、もうここで終わりかもしれないわね……。

かろうじて立っているようだけれど、意識が時々消えてるようで、倒れそうになっているわ。

「ふんっ！　もう、限界のようだな。　僕のワルキューレ相手に頑張ったと言いたい所だが……僕のワルキューレはあと1体あるんだよっ！！！」

と、ギーシュが杖を振った瞬間サイトが駆け出したわ。

残り一体となったワルキューレを避け、ギーシュを殴ろうとしたサイトだけど、杖のバラの花びらは地面に落ちて、ゴーレム―ワルキューレを作り出した！

「サイト！　腰のナイフだ！！！」

その言葉を聞いた瞬間、サイトは腰に挿してるテーブルナイフを抜いた瞬間、左手のルーンが光り輝き、腕を振るい近くのゴーレムを切り裂く。

だけど、その一撃でナイフは折れ曲がってしまった。

それを投げ捨てたサイトは、最後の一体に近づき「サギタ　マギカ（魔法の射手）　ウナ　ルークス（光の1矢）　！！」と唱え、殴りつけた。

殴られたゴーレムは、小さな爆発……光の矢を受けたみたいになって壊れてしまい、サイトが返す腕でギーシュを殴り飛ばしたのよ！

殴られたギーシュは倒れて数度転がって止ったわ。

でも、殴られた顔は魔法が入ってないほうの手だったから、そんなにひどい怪我したとは思えないんだけど……。　先に心が折れてるようね。

ワルキューレが殴り壊されたのと、精神力の使いすぎたから仕方ないといえば仕方ないんだけど。

「はあはっ……はあはあ……まだ、やるか？」

「……僕の、負けだ……」

広場にどよめきが起こる。

けど、その言葉を聞いたサイトは倒れてしまった。

すぐさまあたしとマスオは救出に向かい、マスオが「どれだ？ これだ！ ってこれ、訳が書いてないぜ。ま、いいや。……プラクテ ビギナル トウイ グラーティアー ヨウイス グラーティア シット クーラ（治癒）！」と唱えたの。

傷が少しふさがったみたいだけど、あまり効果はないみたいだった。少し考えたマスオは、あたしにサイトに向かって「クーラ（治癒）」の魔法を使い続けろと言い、自分は考えに没頭してるようだった。って、さっき言ってた長い呪文でしょ？ あたしおぼえてないわよ！ 仕方ないので、始動キーと『クーラ（治癒）』の呪文だけ唱えることにしたわ。

「水ってなんだっけ！ ウォーターじゃないし、グラキアーリスだと……たしか氷だ。えっと、ああ、アクアかも！」

えっと、プラクテ ビギナル ウンデキム スピリートウス アクア（水の精霊11柱） コエウンテース（集い来りて） ヒールヒム（彼を癒せ）！ これじゃ英語だ。クーラ（治癒）で……！」

と、唱えると、魔法は何とか発動したみたいで、サイトの周りに水が集まり……治癒をしているようだわ。

一番怪我がひどいのは手で、殴ったときの爆発で怪我してて痛そう

だった。

やがて……「ぶはっ！　がぼっ！？」　と顔にまで水が集まって溺れだした。　サイトはゲホゲホと言いながら這いずって水から離れた。

「こっ、殺すきかー！！！」

サイトの立ち上がりの第一声がこれだった。その体に、目立った傷は見えなかったわ。

失敗成功大決闘（後書き）

相変わらず気合の入ってない文章ですいません。
おまけに遅速で稚拙ですけど頑張ります。

決闘の後始末

／SIDE サイト

俺は先ほどの決闘の疲れと怪我を癒すために、この広場に隣接している塔を背もたれにしてにして座り込んでいる。

さっき治癒の魔法で水を使った所為で濡れて気持ち悪いが、これが怪我を治しているのは間違いないので、こうやって完治するのを待っているのだ。

だけど、怪我は治ってもMPというか魔力というか精神力は中々戻らず、依然として気分は悪いままだった。

先ほど迄ここを支配していた熱気は広場にはもう無いが、まばらに残った貴族どもが俺達を観察しているのは、まあ、いつもの通りだ。

「サイトもマスオもずるいわよ！ あたしだけ除け者にして、自分達は新しいルーンを覚えてくるなんて！」

貴族どもを逆観察していると、突然隣に座ってるルイズが言い出した。

ある意味当たり前だったのかもしれない。

魔法の知識に貪欲なルイズの事だ、聞いてくるのは解ってた。

さっき、マスオとメモを取りながら話し合ってたんだ、知識が欲しければ全て教えると。

なので、俺は魔法の呪文を書いたメモ用紙をルイズに渡すのだった。

「こっ、これはっ！ ……って、こんな落書きが読めるはず無いじゃないのよー！」

「折角俺の書いたメモを投げ捨てんな！ そして、落書き言うな！」
ルイズと俺の声が、ここヴェストリとか言う日が差しにくい広場に

響いた。

「よっしゃー！ イメージばっちり！ 俺も『雷の暴風』つかっちゃうもんね！」

さっきまで目を瞑ってぶつぶつ言ってたマスオが顔をあげ、いきなり魔法を使うとか言い出した。

「……なんで、お前はそんなにテンションが高いんだよ？」

「決まってるだろ！ 俺の周りとお前の周りを良く見比べてみると、指さされて言われた。」

一度回りを見回せば一目瞭然。俺の周りにはルイズにキュルケそれにタバサがいるが、少し離れたマスオのところには誰も居ない。まあ、俺の決闘での格好よさを見て、興味を持ってくれたんだろうな。

というわけで、軽く鼻で笑ってやった。

「~~~~~っ！ やはり！ この世界でもこの様に富の偏在があるんだっ！！」

これは直ぐに改革なくては！ 内政フェーズ！ 内政フェーズはまだか！？

……はあ、まあ、解ってたことだからいいけど、この憤りを何かにぶつけて、ついでに格好を付けない事には始まらない！

という訳で、サイト！ 呪文を読み上げてくれ。まだ、イメージは出来てるけど呪文覚えてねーんだよ」

「って、そこで他力本願かよ！！」

「まず、イメージより先に呪文覚えなさいよね」

「しかたないわ、男ですもの格好はつけたがるものよ」

「でも、失敗でない『雷の暴風』とかいう魔法には興味ある」

はあ、まったくマスオは仕方ねーな。

俺達4人からの集中砲火をあびて、いじけている。　ヤローのいじけなんざキモイだけだぜ。

まあ、協力してやらんでもないがな。

と、ルイズが捨てたメモ用紙を拾いあげ、読み上げてやることにする。

「んじゃ、成功させろよ？　えゝつと、これだな……始動キーは省略してつと、あー、最後の呪文は　ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス（雷の暴風）　だからな。　いくぜ、ウェニアント・スピーリトウス（雷精）　アエリアーレス・フルグリエンテース（風精）……」

「おー、任せろー！　プラクテ　ビギナル　ウェニアント・スピーリトウス（雷精）　アエリアーレス・フルグリエンテース（風精）！」

「「クム・フルグラティオーニ（雷を纏いて）　フレット・テンペスタース（吹きすさべ）　アウストリーナ（南洋の嵐）……」」

「これで最後だ、きちんと決めろよ！　ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス（雷の暴風）」

「解ってる！　いくぜ！　ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス（雷の暴風）……」

マスオが右手を大きく後ろにやり、溜めをつくり、次に最後の呪文を唱えつつ、右手を突き出す！

奴が突き出した手からは、漫画で見たとおりの魔法の効果が出ている。

思わず「おーー！」と声がでるのは仕方ないだろう。

雷をまとった小さな竜巻は、誰も居ない方向の中空を一直線に……

っておい！ 「少しずつうねってるじゃねーか。 しっかり制御しろよ！」

「くっ！ これ、制御がムズイ！ というか、前がみえねえんだよ！！」

弱音を吐きつつも、無事制御しきった様で、やがて、雷をまとった竜巻はほどけて、消え去った。 まあ、暴走とか起きなくてよかったなあ、とか思ったのは秘密だ。

顔色を悪くしてるマスオが戻ってきた。

というか、MPが切れるとここまでキツそうに見えるのか、俺も良くあの状態であのいけ好かないキザ貴族に勝てたな。

一応成功版の魔法を見て、思考を停止していた3人の魔女の中で、ルイズが真っ先に復活した。

「すすすす、すごいじゃない！！ 早速、あたしにも教えなさいよ！！」

「まかせろ！！ まずこいつは「イメージはさっきマスオが使ったので、つかめただろ？ あとは、呪文を覚えて唱えるだけだな」って、おい！

説明フェーズは俺の役目だろうが……！！
ルイズ達も頷いてるんじゃない！ はあー、おれの見せ場が……」

「まあ、そんなに落ち込むなよ。 今度、見せ場を変わってやるからさ」

「サイトの見せ場って……ほとんどが死亡フラグじゃないか！」

って、そんなに危険なのかよ、この世界って。

ジョーダンじゃない。 なるべく安全な道のほうがいいよな。

って、まさかさっきの決闘騒ぎも、その死亡フラグの一つじゃ……。こええええええええ！！

「こうなったらもう……サイト！ 決闘だ！！ 俺の格好良い必殺技を食らえ！」

「きついからヤダ！ ちなみに、格好良いってどんなのだ？」

いきなり決闘を申し込んできた。が、即座に却下してやった。

落ち込んだりハイになったり、こいつも忙しい奴だな。

本気ってわけじゃなく、只、必殺技とやらを見せたかっただけのようだ。

これぐらいなら聞いても良いだろう。

「ふっふっふ。ずばり、光の剣だ！ エヴァの魔法で剣っぽいを出すのがあっただろ？ あれ詠唱は載ってないんだけど、魔法名のエンシスって剣って意味らしい。

だから、イメージ次第でこんなことも出来るはずだ。

プラクテ ビギナル ウナ スピリトウス ルークス（光の精霊1柱） コエウンテース（集い来りて）エンシス（剣）！ エンシス スピリトウス ルークス（光の精霊の剣）！！」

マスオの手から黄色に光り輝く剣というか棒っぽいのが出ている。

真っ直ぐ一直線じゃなくて柔らかさうなのはご愛嬌だろう。

だが確かに、男なら一度は憧れる武器だ！

「やるじゃねーか！ たしかにそれは格好良い魔法だぜ。 えっとこうだよな……」

俺も奴に倣って呪文を唱えイメージすると、手から剣っぽいのが生えてきた。

「あんた達もう帰るわよ。 そろそろ冷えてきたわ」

「まあ、もう少しで終わりそうだから、もうちょっと見ていきましょ。 下手な演劇より面白いわ」

「……（本を読んでいる）」

魔女3人はこの光る剣に興味がないのか、シラーっとしている。やはり、ここが異世界だから、この感動がわからないのだろう！

「行くぞサイト！ 俺の剣を受けてみる！ お前の死を通じて、俺は少しだけ大人になる！！」

「おう！ 掛かって来い！ あと、死とかいうな」

「うおおおおおりゃー！！！！」

大きく振りかぶり、奴の剣にむけて振り下ろす。

剣が触れた瞬間――お互いの剣が爆発した。

良く考えたら、当たれば爆発する光の魔法じゃねーか、これ。これが剣になるわけねー！！

薄れ行く意識の中で最後にみたのは、3人の魔女のバカを見るような目だった。

……

……

：

あの後が大変だった。

目が覚めたら、最初にあったハゲの先生、たしかコルベなんとかいう先生が目の前にいて俺とルイズが叱られた。

決闘とはいえ、間違いが起これば人っていうか貴族を殺してしまうような魔法を使ったって事と、午後の授業を受けなかったって事ら

しい。

「俺が殺されかけたというのはスルーで良いのかよ！」と突っ込んだが、あのギーシュって奴は結構な家柄で、悪くすればルイズの立場を悪くするって言われたら、反省しないわけにはいかねえ。

家柄……家柄ねえ。あまり良い言葉じゃねーな。まだ良くわからんが、この世界が中世って時代っぽいのは間違いないみたいだな。ルイズは自分が主人だー！とか言って少々威張るが、すくなくとも、周りの貴族のガキどもみたいに嫌な奴じゃないしな。

というわけで、ルイズから出された、『今日の晩飯抜き』という罰も甘んじて受けることにした。

まあ、部屋に帰ったら怪我とMPの不足でふらふらになって、ソッコー寝てしまったんだがな。

次の朝、腹を空かして飯を食いに食堂に入ったら、またしても《ぎわっ！》となった。というか、本当にこんな感じの声の広がり様だった。

まあ、こんなのは何時もの事だ。というか、貴族どもの芸風も変わり映えしないな。

ルイズと別れ、視線の雨を無視して定位置について飯を食う。

マスオの奴はしきりに胃を抑えてるが……まだなれてねーのかよ。

厨房に食器を返しに行くと、昨日までは和やかだった厨房の人達が恐ろしいものを見るような目で、俺等を見ってくる。何でだ？

「あ、あのっ！ 昨日は助けていただいてありがとうございます！ 昨日は逃げてしまい申し訳ありません。その、恐ろしかったものですから……」。

わたくし、シエスタともうします。

サイト……様とマスオ様は、ええーっと、その、貴族だったのですか？」

そんな中、メイドの一人シエスタって名前の子が、おずおずと言っ

てきたのだった。

当然俺達は必死で否定したぜ。

その後、あの魔法は普通の人でも使えると教えると、一様に落ち着いたようだった。

それに、呪文を教えようとすると、みんな必死で拒否してきた。

私達には必要ない、と。

「料理を美味くする魔法のスパイスだったら欲しいがな！」

と、マルトーさんが豪快に笑い、それに釣られてみんなも笑うのだった。

「それで、手枷の勇者よ。 昼は何が食いたいんだ？」

その台詞に俺達はまたずっこける羽目になったのだった。

／SIDE ルイズ

「おはよう、キュルケ、タバサ」

「おはよう」

「おはよう、ルイズ。 彼らはどうしたのよ？ あんたの使い魔の」

「ああ、あいつらなら厨房のコック長のマルトーに頼まれて、薪割りしてるらしいわ

まったく、主人をほったらかすなんて、ダメな使い魔たちね」

キュルケ達の手前そう言ったけど、ガンダールヴのルーンの効力実験とか言われたら仕方ないわよねえ。

「ルイズ、昨日は君を侮辱して悪かった。

モンモランシーにも、あの後二股の件について散々怒られたよ。

それと、昨日からずっと気になったんだが……君の使い魔たちなん

だが、彼らは一体何者なんだい？」

座席に座り先生を待っていると、ギーシュが突然謝ってきたわ。

でも、謝ってる事は謝ってるんだらうけど、ギーシュの真意はあたしの使い魔のことを知ろうとしてることは明白よ！

あたしは不機嫌になり、おざなりに返事を返すだけだった。

「決まってるじゃない、あたしの使い魔で平民よ」

「ただの平民に僕が負けるわけじゃないじゃないか」

「あなたが弱かっただけでしょ」

「しかし、彼らはあんな凄い魔法をつかってたじゃないか！」

「平民でも使える魔法らしいわ。それに、彼らはこっちに来て初めて魔法を使ったそうよ」

「何だって！　そ、そんな馬鹿な！」

と、ギーシュはすぐすと自分の席に戻っていくのだった。

えっと、今日はコルベール先生の授業か……退屈しそうね。

先生は教え方は上手なのだけど、直ぐに授業から逸れて自分で作った珍妙な道具を見せたがるのよねえ……。

ああ、そういえばマスオの奴が授業が終わったら、例の『ばそこん』って奴を見せてくれるって言ってたわね。

コルベール先生やキュルケたちも誘ってみますか。　面白い反応が見れそうだしね。

／SIDE　コルベール

ミス・ヴァリエールに彼女の使い魔達の持ってきた、珍しい品を紹介するといわれて来たのですが、このコルベール逸る気持ちを抑え

きれませんぞ。

初日に話しに聞いた限りでも、トリステインとは違う文化を持っているそうですしな。

わたしをいれて7人ほど集まるということですので、早速、小会議室を借りきましたぞ。

他の先生方には変な顔をされておりましたが、オールド・オスマンの一声で借りれることが決定しました。

いやはや、『遠見の鏡』で覗き見る気満々ですな。

そうして集まってもらい、使い魔……いやさ、マスオ君が最初に見せてもらったのが、手枷……いや、腕時計というものでしたな。

針を使わず数字だけで、時間を表示するというのにも呆れましたが、なによりもその精巧さ！

どのような職人が作ったのかわからないほどの、細かな装飾が施されており、さらには文字を表すという想像も付かないモノでしたぞ。

次に見せてもらったのが、『ケータイ』とか言うものでしたな。

一見色の付いた塊にしか見えなかったものがパカリと開かれると、中にはガラスのようなものが嵌った小窓があり、中で絵と文字が踊るというこれまた信じられないものでしたぞ。

一生分の驚きをしたと思ったら、『カメラ』とかいう機能でシャシンとか言うものを撮られ文字通りと魂が抜けるかと思いましたが！かと思えば、いきなり甲高い音楽のようなものが鳴り響いたりもしました。

しかし、それらは副次的なもので、本来の用途は遠くの人と話しが出来るという機能でしたな。

わたしは遠見の鏡のような物を想像したのですが、彼らがいうには、繋ぎさえすれば世界中どこでも誰とでも時間を待たず話せるということでしたな。

残念ながら『中継局』というのが無くて、現在ではこの機能は使え

ないとのことでしたが、それが本当なら凄い物であることは疑いようもないですぞ。

そして、彼らが最後に取り出したものは『のーとばそこん』というものでした。

何かを写すための小窓は先に紹介されたものよりも大きいですが、カメラとかいう機能もない、音楽を奏でるのにも時間がかかる、おまけになんですかな、使えるまでに時間が掛かるというあまり期待出来ないものでした。

しかし、まさかこの小さな物に彼らの世界の図書館が入ってるなど、想像も出来ませんでしたな……。

ダイヤ＋黄金Ⅱ睡眠時間

／SIDE キュルケ

「おい、マスオ。 お前、あの恥ずかしい壁紙外しただろうな」

「とっくに外してるよ。 他の恥ずかしい系のものは全部一つのフォルダに入れて、隠し属性にしてるから見られねーよ」

ルイズの使い魔の二人が言うところの、人類の英知の結晶とかいう『のーとばそこん』の、カラフルな絵が出ている小窓を眺めながら、彼らの話をなんとなくしに聞く。

恥ずかしいものとか、壁紙とかフォルダとか隠し属性とかワケの解らないものは後で聞きましょう。

にしても、使えるようになるまで待ってくれとか言われても待たせすぎよ。

レディーは気が短いのよ？

「よし、起動した。 お前ら、何がしたい？ 何が出来るかかって？

あー、音楽を聴いたり絵を鑑賞したり出来るな、後ゲームもだな。カメラ機能は無いな。 え？ なんてって……その周辺機器パーツを持ってないからだ。

って、おいおい！ なんてお前ら、そんなに盛り下がってるんだよ！！」

「「「ふう……」」」

待たされた結果が、これじゃあねえ……こんなに大きくて、期待もそれだけ大きかったのに『ケータイ』以下じゃ、わたし達の気分が急下降するのは仕方ないわよ。

確かにこの小窓から見える絵は奇麗だけどね。

「……マスオ、あんたが言った技術ってのはコレだけ？ これじゃ、ちょっと詐欺みたいなものじゃないの？」

その台詞に慌てたのか、二人が何やら相談しだしたわ。

「ネットもネットでもチャットもできねーし、あー、マジどーいしたらいんだー！！」

てか、マスオ。 お前どうやって、技術を教えるとか考えたんだ？」

「えっ？ あー！！！！ あれか。 思い出した！ そういえば、ネットの辞典をファイルにして圧縮してるんだった！ ちよっと待ってろ、解凍するから！！」

といって、何やら操作を شدした。

わたしが解るのは、また待たされるという事だけね。

「解凍完了！ 何か知りたい事はないか？ 大抵のことならこの辞典に載ってるよ」

と、マスオ。 意外と早かったわ。 でもね、いきなり知りたい事とか言われても解らないわけよ。

だから、当然答えは……。

「「「特にない（わ、わよ、ですな）」」」」

「ええええ……あゝ、じゃ、とりあえずこの書庫はサイトのPCでも共有出来るようにして、何か挙げつつ知りたい事があったら調べるといい感じで良いんじゃないか？」

「というか、もうそれしか方法がなさげだしな

という訳で、興味が出そうなものを開いていくよ。 とりあえず最

初は……爆発物に係るのとかどうだ？ ……マジで、火薬に原爆、水爆、反物質迄なんでも揃ってるな」

「こっこっこっ……このバカー!!」

あたしに対するあてつけね! そうでしょ! そう言いなさいよ!
!」

ルイズが発作を起こしたが二人は無視して、何やら操作をしているわ。

彼らは何やら手をうごかし、何かを押し込む度に小窓に写ってる文字と絵が変わる。

これもある意味幻想的な光景ねとみてると、ミスタ・コルベールが声を上げた。

「い、いまのは! サイトくん、先ほどのものを見せてくれないかね!?!」

「えーっと、これですか? これってエンジンですよ? しかも、レシプロ……え、文字を読んでくれた? わ、わかりました」

「これは君たちの世界いや、国ではエンジンと言うのかね。この動いてる絵がわたしが作ってる物の理想系に見えたものでして」と、ミスタが言う。他にも色々なことを聞いているようだ。

その後、説明を聞いては感嘆の声をあげたり、唸ったり、「なんですーっ!」という声も聞こえる。

あたしたちは、ちよつとその男達の会話についていけず、彼らの『ケータイ』を弄って音楽を出したりしていたら、外もだいぶ暗くなってきた。

最後の『ぽそこん』というのにいささか拍子抜けしたけど、そろそろ戻ろうと伝えようとしたら、突然ミスタ・コルベールが杖を出した!?

「ちよつ! 先生!! 幾ら最後の拍子抜けしたと言っても、魔法で仕置きはやりすぎですわよ!」

「いやいや、そういう事ではないですぞ。これからちよつと実験をするのです。」

もし、ここに書いてあることが本当なら……この知識だけで国を買うことすら出来るやもしれませんな」

「「国？」」

それを確かめるための実験ですぞと、ポケットから自分の授業で使う小石をいくつか取り出すと、物凄く集中してそれに魔法をかけるミスタ。

「イル アース デル（錬金）！」の呪文で小石が、透明でそれについて眩い光を放つものに変化する。
しかし、それはどう見ても……。

「ガラス玉を作ってどうするのですか？ コルベール先生」

あたしの問いかけには答えず、もう一度『のーとぽそこん』をじつくりと見て、別の小石に錬金の呪文をかけたのよ。

ややあって、小石は金色に輝く塊になったのだけど……また、真鍮ですか？ 先生。

「……これはね、黄金なのだよ。 ミス・ツエルプストー」

「冗談が過ぎますわ、ミスタ・コルベール。 幾らなんでも、そう簡単に黄金など作れては……」

「うそっ！ こっこれ、金よ！ この重さは間違いないわ！！」

指でその真鍮らしきものを摘みあげたルイズが信じられないことを言っただわ。

そんなの信じられない……その言葉は、あたしの口からは出なかった。

何故なら、ルイズからその塊を手に移されたのだから。 そして、わたしはその重さを知っていたから。

「サイト君マスオ君、信じられないが、ここに書いてあるものは本物のようだよ……」

まさか、ダイヤモンドすら作れてしまうなんて！！」

!!!!!! ダイヤですって!!???

もしかして、このガラス球がそうだと言うの?!

ありえないわ。だって、どんなメイジが何人集まっても、ダイヤの鍊金はできないのよ……。

しかも、この大きさ。それが本当にダイヤだとすれば、一体幾らになるというの!?

わたし達が直ぐ様その知識を得ようとしたのは、言うまでも無いわ。

でも……、

「「授業より難しすぎて、頭が痛い（わ、わね）……」」

／SIDE マスオ

……あの後無事俺達は、俺達の世界の技術を伝えることが出来、辛くも危険な場を切り抜けたのでした。

こうして、今日という一日を平穩無事に過ごすことが出来ました。さ。まる。」

「どのあたりが無事で平穩なんだよ?

あのコルベール先生は突然語りだしたり、俺達に恐ろしい顔で質問攻めしたりするし。

女の子3人組は知恵熱だしてぶっ倒れるし、成功したらしたで自慢しあうし、かと思えば悪口言い合って魔法が炸裂しまくるし、とば

つちりは全部俺等に来るし。

……おまけに最後には学院長ってのがいきなり登場して、メたりと混沌じゃねーか。

タイミングが良すぎるんだよ！ 覗いてたんだろ？ 覗いてたんだな！？ いつからだよ！！」

と、三段活用をしてサイトが叫ぶ。

ちなみにサイトの布団はルイズのベッドを挟んで向こう側にある。

おれの布団はこっち側。

おかげでサイトの奴の叫び声が直接聞こえなくて幸いだった。

覗き見か、まずいな……。

俺が原作知識というより、この世界での未来っぽい知識を持ってることがバレるのも時間の問題かも知れない。

バレてしまうことによるメリットとデメリットを考えてみる。

メリットとして挙げれるのは、権力を持ってる人を味方に引き込めるのと、少なくとも他の奴らに聞かれない場所でおおっぴらに喋れる。

あとは思いつかないな……。

デメリットは、隠し事をしてるという事でイチャモンつけられる可能性とか、危険思想とか言われてとっつかまる可能性が高いという事か。

……今のところ黙っとくか。

学院長も俺等の持つてる情報は広めるなど釘を刺してきたし……。

っていうか、何時から覗き見してるんだよ！！ 最初からだったら

アウトじゃねーか！！！！

てか、コルベール先生が報告してないはずないよな！！

詰んでる？ もしかして詰んでるのか！？

「うるさいわねえ、寝られないじゃないのよ。 まだ、頭の中で周期表が回ってる……の……よ。 ふぁーあ」

次の瞬間、俺の頭に強烈な衝撃が走り意識を刈り取る。
ルイズから光の弾（魔法の射手 弱V e r）が飛んできて俺とサイ
ト頭に当たったのだった。

／SIDE サイト

あの騒ぎから数日たった。

アレから学院でコルベール先生に出会うたび、辞典の内容を読み上
げさせられてるような気がする。

プリンターがあれば……って、こっちの世界の言語じゃねーな、フ
ォントすらねーし。

ダメか。

そういえば、今日は虚無の曜日とかいう、俺達の世界での日曜みた
いなモンらしい。

今日はルイズは城に行つて、マスオが言つてた『なんたらの本』を
見せてもらうらしい。

その中には念願の、元の世界に帰れる魔法もあるそうだ。

というわけで昨日からルイズはそわそわしっぱなしで、俺等や他の
先生が話しかけても上の空だった。

あの挙動不審状態で良くもまあ、ぐっすり眠れるものだな。 マス
オもルイズも。

まあ、うるさいこいつ（ルイズ）も寝てれば可愛いものにな。

……いつまでも、寝顔を見るのも不味いし、そろそろ起こしてやるか。

「おい、ルイズ起きろ。朝だぜ」

「ううーん……ク、クックベリーパイ……もう少しで、ふああ、錬金出来そうなのに、邪魔しないで……」

「食い物は錬金できねーよ。いいからとっと起きろ」

「あんた達が見せた……周期表に……ん……載ってるじゃない。ほら……ここよ」

「載ってるわけねーだろ。おまけにルイズの脳内周期表は見れねえよ」

「ん……むう、うるさいわねえ……あんた達邪魔よ、んむう……あっち行ってなさい、よく。」

プラクテ〜ビギナル……ウエニアント・スピーリトウス（雷精）

アエリアーレス・フルグリエンテース（風精）……」

「……！……って、バカやめろ……！……それ『雷の暴風』の詠唱じゃねーか！

寝ぼけんな……！……ていうか、追い払うのにそんな呪文使うな……！

おい、マスオ起きろ……！……とっと逃げねーとやべえぜ……！……」

「クム・フルグラティオーニ（雷を纏いて）んむう……フレット・テンペスターズ（吹きすさべ）……」

「ルイズやめろって……！……今日は城に行くんだろ……！……虚無って魔法を覚えるんだろ……！……」

「そ、そっそーよ……！……今日は王城に行って王女様に会って『始祖の祈祷書』を拝見させて頂くのよ……！……」

もー、どうして早く起こしてくれなかったの……！……」

理不尽なことを叫びながらルイズがガバリと起きる。ふいふ。

危なかったぜ。

って、おい……！……ルイズの右手がなんかバチバチ言ってるぜ……！……って、不完全ながら発動してるのか……！……？

「「あわわわわっ!!」」

俺達に出来る事は、放電してる右手を眺めることだけだった。

その直ぐ後、部屋中で電気を纏った暴風が荒れ狂ったのは言うまでも無いな……。

「ケホッ……。朝っぱらから散々だわ。

それにしても、この騒ぎでも眠れるなんてマスオの奴、神経が図太すぎよ」

ルイズの視線の先には、苦悶の後安らぎを得た死人の顔をして寝ているマスオが転がっているのだった。

ダイヤ＋黄金Ⅱ睡眠時間（後書き）

前回に引き続き今回もちょっと短いです。

プロットを作っていない弊害がそろそろ出そうです。

拙い文章ですが、暇つぶしの一助になれば幸いです。

そうだ町へ行こう

／SIDE ルイズ

ガニマタで歩くあたしの従者（使い魔と呼ぶと怒るのよ）二人を人避けの壁にして、あたし達はトリステインの城下町を歩く。
学院に魔法の暴走でグチャグチャになった部屋の修理を頼んで、今さっき町に到着したのよ。

まったくビックリしたわ。 朝起きたら魔法が勝手に発動していて、部屋をめっちゃくちゃにしていたのですもの。

おまけにマスオは少しヤケドして気絶しているしで、二人で『クーラ（治癒）』を何回したか判らないわ。

もっとも、目が覚めた後は自分で水を使った『クーラ（治癒）』を使って直してたけど。 やっぱり溺れてたけど。

それに！ 魔法の所為で家具が焦げただけでなく、凍ったり濡れたりした場所もあったのよ！

この謎には3人で悩んだけど、結局答えは出なかったわ。

複数の属性を無意識に同時に使うなんて、あたしって天才！ って事で纏め様としたけど、「「ナイナイ」と、また手を振られたので、更に部屋が散らかったわ。

そして、いざ移動となったのだけど……この二人、馬に乗った事が無いとか言い出すんですもの、さすがのあたしも呆れたわ。

練習してる時間は無いので、馬に怯える二人をなんとか乗せて、後ろを付いてこさせたの。

二人の慌てる様ったら言葉に言い表せないほど面白かったわね。

ああ、シャシンに撮っておけば良かったわ。

二人の世界では長距離の移動はどうしてるのかしら？

まあ、またカガクって奴で解決してるのじゃない。そうだわ！

帰ったら彼らの世界の移動手段を調べてみましょう。

直ぐに二人が確認してたけど、パソコンはあの魔法の暴走でも壊れてないらしいわ。

ちなみに、二人用の固定化の掛かったタンスの中に入れてたから大丈夫な筈よ。

……

…

マスオが言うにはこの城下町で、ガンダールヴ用の伝説の剣が手に入るらしいわ。例の未来知識という奴ね。

……って武器屋にある？

「あのね、なんで伝説の武器が城下町の武器屋にあるのよ？

伝説ってぐらいだから、岩に刺さってるとか、どっかの地下洞窟の中に鎖で封印されてるとか、溶岩の中にあるとかそんなじゃないの？」

「「……はあ」」

なによ？ そろって二人して溜息とかついたりして。

「えっと、この秘薬屋の裏に武器屋があるらしいんだけど、それにしても、ここって汚いし臭いわねえ……」

「こういうところから奇麗にしないと、ビョーキとか流行るらしいぜ。」

あっと、あの剣が書いてある看板の所じゃないか？」

「判ってるわ。あんたらの武器を買った後、王女様に謁見するか

ら進言しておくわ」

「バイキンって奴ね。 トリステインの頭の固いお偉いさん方に、目に見えないモノを信じろって言って、信じるかしら？」

「可能性はゼロではない」

「それって、もちろん信じてくれる可能性が……だよな」

「「もちろん（よ）」」

「はぁ……あんた達いつの間に来たのよ。 しかも、当然の様に話しに加わってるし」

「興味ある」

「あんた達のやることは傍から見ても面白いからね、観察よ観察」

「~~~~っ！ 勝手になさい！！ 邪魔だけはしないようにね！」

「へい！ らっしゃ……貴族の旦那、ウチはまっとうな商売をしてるだけでさあ。 お上に目をつけられる謂れはありませんぜ？」

「「客（だ、だぜ、よ）」」 「「冷やかし（よ）」」

「コホン、最近はお僕に武器を持たせるのが流行らしいですぜ」
変わり身の早い店主ね……。

サイトとマスオは早速武器を物色してるわ。

「所持金的に余計なものは買えないわよ？」

「……金的！ くっくくく！」

「おい、そこに反応するな！」

くだらないことを言うマスオに、近いところにあった石を後ろ手に投げつけたわ。

有る意味的中したようで……「あら、ごめんあそばせ」 バカ2号は膝から崩れ落ちて倒れるのだった。

時間はあまりないし、さっさと買い物を済ませましょう。
手っ取り早く、この商人に直接尋ねることにしたわ。

「この店に伝説の剣があるってのはわかってるの、それを買うわ。
早く持ってきて頂戴」

あたしの一言に驚いた店主だったけど、あたしの言葉を即座に理解
したのか店の奥に行ったわ。

当然のことながら、サイトもキュルケもタバサも驚いてるわね。
ところで、何でサイトも驚いてるのかしら？

伝説の剣かく、どんな剣が出てくるのかしら、楽しみね。

……マスオはなんでいきなり飛び起きて、ボロい剣売り場を漁って
るのかしら？

こいつの考えはいまだに読めないわ。

「お待たせしやした。こいつで如何でしょう？」

「「「おおお〜〜〜！！」」」

店主が持ってきたのは、輝く宝石が散りばめられた豪華で大きな両
刃の両手剣だったわ。

あたしたちの口から思わず感嘆の声が上がったのは仕方ないことだ
わ。

「それ、かう……」買うわ、と最後まで言えなかった。

「放しやがれ！ おめえみてえな間抜けな奴に持たれたら、こっち
まで間抜けが移りそうだ！」

隣で突然ガラの悪い声が聞こえたものだから、思わずそっちを見て
しまった。

「やい！ デル公！ お客の前でボロ剣風情がデケェ口叩くんじゃ
ねえ！ いま大事な商談中だ」

「へんっ！ そんなカス見てえな剣に金を払う奴がいるなら見てみてえモンだ！ おっと、目の前にいやがったぜ！」

「え？ なにこれ？ インテリジェンスソード？」

「へえ、なにぶんこいつは口が悪い奴でして……おい！ 黙らねえと、溶かすぞ、この野郎！」

「おー、おー！ やって見やがれ！ もう、この世には飽き飽きしてんだよ……！」

「お、俺、コレ気に入ったなあ……これ、ほしいなあ……」

口げんか続ける店主とボロ剣に腰が引けながらマスオが言う。
喋る剣なんて確かに珍しいけど、あんた達の『ケータイ』とか、『パソコン』とか喋ったり歌ったりするのは幾つも有るじゃないの。
インテリジェンスソードも喋るからって、コレクションに加える気？
歌でも仕込むつもりかしら？

「あゝ、それでしたら新金貨100枚で結構でさあ。おまけに、鞆までサービスでつけやしよう」

「おーっ！ 買った……！ というわけで、ルイズ。勘定よろしく」

「仕方ないわねえ……そのボロ剣ちゃんと使うのよ？ それと、飽きたからって捨てるんじゃないわよ！」

「毎度ありー」

と購入して、早速鞆にボロ剣を収めるマスオ。

それを背中に背負わないで、そのままサイトにわたしたあ？

「「ちよっ！ この剣、俺サイトに使えっていうの（かよ）？ って、お前はとっとと物色し始めるな……！」」

……

…

あの後マスオは店主に、「今日は持ち合わせが無いらしいので、この剣だけで帰るよ」と伝え、さっさと店を出たわ。

わたし達も直ぐ様後を追うのだけど、キュルケとタバサはさっきの剣を買おうか真剣に悩んだらしいけど、結局買わずに店から出てきたわ。

「ルイズ」。 使い魔に財布の中身を心配されるなんて、恥ずかしいわよ?」

裏路地に入って直ぐ、キュルケがからかうような口調で言ってくる。

って、揶揄するためだけに出てきたのね! まったく……! それよりも、こいつよ!

「ちょっと! 伝説の剣を買うんじゃないの? なんで、よりにもよって珍しいとはいえ、喋るだけのボロ剣なんて買ったのよ? しかも、サイトに直ぐに押し付けたりして!」

当のマスオは声を出して笑ってるだけだったわ。 更に追求しようとする、とんでもないことを言い出したの。

「よっしゃー! 伝説の剣『デルフリンガー』ゲットー!!」

「「「はあ? これが伝説の剣!?」」」」

「……インテリジェンスソード、しかも只ボロくて口が悪い剣じゃない? 適当に言ってるだけじゃないの?」

「おめえ、どうして俺の名前を知ってるんだ? おめえ見てエな間抜けそうな奴等と会った事はねえんだがな?」

鰐の部分の稼動部分を上手に使い、ボロ剣が口を出してきたわ。

デルフリンガーねえ……名前だけは立派ね。

「って、俺を持ってる奴って使い手か!? 何千年ぶりなんだろうな! この懐かしい感覚!

おめえあれだろ? ガ、ガン、ガダ……って忘れちゃったよ」

「「ほっ」「」」「「???」」

重要なことをペラペラ喋ろうとしたバカ剣だけど、物忘れで出なかったみたいね。

疑問符を浮かべてる二人の隣で、わたし達が胸を撫で下ろしたのは言うまでも無いわね。

「そういえば、インテリジェント・ソード……インテリジェントねえ。 知能の有るって意味だったよな? たしか。

俺この言葉なんか別でも聞いたことがあるんだよね……。 !!
って、思い出した!

リリカルなのはのインテリジェント・デバイスだ!」

「「「???」」」

「それは知らないな。 ていうか、またアニメか漫画ネタかよ!」

もはや、こいつ等が何を言ってるのかさっぱり判らないあたしたちだった。

／SIDE マスオ

今俺達4人……俺とサイトキュルケとタバサは露店を見て回ってる。
『デバイス』の簡単な説明が終わったので、その後王城に入ろうと

したら、門番に止められたのだ。

ルイズはこいつ等は兎も角、俺等は身内だから入れろと行ったけど、身分の不確かな怪しいガイジンを入れるのは問題があるとして、断固として入れてもらえなかったのだ。

まあ、それについては納得できるので、一言『エクスプロージョン、デイスペル、ワールド・ドア』が呪文だと伝え、メモ帳とボールペンを渡してルイズと別れた。

その後紆余曲折を経て、俺達は露店を見て回ってるのだった。それにしても……いま思い出しても腹が立つ……！！

「サイトにマスオ。少しは落ち着いたかしら？ あんた達の国じゃ無いのかもしれないけど、あれもこの世界の文化の一つよ。納得しなさいとは言わないけど、気にしすぎるのも悪いわ」

「ああいうのは何処でもある。奇麗事では回らない」

「「わかってるっ！ わかってるけど……！」」

俺とサイトの声が重なる。

俺達の言葉からは悔しさがにじみ出ているのだった。

先ほど見た光景……それは、金持ちそうな奴が、首に首輪を巻かれた何人かの人間を連れているというもの。

最初は何かの冗談かと思った。

それは、紛れも無く奴隷だった。

その事実が頭で理解すると、俺達は彼らを助けようと走り出した。それを必死で留めてくれたのが、キュルケとタバサだった。

曰く、奴隷の所有権は主人にある。それを奪うのは犯罪になる。曰く、よしんば助けられたとしても、あんた達の身分と収入では彼

等を生活させれない。

曰く、悪く言えば下手なことをすれば、彼等が責めを負うことになる。

等々……。

それを聞いた俺達は、地面を叩きこの世界の不条理を嘆くしかなかった。

そうだ。俺達はそんなもん、絶対認めない。絶対にだ！

俺の中に絶対に挫けない誓いが一つ生まれた。

そうだ、今は俺達は何も出来ない。

だが、必ず助けてみせると、頭の中で構想を練る。

すぐ様思い浮かんだものはあったものはあったが、どう考えても『力』が足りなさすぎた。

再び自分の力不足に歯噛みするのだった。

……

：

「おい！ 見てみるよ。これってディスクじゃね？ なんでこんなもんが……。」

それよりも、コレってノーマンで読めるんじゃないか？」

先ほどのことを無理やり振り払うように騒ぐサイト。

奴は、露店で出されてる品を見せてきた。

「これは旦那お目が高い。この虹色の円盤はとても珍しい品でして、御夫人への贈り物だけでなく、部屋のインテリアとしても良いと思いますよ」
と、店主。

「目で焼けてるかもしれないけど、もしかしたら、面白いものが写るかもしれないよ」

「写る？ ああ、これをこのように日の光で反射させれば、美しくも幻想的な日の明かりが……」

「「つて、やめんか！」」

俺達がハモって無体な行動をやめさせた。

おまけに、キュルケ達に強請^{ねだ}り、そのディスクを買ってもらった。

その後、ルイズと合流し暗くなる前に学院に帰ったのだった。

ルイズはニヤニヤしっぱなしで気持ち悪かったが、その顔を見る限り成功したのだろう。

だが、『始祖の祈祷書』は持って居なさそうだった。借りられなかったが、読ませては貰えたというところか。

三つか？ と聞くとそうよ！ と返事が返ってきた。バレれてないか？ の問いにも大丈夫と帰ってきた。バレれてない

早速、虚無の呪文ってのに興味が湧いて、メモ帳を見せてもらったが、書いてあったのは落書きだった」

ルイズに魔法を食らわせられた。

そうだ町へ行こう（後書き）

という感じで、ルイズが虚無の魔法を覚えてしまいました。
あとは、こういう風に動いてもらうかですが、かってに動くんですよ。

あと、デバイスとかさりと出しちゃいましたが、とあるものが変形したり使用者が変身したりする予定はありません。
機械による魔法への干渉が出来れば面白いかなと思います。

……まさかコレが、自らの首を絞める結果になろうとは、想像も出来ないのであった。

まさにこの一手が、悲劇の始まりだった。
と、ならぬよう整合性を適当に整えながら頑張ってみます。

いわゆる覚醒イベント

／SIDE サイト

俺達はルイズの部屋に戻り、今日買ってきたものを見せびらかしあう。

といっても、俺等の金で買ったものは一つもないんだがな。買ってもらったディスクをノーパソに入れて調べる。

有名な会社の名前がずらりと並んで、お金の出入りっぽいのが書かれたファイルが入ったディスクと、医学書っぽいデータが入ったディスクだけだった。これって、もしかして、裏帳簿って奴か？
使えねえ！

幾ら探しても、俺達の期待していた『お宝』は無かったのだった。でも、タバサが医学書のディスクに興味深々だったのは何でだろうな。

「へーへー、これが剣か。ボロボロだけど俺剣とか初めて持ったから感慨深いぜ」

そんな中、今日武器屋で買った剣を鞘からスラリと引き抜く。マスコに押し付けられた伝説の剣だ。

その銘をデルフリンガー。自分で考えて喋るという信じられない剣だ。が、物凄く口が悪い。

勝手に騒ぐボロボロ剣のデルフリンガーを握り上に掲げ挙げると、それだけで強くなった気がする。気分は伝説の勇者だぜ」

「へっ、あたばーよ！ この俺様を使って弱え訳がねえ、なんせ相棒はガンダ……なんとかだからな！」

「はいはい、それは良いとして……」 「ガンダールヴ」
キュルケが何か言おうとしている先に、タバサがポツリと言う。
って、その単語はヤバイだろ……！！

「タバサ？ それなんなの？ このボロ剣が言ってるガンなんとかの正式名称？」

「そう。伝説の系統虚無。」

その使い手ブリミル・ヴァルトリの使い魔達の神の盾……。それが、ガンダールヴ

「へへ。それが……って、まさか！？ いえ、サツサイトが？
ル、ルイズっ！ あなたの属性ってまさか！？」

「こ、こっ、こっここ、この！ バカ剣！！ バレちゃったじゃないのよ……！！」

「「自爆しやがった……」」

激昂するルイズと反対に俺達は頭を抱えるのだった。

「どうして黙ってたのよ！？」

「どうしてって、言っても信用しなかったでしょ！」

「いつから知ってたのよ？」

「そ、それは、こいつらが来てから……よ」

「なんで教えてくれなかったの……」

「ルイズを責めないでやってくれ。 周りに黙っておくように頼んだのは俺だ」

と、マスオの奴が頭を下げながこの暗い雰囲気の中言い出した。
キュルケの視線がマスオを貫く。

奴はヘタレな精神を奮い起こし説明しはじめた。

「知っての通り、この国で虚無と言うのは巨大な力の代名詞であり、それを知った各国のお偉いさん方は、間違いなく戦争を起こすと思う。」

遅かれ早かれそうなったことは間違いないだろうけど、それでも、その時期は俺達でコントロールしたかったんだ。

すくなくとも、ローマなんとかという国と……えーっと、もういいやつ！　ガリアっていったか、その王には知られなかった！
！」

と、タバサを見るマスオ。

何故タバサ？　と思った。　周りの皆もそう思ってるようで、顔中で疑問を表してるようだった。

が、突然タバサが杖を構えだして、「「「まった、まった！！」」

俺達は大急ぎで、タバサを抑えようとしたのだったが、彼女は呪文を唱えだそうとする。

「相棒やべえ！　あの嬢ちゃんほとんど本気だぜ！」

判ってる！　と返して、マスオの前に剣を盾にしながら立つ。

「うっ……こええ！　って、まった！　何で、おれがこのタイミングで話したした、と、思うんだよ？」

俺達に杖を突きつけ、「何故？」　と聞くタバサ。

一触即発の雰囲気部屋を覆う。

その空気を破ったのも奴だった。　大きく息を吸い、トドメの一言を言った。

「母親を救う用意が出来たからだ！」

その台詞を聞いたタバサの反応は顕著だった。

呆然となり杖を取り落とし、膝から崩れ落ちる。

「何故、知ってるの？　あなたは別の国から来た人間でしょ？　な

のに、何故……」

「読んだんだよ。この世界のことを物語として……ね」と、マスオはそう答えるのだった。不思議なことに、タバサたちからの追求は無かった。

「タバサの母親を救うのに協力して欲しい！」

「タバサは大事な友達だから助けるのは良いけど、どういう事なの？」

息を大きくつくと、マスオが改まってお願いしてきた。

タバサに説明して良いか？　と尋ねると、タバサは悩んだ末、コクリと小さく頷いた。

一体何をこいつは知ってるんだろうか？

「タバサはな、ガリアって国の人間で、王家とやらの近いんだっとな。

で、今の王に自分の父親を殺されて、母親にエルフの作ったらしい心を壊す薬を使われたんだ。

んで、ガリアの王家はタバサの母親を人質にして、タバサに無理難題を押し付けてるんだよ」

「そんな酷い……」

「父親ばかりでなく母親まで……しかも、人質だなんて」

「おい！！　ちょっとそいつ何処に居るんだよ！　ぶん殴ってやる！！」

王様だろうと関係あるか！　そんな酷いことをする奴は、許せねえ！！

「にしても、ああああ〜、こえええええ、マジでこれで良いのか

？ これで良いのかよっ！？
……って、やべええええ！！ ガリアの王も虚無だったよ！ そう
いえば！！」

「「「なん（だ、です）って……！」「」」

……

……

：

「と、兎に角よ！ マスオはどういう計画で行こうと思ってたのよ？」

ルイズが自分と同じ虚無の使い手と聞いて、動揺を抑えながら尋ねる。

「そうよ？ 救うたって、得体の知れない虚無魔法でどうにかなるの？」

得体の知れないってなによ！ 見たこと無いんだから仕方ないでしょ！ とルイズとキュルケが言い合う。

「俺が読んで理解した限り、虚無魔法の『ワールド・ドア』は誰かに使って、その人に関係のある場所に道を通す魔法みたいな感じ。で、もう一つの『デイスペル』は魔法の効果を打ち消すって所かな」

「おい！ 魔法の効果を打ち消すって……このルーンも消せるのか！？」

あと、その『ワールド・ドア』で、にっ日本に俺達は帰れるのか！？ もちろん、終わったあとだけだな……出来ることなら、皆で日本に逃げたいぜ」

さっきは頭に血が上ってたが、落ち着いて考えると、王家……一つの国家に喧嘩を売って無事で済む訳ねえ。

それについても考えないと、取り返しの付かないことになるかもしれない。

返答はどちらもわからない。試したことが無いからだ。

日本に逃げるのは、ハルケギニアの貴族としてあり得ないそう。

マスオの奴は何かを考えたあと、コレが計画と呼べるかはわからないと前置きし語り始めた。

「まず、ルイズの『ワールド・ドア』をタバサに使い、彼女の家に飛ぶ。その後、『ディスペル』で母親の精神を壊してる魔法を解除する。

そしてキュルケに『ワールド・ドア』を使い、キュルケの実家に飛んでタバサの家の人たちを匿う。

その後すぐに、ルイズの実家か学院に戻ってくる。

全部の工程をガリア王家にばれない様にやるのが重要……」

「おー！ それなら全員の力をあわせればいけそうだな！ じゃ、早速準備するか。て、お前等どうした？」

「それはダメ。許可も無く他国に侵入するのは大罪。捕まれば只じゃすまない」

「わたしもその案には反対ね。要人を連れ去るのはリスクが大きすぎるわ。下手したら3カ国で戦争になるかもしれない」

「虚無の魔法を3回、いえ4回ね。あたしの精神力持つかしら……」

「家が空っぽじゃイチャモンつけてくるよなあ……やっぱ、ダメかあ」

と、マスオを含め皆が反対する。おいおい、お前も諦めるのかよ！ 俺はいけると思ったんだが。

「くっそー！　せめて、タバサの母ちゃんだけでも治せないのか？
その、ガリアって国に合法的に入ればルイズの魔法で治せるんだ
ろ？」

ていうか、向こうは俺達のことを知らないんだし、正攻法で良いん
じゃねーか？」

「「「そういえば、そーか！」「」」

「さっきの案は、時間的に余裕が無いときに使いましょう。

……それと、サイトにマスオ。　あんた達を元の世界に返すわ。

国家間の話なんて大きくなりすぎよ。

あたし達は貴族で家も大きいし、何かあっても家と国が守ってくれ
るわ。

でも、あんた達は難しいの。　だからよ。

先にマスオを元の世界に戻すわ。　サイトは『デイスペル』を使う
から、その後よ」

「「ま、まった！！」」

まだ、俺達は遣り残したことがあるんだぜ！？

これから先のことを、女の子達だけに丸投げなんてできるかよ！！

コレが『ルーン』の洗脳効果で意思が変わったのかと思ったが、

これは純粋な俺の意思だ！！

「待たないわ。　短い間だったけど、あんた達のおかげで魔法が使
えたり出来たわけだしね。　感謝してるわ。

それじゃまたいつか、会いましょう。　……ワールド・ドア（世界
扉）！！」

ルイズが虚無の呪文を書いたらしい、メモ用紙を見ながら長い長い呪文を唱える。

ややあって、現れたのは真っ赤な色をした縦長くて薄い壁だった。これが、ワールド・ドア？

てっきり、向こうの世界というか景色が見えるかと思っただぜ。

もしかして、おれも戻るときはこんな壁に突っ込むのか？

なんかこの壁、危険な雰囲気を出してるんだよな。大丈夫なのか？

ルイズが「早くしなさいよ！」と隣で魔法を維持したまま言うてるが、取り会えず何か入れてみようと思い、手の近くにあった何かの破片を投げてみた。

次の瞬間、小さな光を上げ破片は消滅したのだった。
って、おい！　なんだこりゃ！？

その直ぐ後、テレビを付けた時の羽音のような音がしたとおもったら、マスオの目の前……文字通り目の前の空中に、あれはSFなんかでみるウィンドウ？　が出ていたのだった。

「「「「なんだ、これ？」「」」」

奇しくも俺達は同じ言葉を出していたのだった。

／SIDE　ルイズ

あたしは確かに、マスオの世界にワールド・ドアで道をつなげたはずだったのよ。

でも、目の前に現れたのは、真っ赤な壁。しかも、触れたものを消滅させるようなものだったの。

そして、続いて空中に現れたのは変な色の付いたな長方形の窓？
見たいなもの。

流石のあたしも、集中を切らして魔法の効果が切れちゃったわ。
しかも、この魔法やけに疲れるのよね。

それにしても、この窓みたいなの見覚えあるわ。

……そうよ！ 二人の持つてるパソコンで出てきた奴じゃない！
なぜ、こんなものが空中に出るのよ？

「また、あんたら何かやった？」

あたしの問いに対する反応は首を横に振ることだけだったわ。

あいにく、こいつらの世界の文字はあたし達は読めない。

なにが書いてあるのかと思ったら、サイトが読み上げたわ。

「えっと、『ファイアーウォールは正常に作動しています。許可
されていないデータを検知したためデータを消去しました』って、な
んだって！？」

おい！ マスオ！ 俺はこんなの知らねーから、これお前のモンだ
よな！？ なんだよこれ！！」

サイトが信じられないという顔をして、マスオを見てる、いえ睨ん
でるわ。

パソコンで表示されているようなものと同じように、あたしには見
えるのだけど、サイトとマスオには違ったように見える。

あんた等お得意のカガクって奴じゃないのコレ？

サイトはマスオの胸倉を掴み上げ、あの窓を指差し問い正している
わ。

あたしにはさっぱり訳が判らないのだけどね。
そもそもファイアーウォールって何よ？

とりあえず、キュルケに目配せして二人を引き剥がす。

「ひょっとして、アレに書かれてる『管理者』というのを知ってるんじゃない……いや、違うな。ひょっとしてお前がそうなんじゃないのか!？」

『管理者』ねえ、なんか仰々しい言葉が出たわね。

「とりあえず、全部話しなさない。じゃないと、サイトもだけどあたし達も納得できないわよ?」

黙ってたマスオはあたしの有無を言わさぬ命令で、意を決して話しました。

「……最初は、なんでも出来る『力』が欲しくて、実験を始めたんだよ。

でも、俺が作れたのは、完全なランダムでデータを構成するだけの装置だけだった。

だけどな、どんな運が作用したか判らないんだが、ランダムデータだけで平行世界が出来てしまったんだ。

おまけに、それを管理するアプリも……な。

その時、実験に失敗して気がついたらこの世界にいたんだ。

だが、誓って言うぞ。俺はお前達をNPC扱いたことではない!」

二人の言ってる言葉の意味が判らなくて判別が付かないのだけど、何か決定的な崩壊を招きそうな雰囲気は最後の一言で無くなりつつあるわね。

でも、平行世界を作るって、どういう意味かしら? それにNPC? まさか、こいつが世界を作ったという事は……」

「……クソツタレ!!　　そうだよ、お前は俺達をてめえと同じ、只の人間として接していた。それは判るぜ。

けどな、感情が納得できねえんだよ!

あとな、ルイズ。それは考えすぎだ。人間がそんなもんになれるわけがねえぜ。

もしそうだとしても、平行世界が有るという事実があるんだ。こいつだって誰かの作ったモンかもしれねえだろうが!

「で、でも!」

「神学論争なんぞ終わるはずが無いんだから、付き合ってられないぜ!」

と、サイトは話しを打ち切った。

「落ちて相棒!　嬢ちゃんたちに怒鳴ったって問題は解決しねーぞ!」

剣に諫められるとか、サイトも情けないわねえ。怒鳴りたくなる気持ちもわかるけど。

むー……。

謎ばかりが有るじゃない。

確かにここで神学論争なんてしても意味無いわね。

ロマリアでもブリミルの教えを巡って分裂したなんて噂を聞くぐらいだし。

それよりも、よ!

ファイアーウォールでしょ、管理者でしょ、アプリでしょ、NPCでしょ。

あたしは、一つずつわからない単語を思い出していくわ。

これらの説明が無ければ判断出来ないじゃない。

そういうえば、平行世界ってのは、会った日に説明してもらったわね。

……判らない事は聞いてみるしか無いわね。

サイトとマスオは頭に血が上ってるようだけど、無理にでも落ち着かせるべきかもしれないしね。

「質問があるのだけど、いいかしら？」

あたしが尋ねるのに先んじてキュルケが質問を始めた。

って、あんた何を聞く気よ？ 下手なこと聞いて掻き回したら承知しないわよ！？

「後にしてくれ！ いま、考えてるんだ！」

「良いから答えなさい！！ マスオが『力』とか言ってたけど、それを使えばタバサを安全に助けられるの？」

驚いたわ。 この状態でも、友達の事を考えてるなんて……年中発情女とか思ってたけど、認識を変えないと。

サイトもマスオも状況が判ったみたいで、頭の血が降りてきたいね。

「使ったことないから判らない。 と言うしかない、ね。

もし、『力』があるとすれば、デスクトップパソコン……メインのパソコンからじゃないと使えないと思う。

『管理者』としての設定は向こうでしたから、『アプリ』も向こうにあるはずだし。

んで、そのメインのパソコンは、さっきの『ファイアーウォール』を越えた先にある筈なんだ」

「くっ……！ はあゝ、つかえねええええゝゝ。

何とかならねーのかよ？ お前が言い出した事なんだぜ？ タバサを助けようってのは。

それが女の子達にまかせっきりとか情けなくねえのかよ？

お前、パソコンが得意なんだし、この浮かんてる奴もなんかの『アプリ』だろ？

『ファイアーオール』を抜いて表示してるんだから、この投影コンソール？ 見たいな奴からアクセスとかできねーのか？」

「っ！！ その方法があったか！ ちょっと試してみる！」

と、マスオがその空中に浮かんでる窓を引っ張ったり突付いたり、撫でてみたりと色々やっている。

窓は指にそって動いたりしてるけど……見てる限り、まんま変人よあんだ。

キュルケの質問のおかげで、だいぶ謎が解けたわね。

わたし達が触っても何も起きなかった窓を動かせるという事は、『管理者』ってのはやっぱりあいつみたいね。ムカつくけど……。

『アプリ』というのは、パソコンでいうところの何かの動作しているモノの样ね。

『NPC』というものはまだ良くわからないけど、『ファイアーオール』というのは、さっきの壁みたいなものね。

それを抜いてきているという『アプリ』が……って、考えればわかることじゃないの。パソコンの話しよパソコン……って！？

まさか、あたし達はあのパソコンの中みたいなどころにいるというの！？

はあああ、サイトが怒り狂ってた訳が判ったわ。そりゃ腹が立つわよね……！！

キュルケとタバサは……まだ気がついてないみたい。教えないでおきましょう。知らないほうが幸せだわ。こんな事。

「でも、感情は別問題よ！ 一発食らってなさい！！ ……サギタ

マギカ ウナ ルークス（魔法の射手 光の1矢）！」

あたしのひとときわ大きな魔法の矢は空中に浮かぶ窓に当たり……そのまま貫通して壁に当たった。ちいっ！

「「ああーっ！ 投影”コンソール”が！！」」
サイトとマスオが理解できない単語を叫んだ瞬間……この部屋が不思議な窓で埋め尽くされた。

／SIDE マスオ

俺の周りをさっきまで出ていたのと同じような、空間投影ウィンドウ（っていうのか？）が埋め尽くす。

それは一つ一つは似ていたが、中に書いてある文章がそれぞれ違っていた。

そして、目の前にある一際大きなウィンドウ。

その中央には認証中と書かれた小さなウィンドウが有り、中にはパーセンテージがついた進捗バーがある。

沢山あるウィンドウが処理が終わると、それに吸い込まれる。

ひとつずつ吸収するのにあわせて、色の付いた領域が広がっていく。まぶしっ！ 行き成りウィンドウの一つからスクャナーっぽいレーザーが飛んできた！

「なんだよ、一体これは！ まるっきり、SFに出てくるようなOSの起動画面みたいじゃねーか！

……あー、SFってのはな、俺達の世界の未来を予想した技術の事だよ。で、OSってのは基本となるものだよ。

なんかもう、おなか一杯だな。これが終わったら教えてくれ」

サイトは一通り驚いた後、彼女達に説明をし、諦めたように「はいはい、すごいでちゅねー」と言って布団に入り込んだ。

やがて全てのウィンドウが俺の目の前のウィンドウに吸い込まれ、小さなウィンドウの進捗バーも100%を指した。

ややあって、小さなウィンドウが消え、更に、その後ろのアプリケーション？　っぽいモノが、アクティブになる。

大きなウィンドウの下の方から長方形の光のウィンドウが斜め……って、これキーボードか！？

大きなウィンドウに写ってるもの。それは、一つのウィンドウの中に英数字の羅列がひたすら書き込まれた部分とタブが連なってる部分とに分かれたアプリケーションだった。

というか、俺はこのようなアプリを知っている。

「……まさか、メモリーエディター、なのか？」

「おう、終わったか？　って、なんじゃこりゃ？　しかも、メモリーエディターってのは初めて聞いたぜ」

サイトが布団から起き上がり、伸びを一発して全員でウィンドウを覗き込む。

「目が痛いわねえ、なにこの変な窓」

「これって、あんた達の世界の数字よね？」

「これがアプリというもの？」

「「で、これで一体なにが出来る（んだ、の）？」」「と、全員揃って尋ねてくるのだった。

ちなみに、デルフリンガーは部屋の隅に転がってる。

「おい、相棒……。　剣って奴はさびしいと死んじゃうんだぜ……」

みんなの前で、俺は素直に何が出来るのかを教えるのだった。

ひよっとしたら、これで友達関係も終わるかもしれないな、と思いつながら。

「……これを使えば色々なイカサマが出来るんだよ。力や精神力を増やせたり、強さを上げたりするんだ」

「イカサマなあ。力や精神力それに強さってのは、魔法やこのルーンって奴でも上がるが、それとは違うのかよ？」

「こいつを使えば好きにだけ上げれるんだぜ？ 特訓なんてしなくてもな。他にも、無敵とか不死身ってのも出来るんだぜ？」

「不死身って、吸血鬼やアンデッドみたいになれると言うわけね。危険だわ。で？」

「え……。いやいや、死者復活もできるかもしれないんだぞ！」

「始祖ブリミルが使ったといわれてた、虚無の魔法みたいね。：

…使い手は目の前にいるんだけど」

「それは、ただの伝説だろ！ 後は……お金を好きにだけ増やせるとか！」

「鍊金で良いと思う」

何、この反応？ チートだぜ？ イカサマだぜ？ 改造だぜ？ な

のに、なんでこんな反応が鈍いんだよ！？

4人とも驚かない？ 俺は意地になりトドメとなる一言を言う。

「やろうと思えば……人間の思考や性格も弄れるんだぜ！？」

「おい！！」 俺の言葉にサイトが俺を睨みつけながら反論する。

「俺はな！ このルーンって奴に現在進行形で洗脳されてるんだよ！！！」

……あるえ。おかしくね？

俺の『力』に興味を失ったルイズ達が、タバサの母親の救出について話しをします。

「やっぱり、キーとなるのは虚無の魔法ね。なんとかして、ガリアの王ジョゼフの裏を搔かないと」

「ジョゼフも虚無の系統なら注意が必要」

「そうね、さっきワールド・ドアを使ったのだけど、消費がかなり大きいわ」

「ああ、それはマスオの奴に任せましょ。あれだけ大きな口叩いたんですもの、それぐらいやれるはずよ」

「と、なると後は何時やるか……だな。今度は俺を除け者にしようとかすんなよ？」

「なんで……こんなの、化け物の力だろ？ おかしいと思わないのか!？」

「ふう………マスオのチートっていう『力』は凄いものかもしれないけど、魔法の延長線上にあるものばかりなのよ。」

『力』っていうのは、どう使うかが問題なの。あたしたち貴族が言えた事じゃないかもしれないけど……。

それを踏まえて言うけど、間違えないように使えば良いんじゃないの？

そして、間違ってるなら、あたし達が無理やりでも修正してやるわよ!!!」

ルイズがそうよね？ と、みんなに言うともみんな頷いて返す。

俺は「すまない、ありがとう。その時は、よろしく頼む」と、言うだけで精一杯だった。

……

…

作戦会議は続いている。みんな色々意見を出し合っただけだ。こー
だ言っている。

俺はというと、何か使えないかと、チート機能を調べているのだっ
た。

「そうね、あたしはこの後直ぐに実家に手紙を書いて、タバサの家
族を受け入れる用意をするわ」

「あたしはそうねえ……虚無の魔法の練習をしておくわ。イザと
いうときは精度と速さが大事だしね」

「わたしは奴らに勘繰られないようにするわ」

「よっしゃー！俺は剣の特訓しとくぜ！！やるぜデルフ！！」

「おうよ、相棒！！」

みんなそれぞれの目標に向かって意思を固めてる。

俺はというと、笑える機能を見つけたので、何かに使えるかと思い
報告してみた。

この場では不謹慎かも知れないが、休憩が必要な時間だしな。

「おーい。なんでも、外見というか効果を変えられるらしいぞ。

例えば、羽が生えたり天使の輪がついたり後光が差したり、ほかに
は空から光が降ってきたりなんかも設定できるみたいだ」

それを聞いた皆は、顔を青くして一斉に呟いたのだった。

「なっ、なんて恐ろしいんだ。チートって！！」

余談だが、サイトはこの日死にかけた。
俺のことを夢で見た所為であると、後日語った。

内容は……

数多くの天使を従える”16枚の白と黒の翼を持った、頭に光輝く
輪と金色の目を持ち、禍々しい剣を携えた”マスオが、地上を見下
ろし名を名乗った。と。

『我の名を記憶せよ！ 我が名はサナトリウム！ 平常神を主と仰
ぐ存在である！』

いわゆる覚醒イベント（後書き）

すいません、話しの展開上シリアスっぽく行ってみましたが、ギャグが少なすぎました。

最後に出た平常神というのは、精神科のお医者事で、天使っぽい名前のサナトリウムは、その患者の長期療養施設のことです。

タバサの話の後で不謹慎かと思いましたが、入れてしまいました。お気に触りましたら謝ります。

特訓とか面倒じゃないですか

／SIDE キュルケ

あの突っ込みどころ満載の出来事が終わった後、サイトからは『銃』の詳しい話を、マスオからは『デバイス』とかいう、別世界のメイジが使う魔法の杖の話を聞いたわ。

最初、『銃』が彼らの世界のメインの武器って聞いて笑い転げていたあたし達だったけどね。

手のひらサイズから一抱えもあるサイズまであって、おまけに誰でも使えて、連射も出来る。

更には、音の速さよりも早く弾が飛んできて、当たれば大怪我するという。

まあ、わたしたちには銃と言えばアレしか思いつかないので、いまいちピンと来なかったんだけどね。

銃といえば、音だけは凄いの威力も弱くて何処に弾が跳んでいくか判らないというシロモノ。

小さいときに商人が売り込みに来たのを覚えてるわ。

たしかに、弾が目に見えなくて何処行くか判らないというのは有る意味恐怖かもね。

すぐに使えるというのは魅力的だけど、ちょっとわたしの趣味じゃないわ。

その流れでマスオが昼間言っていた『デバイス』とか言うものの説明を始めたわ。

色々種類があるらしいけど、それらは全部無視して概要だけを説明してもらったの。

『デバイス』とは、魔法を登録しておいて、使いたいときにそれを

呼び出して使う魔法の杖との事だった。

ようは、使いたい魔法を選ぶと杖がその魔法を詠唱して、術者は精神力とイメージを出すだけで即座に使えると言うものの様ね。

銃と魔法の良い所取りみたいな印象を受けたわ。

その後、誰が言うまでも無く解散したわたし達は、自分が出来ることをしようと誓い合いながら、ルイズの部屋を後にしたわ。

そうね、これも知識といえば知識よね……と、あの知識を吸収する事に貪欲な、ミスタ・コルベールにタバサの家庭の話は抜きにして、今日の出来事を話したのよ。

ミスタ・コルベールは流石のあたしも腰が引けるぐらい色々な質問をしてきたわ。

答えられる事は答えておいたけど、ミスタは「もう遅いから早く寝るのですぞ」と、わたしに忠告し、すぐ様自分の部屋で研究を始めるの。

あの様子じゃ今日から徹夜ね、と思いつつ、わたしは部屋に戻って留守番していたフレイムの頭をなで約束の手紙を書いて寝たのよ。

………

………

………

朝どったんばったんする音で目が覚めたわたしは、自分の状態を確認し、思わず大声を上げそうになった。

だって……上半身が布団を貫通して、マットまでめり込んでいるん

ですもの。

寝ぼけて取り留めない思考をする頭を強制的に覚醒させ、原因を考える。　って考えるまでも無いわね……。

こんな不思議な事が起きるのはルイズの周りに限ったことよ！

今回は誰がやったのかしら？　ルイズ、サイト？　はたまたマスオ？　誰でも良いわ。　とりあえず問い詰めましょう。

仕置きする計画を立てながらわたしはドアを開ける。　ドアノブが少し凹んだ気がするけど今は無視よ。

と、出たところで、タバサと出会う。　その顔を見る限り、同じ結論に達したようね。

ルイズの部屋を開けると……ルイズがマスオを締め上げてる最中だった。　文字通り胸倉を掴み持ち上げていたわ。　もう、ビックリよ。

あたしからすれば小さな女の子が、両腕を使ってとはいえ、男を持ち上げてるのだから。

「ああ、キュルケにタバサも被害にあったのね。　とりあえず、一発殴っときなさい」

と、目の前にマスオを突き出されたの。　というか、犯人はもう確定してたのね。

流石に貴族、しかも女子が男を拳で殴るのは絵的に美しく無いわ。　なので、色々考えることがあって限界だったわたしとタバサは同時に、マスオの額に思い切りデコピンを食らわせたのだった。

……縦に三回転して吹き飛ぶのは予想外だったけど。

「すみませんっしたー！ー！！」

足を奇麗に揃え、腰を90度に曲げ謝るマスオ。

お前も男で日本人ならソコは土下座だろ？ とは、言えなかった。
なんかブーメラン来そうだし。

「で、どうしてあたし達に断りも無く……チートだったかしら、そんなことをしたの？」

「いや、俺はその、良かれと思って！」

「イキナリ100倍とかにするんじゃないわよ！」

見なさい！ この部屋を！ 折角奇麗にしたのにボロボロじゃない！
良かれと思って先走った結果がコレよ！ 反省なさい！」

そう、このバカは例のチートとかいう力で、俺達の力や体力それに精神力なんかを元の強さの100倍にしたのだ。

おかげで、朝起きて布団が滅茶苦茶でビックリ、飛び上がって天井に頭をぶつけて更にビックリ。

パニックになって部屋の中を文字通り跳ね回るという、大混乱を引き起こしたのだ。

奴が言うには技術って項目も上げておいたから、落ち着いていれば体の操作は特に問題らしいが、パニックになって力の制御が出来なかったので、ああいった事が起こったらしい。

一度でも制御できれば大丈夫かもしれないと言ってる。

布団が滅茶苦茶になってたのは、只の寝相らしい。

寝てるときは制御どうするんだよ！？

おまけに……

「戻せないってどういう事よ？　こんなの生活に支障が出るに決まってるでしょ！！」

「あ、あのですね、その力に体が慣れてしまってるからです、下手に戻すと物凄く喪失感が出る可能性があるってヘルプに書いてあるのです」

「~~~~っ！　バカーー！！」

と、ルイズがマスオのバカを突き飛ばす。　が、二人は作用反作用とかいう法則で、それぞれ反対方向に飛んで行き、壁にぶつかった。
「もー、やだ〜！！」

「つて、やべええ！　シエスタにも同じような改造をしたんだった！！」

「げげげっ！　もっと早く思い出せよバカ野郎！」

ルイズの泣き声を聞いていると、ガバリと起き上がったマスオがとんでもないことを言い出した。

一刻も早く彼女の元に行って理由を説明しないと、色々危ないかもしれない。

俺達は急いで駆け出す。

「シエスタって……あの決闘騒ぎからあんた達と仲良くなったメイドでしょ？　どこにいるかわかるの！？」

「「わからん！　とにかく探すしかない！！」」

隣を走るルイズが記憶を掘り起こして尋ねてくる。

が、俺達は本当に知らないのです、こう答えるしかない。

外まで一気に駆け下り、寮を一周し厨房に向かおうと思った矢先……見つけたっ！

シエスタは、青い顔をして洗濯籠もち、一步一步足元を確認するよ

うに歩いている。

良かった！ 大きなトラブルは起こってない様だ。

俺達はシエスタに近づく。 が、彼女は洗濯籠を取り落とし、いやする様に後ずさる。

「ダメっ！ 近づいたらダメです！ 今日のわたしは変なんです！ あなた達を傷つけてしまう……」

「おい、マスオ」

「判ってる。 すまなかった、シエスタ！ そうなったのは、俺が原因だ！ 本当にすまなかった……」

と、頭を下げた。

え？ と返すシエスタだったが、俺達が説明し、それを理解すると青かった顔に赤みがさして、やっと落ち着いたようだった。

「とりあえずこいつは、あたしがお仕置きしておくから、許してあげてね」

と、頭を下げているマスオのケツをルイズが思い切り蹴り上げた。

ズンッ！ と地揺れと共に音がし、ルイズの足が地面に半ば迄めり込む。

そして、あのバカは絶叫を上げながら大空に飛び立ったのだった。

「うううう、サイトさくん。 怖かった！ わたし化け物になっちゃったんじゃないかって……！！！」

シエスタが近くにいた俺に抱きつき……って、痛い痛い！！ ぐっぐああああああああっ！！

「……さっ！ サイトさくん……！！！」

シエスタの声を聞きながら、俺が最後に見たのは、魂が抜けるような青空だった。

／SIDE シエスタ

「わ、わたしどうしてここに居るんですか？ 戻って仕事をしないと……」

「ああ、大丈夫よ。 ミスタ・マルトーには貴方は体調が悪いから、あたしたちの部屋で休ませると言って置いたから。

そうよねっ！ しっかり伝えたわよね！？」

ミス・ヴァルエールの使い魔の片割れのマスオさんが、青い顔をしてコクコク頷く。

ここは、貴族の方々が会議を行う特別で大事な部屋。

平民のわたし達なんか、掃除や整理以外では入れない、そんな部屋にわたしが居る。

しかも、周りを貴族の方々に囲まれて……。

卒倒しそうになるけど、サイトさんやマスオさんも部屋にいたので、少しは安心している。

理由を聞いてみると、この騒ぎを起こしたマスオさんが、チート？

というか魔法みたいなもので、わたしを含むここに居る全員を強化したとかで、集まったとの事。

魔法なんて貴族の方々が持つてる特別な力で、わたしの様な平民には縁がないと思っていただけ、サイトさんたちがミス・ヴァ

リエールに召喚されて、貴族の方と決闘なんてしたときに、平民でも使える力というのが判ったの。

でも、わたし達は怖かった。魔法という力が。

だから、サイトさんたちが魔法を使えるとわかって、彼らも一緒にやないかと恐れたわ。

でも、力を見せ付けてもわたし達に対する態度は変わらなかった。それどころか、彼らはわたし達にも魔法を教えようとしたの。断ったけどね。

生活に必要ないし、まだ魔法というのが怖かったりで……。そんな彼らに興味が湧かなかったといえば嘘になるわね。

違う国の話しも面白かったし、友達みたいになれたと思ってるわ。

そんなわたしが、今回魔法なんていう問題に関るなんて想像もしてなかったわ。

その理由というのが……。

「要するに、マスオあんた過保護で怖がりで、おまけにバカなのね」

お尻を押さえ椅子に座ろうか悩んでるマスオさんの話を聞いたミス・ヴァリエールがそう結論付ける。

「……って、虚無!? 虚無ですか? ああ、伝説の! その魔法の系統をミス・ヴァリエールが……すごいです!!」

わたしは、虚無なんておとぎ話でしか知らなかったのに、ミス・ヴァリエールはその系統を使えるという。

思わず驚きと賞賛の声を送ってしまうのは仕方ないと思う。

しかし、この部屋にいる皆さんの顔色は悪いものだったの。

「確かに、虚無は大きな力だわ。でもそれは、有ると言うだけで争いを呼んでしまうのよ」

「最悪、戦争が起こるかもしれない。いえ、起こそうとしている人がいるらしい」

ミス・ヴァリエール以外の貴族様、ミス・ツエルプストーと、ミス・えくとタバサが説明してくださる。

つて、ええ！ 戦争！？

「そうよ。もし、敵がいるなら多数で、それも弱いところを攻めて来るとマスオは思ったらしいわ。」

だから、このバカは居ても立っても居られなくなって、特訓すると言う過程をすっぽかして魔法を使った……と、言うわけよ」

「そんなことなら、わたしも悪くは言えませ……」言えませんね、と最後まで言えなかった。

「いえ、あなたも怒って良いのよ！ もし、何かあれば、あなたも戦うハメになるかもしれないから」

！！！！ あたしは、その言葉に物凄い衝撃を受けたの。

わたしが戦う……？ 誰と？ ひょっとして、貴族の方々とも……？ 目の前が真っ暗になって、気を失いそうになったけど、サイトさんが横から支えてくれた。

改めて、しっかり考えてみる。

マスオさんはわたし自身の身を守る為と言ったわ。

……でも、わたしは守られるだけなんて嫌だわ！ せめて、誰かの力になってあげたい！

まだ、貴族様方は怖いけど、サイトさんやマスオさんみたいに、平民だろうと堂々と生きて生きたい！

「わたしは、この力を誰かを守ったり、誰かを助けたりする力にしたいです！

もう、戻れないなら……せめて、この力に恥じないだけの事はした

いと思います。

だって、わたしは、サイトさんやマスオさんの友達ですから!!
わたしに! 戦い方を教えてください!!」

もう、戻れない。 いえ、戻りたくない。

貴族様方いえ、ミス・ヴァリエールたちに胸を張り、堂々と宣言したのだった。

「良いわ! 認めてあげる、シエスタ! 貴方は今からあたし達の仲間よ!

相手は虚無が3人いるらしいけど、乗り越えていきましょう!!」

「ごめん、ルイズ。 あたしちょっと実家が気になるから、一度戻るわ。 20年後ぐらいに会いましょう」

「わたしの使い魔のシルフィードが、旅に出たがってるみたい。

一緒に行くから一度家に戻って準備をするわ」

「えっ、えっ!? あゝ、わたしも実家のタルブで弟か妹が生まれるかもしれないから、休暇の申請してこないといけません」

「あんた達! 早速逃げようとするんじゃないわよ!!!」

……

…

その後、わたしはミス・ヴァリエールが言うところの、平民でも使える魔法というのを教えられたの。

でも、長くて難しいから頭が痛くなりそう。

呪文を必死に覚えようとしてると、この会議室のドアが開いて目の下に真っ黒な隈を作った、えーっと、ミスタ・コルベールがいらっしやっただの。

その顔が余りにもこわくて、覚えていたことを一気に忘れちゃったのは、仕方ないことですよね。

「研究と実験に行き詰っておりますぞ！　そこで、サイト君かマスオ君のどちらか両方のケータイを貸して頂きたい！」

「……コルベール先生、ちゃんと寝てます？」

「失礼な！　ちゃんと寝ておりますぞ！　急遽36時間時計を作りましたからな、8時間きちんと眠れておりますぞ！」

「……本当に休まないと体壊しますよ、先生」

「昨日も作業中気がついたら朝でしたぞ。　でも、何故か作っていたものは完成しておりましたぞ！」

心配する皆さんの言葉に、ミスタ・コルベールが信じられないような言葉で返答しているわ。

しかも、顔が怖いですし……。

というか、話を聞いていないですし、本当に眠らないと体を壊されますよ。

ミスタ・コルベールはわたし達にも分け隔てなく、と迄は行きませんが、ほかの貴族の方のように高慢な方ではありません。

ですので、わたしも心から心配をしているのです。　どうか、お休みくださいますよう。

と思つてると、ミス・ヴァリエールに肩を叩かれ「早速仕事よ」と言われ……って、ええー！　いやですよ！！

「ちっ！　タバサ」

「ダメ。　眠りの霧は効果が無かった」
って、もう魔法を試されてたんですか！

「キュルケ……は最後の手段ね。 サイト！」

「何をさせる気よ、何を！」

「いや、殴りどころ悪かったら死ぬんじゃないね、先生」

サイトさんも何をしようと考えたんですか！！

「じゃ、マスオ！」

「いや、やっちゃっていいのか？」

「使えないわねー！ じゃ、わたしが……って、いけるの？」

皆さんがマスオさんに注目する。

彼は喋り続けるミスタ・コルベールに指を向けて、ってその先には半透明の小さな窓があり、指を左にスライドさせると……。

「お？ おおおおー！！？ なにやら体が軽いですぞー！！
これなら、3日は研究が出来ますぞー！！」

ミスタ・コルベールは、さっき迄とは見違えるほどの元氣と顔色の良さで、啞然とするサイトさん達から奇麗な色の付いた塊を受け取ると、颯爽と会議室を出て行ったのでした。

「……あんだ、何したの？」

「疲れてるらしかったので、疲れをゼロにしてみた」

「って、休ませなさいよ！！ 空気読めー！！」

ミス・ヴァリエールの手が唸り、マスオさんが会議室を跳ね回る。

……わたし、早まったかしら。

彼らに関ろうとした事が本当に正しいのか真剣に悩み出すわたしだった。

特訓とか面倒じゃないですか（後書き）

色々書き直した結果、結局チートを使っちゃう主人公でした。

彼は基本的にチートというものに拒否感はありませんが、周りが魔法もチートも同じという考えなので、あまり考えずに使ってます。

10／17日 銃に関する所を編集

手紙を書こう

／SIDE ルイズ

ブリッグの舞踏会が終わり数日後、あたしは部屋で暇を持て余していた。

舞踏会と言えばこの二人、変な創作ダンスを踊って会場を笑わせたのよ。

おかげであたしが恥搔いたじゃない。面白かったけどね。

地球の踊りを覚えてるだけ全部ミックスしてみたとか言ってたわ。

今日は久しぶりにキュルケもタバサも、そしてシエスタも部屋にはいない。

というか、何時からあたしの部屋はあんたらの集会所になったのよ！

……と、思わなくは無いのだけど、学院から借りてる何時もの小会議室等は、オールド・オスマンや学院の生徒が何時覗きに来るか判らないし、コルベール先生の襲撃を避けると言う意味でも、あたしの部屋は最適なのだった。

だからって、あたしは納得なんてしてないんだからね！！

「そういえば、ここ最近あんたの未来知識って奴を聞いてないわね。今のうちにキリキリ話しておきなさい」

今日の嫌な思い出を洋半紙に書き込みつつ、なんとなくしに訪ねる。まったく、今日もギーシュとマルコリヌはあたしを侮辱したわね！ギーシュはキザったらしくネチネチと、マリコルヌはバカだからストレートに。

どちらにも言えるのは語彙が少ないって事かしら？　もっと考えさせられる言葉を勉強しなさいよね。

それか、手法を変えて決闘を申し込んでくるとかね。

男らしく殴りあいでも勝負を決めるとか、メイジらしく最大威力の魔法を打ち合うとか……そんなところよ。

どちらも負ける気はさらさらないけどね。

「あ、そういうえばフーケの事を忘れてた」

「フーケ？　ああ、たしか教室で同級生達が話してたわね。　貴族から貴重品を盗み出す盗賊だそうよ」

「その、フーケなんだが、この学院にいるんだよ、ってまった！　話を聞いてくれ！」

「……！　何ですって！？　早速探し出さないと……！」

思わず立ち上がろうとしたあたしだったけど……氣勢を削がれたあたしは、話ぐらいいは聞いてやるのだった。　誰かとかまだ聞いてないしね。

暫く考えていたマスオだけど、ゆっくりと言葉を選びながら自分の考えを言い出した。

「えっと、俺の言う未来知識っていうのは、良く当たる占いみたいな……そんな感じと考えると欲しい」

「今まであんたのいう事は、大抵当たってたじゃない。　でも、いわ、続けて」

「で、ルイズはなんというか……占いを信じて、誰かを捕まえて殺すじゃなかった、人生とかを終わらせるのか？」

「っ！　わたしはその事を失念していた……いえ、今まで考えなかったと言うほうが正しいかもしれない。

「流石に占いを信じて人を突き出す奴には付いていけねーぜ？」

と、パソコンのボタンを物凄い速度で叩きながら言うサイト。
判ってるわよ！ と返し、未来の知識を得ることの危険性を考える。

確かに、未来の知識は便利かも知れないけど、それを信じて行動するというのは危険すぎるわ。

言ってる事は正しいかもしれない。でも、盲信するという事は、自分の考えを捨てるという事よ。

危険性を考えるなら、マスオの奴の言うとおりに動くようになってしまおうと言う事でもあるわね。

それは、道具と同じこと。冗談じゃないわ！

たしかに、今回の件ではフーケは貴族の貴重品を奪ったわ。それは許されることじゃない。

けれど、占いで人を断罪するなんていうのは、問題アリね。

どうしたら良いのかしら……向かってくるなら、容赦なく叩き潰せるのですけ……どっ！？

「そうよ！ 盲信するんじゃないって参考程度に考えればいいのよ！」

「「おおー！ー！！」」

二人が拍手する。 ふふん、どうよ？ って、もしかして試された！？

窓から逃げようとする二人に、思わずあたしは魔法の矢を撃ってしまっていたのだった。

……

…

「あいたたたた……いてえー、魔法で突っ込みいれるのはやめろよ！」

「ふんっ！ あたしの魔法じゃなくて、不安定な体勢で落ちて怪我しただけじゃない。 自業自得よ」

「「ルイズの魔法の所為だろ！」」

「仕方ないじゃない！ 逃げようとするのを見ると、魔法撃ちたくなるんだから」

あんな達の日ごろの行いが悪いんだから、仕方ないじゃないの。

「で、フーケはどうするの？ このまま何もしないってのは問題でしょ？」

「そうだなあ、俺としては、盗賊行為をやめて欲しいかな。 何かあれば、フーケの家族が悲しむし」

「家族がいんのか、もしかして、それを養うためとかベタな事はいわねーよな？」

「ベタってのは良くわからないけど、人間って色々あるのねえ……」
あたしはしみじみと思う。

魔法が使えなくて自分が惨めだった時は、貴族の誇りとかを表に出して自分を守ってたような気がする。

けど、こいつらに出会って、魔法を覚えて周りが見えると様になると、平民……いえ彼らにも家族がいて、愛する人たちがいるんだなと気がついた。

そこまで考えて、あたしは、何か答えがつかめそうな気がした。
あたしが貴族であるという事の答えを。

「と言うわけで、フーケに手紙を書くと思う。

もし危険な相手だった場合、直接言うのと怒り狂って危害を加えられるかも知れないからな。

あと、俺こっちの字は書けないから、ルイズ代筆してくれ」

「いいわ。 きちんと纏めて簡潔にしないよな」

「タイトルは判りやすいほうがいいよな。 おれ、良いの思いついたぜ」

と、サイトが手を挙げて言う。 あっ！ 俺もだ！ とマスオも。

「お前の秘密を知っている」

「お前の……って、やめんかー！」
あたしの魔法がバカ二人に発動したのは言うまでも無いわよね。

／SIDE サイト

「……という事です。 みんなには心配を掛けているかも知れないけど、俺はまだ戻れません。

だけど、絶対帰ってくるので、その時は『おかえり』と言って下さい。

それでは、お体にお気をつけ下さい。

平賀 才人より

追伸

もし、ルイズ達を連れて来れるようなら、一緒に帰ってきますけど怒らないであげて下さい。 そういう教育を受けてたんだから。

今では俺達の友達以外のクソ貴族と比べるとかなり得ないくらいに成長しています。 人間として貴族として。」

カタカタとキーを軽やかに叩き俺は、家族へと宛てたメールを書き終わった。 これまでの経緯も書いた上で。

最後に『胸以外』と付け様かと思ったけど、親が見たら悲しむだろ

うと思い付けなかった。

この先の未来、俺は思うであろう。この時のこの行為で俺は一つ悲劇を回避したのだ！まさに、運命を変えた！！と、言えるであらうと！

「おー、家族へのメール書き終わったかー。なんかガッツポーズしていたが、良い事思いついたのか？

そうだ、最後に俺から言う文章を付け加えて置いてくれないか。高度な政治的判断という奴だ！」

家族へのメールを書いてルイズの『ワールド・ドア』で地球に穴を開けて、メールを送ると言うのはさっき思いついたのだった。

どうせなら一度戻れとルイズは言い出したが、それは俺が拒否しておいた。

じつは、危険を考えながらもルイズは皆の前で、俺に『デイスペル』を使ったのだったが、ルーンは消えずおまけにルイズが好きになるという洗脳効果も見つかったのだ。

……最初からあったとか言うなよ？ マスオ？

そう、マスオだ。こいつは、ファイアーウォールが存在して帰れない。流石にこいつを残して一人で帰れるかってんだ。

ルイズさえ守ればいつでも帰れるから良いんだし、みんな一緒に良いんだがな。

というわけで、準備もあるので今すぐは無理らしい。

俺は、「何が高度な政治判断だよ！ プゲラ！」と言いながら、家族へのメールに付け加えていく。

えっと、何々……マスオは外から見たというあらましを言っていく。曰く、俺達以外にもこの世界に来ている人たちがいる可能性があるという事

曰く、日食や月食の時、地球と繋がる可能性があるという事。

曰く、コルベール先生に拠ると、『ネギま!』の魔法全てが使えるというわけではなく、ラテン語での表現が曖昧だったりすれば使えないものが有るという事。

曰く、電波や電磁波で異常を起こせるので、さっきの先生が携帯電話を使い簡易な魔法を発生させることが出来たという事。等などを追記していく。

そうなんだよ。恐ろしい事にコルベール先生は、ルイズの部屋で『雷の暴風』が暴走したときに、濡れたり凍ったりした事実を踏まえて、電磁波なんかで魔法が起きると言うのを突き止めたのだ!そして、急遽俺達から奪ったケータイをマスオの語った『デバイス』というのにしたらしい。

もつとも、今は簡単な魔法しか使えないし、発信するデータの法則性? もコルベール先生にしか判らないんだけどな。

俺達はそのケータイを、変わった力の無いキュルケとタバサに渡したのだった。

彼女達はそれを見事使いこなし、杖として戦術に組み込むらしい。だけど、その姿はどう見てもケータイを弄り回す女子高生にしか見えなかった。

「って、マスオ! 日食や月食の日に帰れるってマジかよ!?」

「そうらしいよー。シエスタの村にゼロ戦があるんだが、日食だか月食の日に二機きて片っ方は帰れたから、空からなら行けるとかも思ってる」

「おおお!! それじゃ、マスオもそれで帰れるのか?」

「……無理かもしれない。ファイアーウォールを抜ける方法がまだ見つからない」

俺はガッカリしながらもメールを打ち込んでいく。

最後に、このメールを政治家に見せる場合は、本当に信用の出来る

奴に見せるように、と念を押して保存した。
いや、まじでクソ政治家なんざ、この世界のクソ貴族並に信用出来ねー。

「「おわったー！ー！！」」

どうやら、ルイズもフーケへの手紙を書き終えたようだ。
二人して椅子に座ったまま伸びをする。

「ふー、サイトの方も終わったようね。

準備は良い？ それじゃ、早速つなげるわよ。 あたしもあんた達の世界に興味があるから見てみたいわ。

えっと、場所は郵便受けて良いわね」

と、長い虚無の呪文を唱えるルイズ。

何故に郵便受け？ とおもったけど、もうルイズは詠唱を始めていて、邪魔できる雰囲気じゃない。

やがて……「ワールド・ドア（世界扉）！」の言葉と共に、ルイズの部屋の空間に切れ間が入る。

そして、その隙間が開き姿見の鏡ぐらいの大きさになった。

そこから見えるのは懐かしい俺の家……の壁についてる郵便受けだった。

って、なんだそりゃー！！ マスオみてーなファイアーウォールがあるよりはマシだけど、最初に見えたのがこれはねーだろ！

そう心の中で文句を言うが、イキナリ目が濡れて景色が歪んで見えるようになった。

あれっと思い、目を擦るが目の前の歪んだ景色は変わらない。

「サイト、早く手紙を入れなさい……って、ああ、泣いてるの」

……ああ、泣いてるのか、俺。 なっさけないよなあ……。

コレに飛び込みたいと思う欲求が出たとおもうと、いまさら逃げるわけには行かないという自制心が湧いてくる。

というか、その事で頭が一杯になって考えられなくなる。

後ろから背中を押される。 かなり強い力だ。 ぐんぐんと目の前にポストが近づく。

次の瞬間ルイズの『……ああ、泣いてるのね』って言葉が頭の中で繰り返される。

ふざけるな！ マスオの奴は帰れないって判っても、笑いを取ろうとバカな事を言って誤魔化していて、俺も励ましていたのに！！ そんな俺が、こんなところでおめおめと何もせず帰れるかよ！！

俺は足に力を入れて思い切り振り向いてマスオの野郎をぶん殴る。

「なめんじゃねえ！！！」

「いってえええええええ！！ あいたたたたた……。 い、良いのか？」

殴られておまけに壁に突っ込んだマスオが体を起こしながら聞く。

俺はそれに「ああ」とだけ返して、メールを送信するのだった。

さっきまでの狂おしいまでの望郷の念は薄れていた。

「おしっ！ メール送ったぜ！」

「あんたねえ、その、パソコンのボタンって奴を押しただけじゃないのよ。 テキトーなこと言ってるんじゃないわよ。

この、魔法疲れるんだから、さっさとしなさい」

と、ルイズが最初に使ったときよりも余裕そうな表情で言う。

「無線だよ、無線。もう、終わったから、少し日本の景色でも見ようぜ」

「本当でしょうねえ？ でも、この鏡を自由に動かせそうなイメージは難しいのよ。でも、左右にやるぐらいなら出来るわ」

と、必死に念じて右に鏡を向けるルイズ。
ややあって、俺達が見慣れたコンクリートとガラスで出来た町並みが見える。

が、直ぐにルイズの魔法は効力を失い、鏡は消えるのだった。

「「ああゝゝ！！！」」

すぐ様、顔を青くしたルイズが聞いてくる。 あれはなんだったのかと。

遠くて良く判らなかったけど、巨大で角ばった塔が立ち並び、ガラスが太陽の光を反射させる様は、この世のものとは思えない、と。

俺達は頷き合い、その問いに答えるのだった。

「「あれが、日本だぜ！！！」」

フーケの挑戦

／SIDE フーケ

夜の帳が落ちた暗い広場から、学院の本塔にある宝物庫の辺りを眺める。

あのエロそうなコッパゲは、最近何かに興味が移ったようで、あたいが話しかけても反応が無い。

女としてイラッとするものがあつたが、本気になられても困るしで最近積極的に話すのはやめている。

しかし、別の奴にこの宝物庫の事をそれとなく聞いてるが、あまり詳細な情報は判らなかった。

いっそ、力ずくで行こうかと最後の計画を立てているとき、それは来た。

それは、貴族ならばだれでも聞きなれた、伝書フクロウの羽音。

どこかの道楽貴族が親か知り合いか恋人にでも送ったのだろうかと気にも留めなかったが、意外な事に私に向かって飛んできた。

酔狂な事もあるものか何の気負いもなく手紙を受け取る。

封蝋に記されている紋章をみると、なんとヴァリエール公爵家の紋章！ ……いや、これは子が使う紋章か。

なんにせよ、あの魔法の使えない落ちこぼれの、しかも余り面識の無いミス・ヴァリエールが私に用事があるという。

まさか、そっちのケが有るんじゃないだろうね、とニヤニヤ笑いながら手紙の封蝋を破り中を見る。

貴族らしいが、何処か上から過ぎる目線ではない、なんとも表現の

し難い書き始めからなる文章を読み、ある一点を読んだところで：
私の心臓は大きく跳ねた。

冷や汗が顔や背中に胸を問わず流れ落ち、心臓は大きく早く打ち続け、気を抜けば意識が遠のくのを、なんとか気合で持ち直す。

手紙に書かれていた事を要約すると

『――お前の秘密を知っている――』
だった。

ナゼばれている？ ドコでばれた？ イツからばれている？ むしろ、ドコまでばれている？ ドウスルつもりだ？

眩暈の起こる頭を無理やり必死で回転させるが、頭の中を占めるのはナゼばかりだった。

ハッと気づき、回りを伺う。……が、物音といえば、虫の音と肩に止まっている伝書フクロウの鳴き声だけ。

私を捕まえに来ているであろう、衛兵の武器の音に足の音、呼吸の音などは聞こえなかった。

今すぐどうしようと言う気はない？

再び手紙の最後に目を向けると「――返答を求む」と、手紙はそう締めくくられていた。

……

：

訝しげに見てくる貴族のガキどもを無視して、私は部屋に駆け戻りペンとインクを用意して、ハタと気がつく。

返事を書くという事で頭が一杯で、何を書こうかすら思いついてなかった事に。

どうしたもんかと考え、あまり時間が無い事にも気がつく。
即効で考えた計画は4つ。それをすぐさま検証する。

1、ヴァリエールの部屋にゴーレムの拳を打ち込んで殺す。――
却下。準備に時間が掛かりすぎる。気が付かれて逃げられたらアウト。

2、どこかに呼び出して真意を聞いてから殺す。――保留。けど、私の秘密を知ってる奴らが全員来なければアウト。

3、学院長に脅迫されるとタレ込む。――却下。ヴァリエール家の権力は大きい。真相を調べられたらアウト。

4、素直に逃げる。――保留。けど、もし、あの子達のことを知られてたらやばい。すぐに戻って移住の手配をしなければ……。

2番と4番を合わせたのが現実的だ。と、考える。

奴らと呼び出しておいて真意を聞く。ついでに秘密を知ってる人を全員教えてもらい、ゴーレムで時間を稼いで逃げて、あの子達を逃がす。

その後、秘密を知ってる奴を暗殺して回る。これしかない！

方針は決まった！

早速羊皮紙を取り出しペンを走らせる。

「―――で、お待ちしております」と。

蠟で手紙を封印し、広場から付いてきていた伝書フクロウに手紙を持たせ飛び立ったのを確認した後、すぐに馬でこの学院から近くだが見えない位置にある深い森に向かう。

この森の手前が指定した場所。

森の中に巨大ゴーレムを隠し、私が森の中に逃げ込み、奴らが追っ

てきたところをゴーレムを動かし殺す！

森に着いた！ 早速ゴーレムを作成するためのルーンを……！
巨大な何かが羽ばたく音がする。

ふとみると、学院の方からウィンドドラゴンが向かってくる、その上に乗ってるのは……ヴァリエールとその使い魔達！

おまけに、最近ヴァリエールと一緒にいると噂されている、赤い髪と青い髪のメイジたち。

ウィンドドラゴンは私の頭上を一周したかと思うと、ややあつてに降り立った。

そこから、ヴァリエールとその使い魔達が降りてくるなり喋りだした。

「で、なんの用よ？ いきなりこんな辺鄙な場所に呼び出したりなんてして。

あの手紙を読んだからここに呼び出しでしょ？ ひよつとして、ここがあんたの財宝……って、そこウルサイ！」

「ルイズゝあんたに対する告白じゃないの？ ペチャパイの女の子が好きなんて、良い趣味してるわね」

「相手は女だぜ？ しかもルイズ相手とか、たしかに面白い展開だけどよ」

「キュルケ！ ちょっとケータイ返してくれ。 ビデオモードで録画するわ俺！」

ヴァリエールが喋ってるが、それを無視するかの様に別の奴らが喋りだす。

って、なんでいきなり告白とかそういう話になってるのよ！！

「こんな人が来ないところに呼び出すなんて、理由は一つしかない」
青い髪の子：確かタバサって子が溜息を一つついて場をまとめるか
のように言い出す。　って、バラすつもり？　やばい！！

「……決闘よ」

「「「おおお〜！　流石タバサ！」」」

「なんですってえ！　あたしに挑戦するっていうのね！　良い度胸だ
わ！」

あんたらのバカは感染するのか！！

でも、考えてみれば決闘と言うのは良いかもしれない。

こちらの要求を通しやすく出来るし、決闘中は他の奴らからの妨害
は考えなくて良い。

更に言えば、ヴァリエールは他の奴らに、情報を出し渋ってるよう
だ。　ここで始末できれば、情報の漏洩を少なく出来る！

そうと決まれば話は早い。

「そうよ！　決闘よ！！　掛ける物は……」お互いの大事な情報よ
！！」　なんですって！！？」

ヴァリエールがあたしの言葉に被せて言ってきた！？

……まさか、こいつらは、やっぱり私の家族のことを知ってる？
もしかして、あの子のことも！？

嵌められた！！！！

「お、おねがい……お願いします。　家族をあの子をそつとしてお
いて。　あの子はただ静かに暮らしたいだけなのよ……」

私は杖を取り落とし、自分の命を捨ててもあの子を守るために懇
願するしか、手は無いのだった。

「ちょっと！　マスオ！　あんたの言っていた占いどこか外れてる
んじゃないの？　なんか、フーケ？　泣き出したわよ？」

家族がどうのあの子がどうのって言ってるし、これじゃあたし達完璧に……」

「「悪役だな」」

「悪役ね」

「悪役」

「こっ……こっこっこのバカーー！！ しかも、さっき言ってた女同士ってのは何よ！

「「「って、その呪文は！」」」

……吹っ飛んで反省しなさい、エクスプロージョン！！」

小さな火の球がヴァリエールの詠唱と共に現れたかと思うと、それが破裂し周囲に爆音と熱風を撒き散らす。

彼女の失敗魔法が爆発すると言うのを知っていた私は、間一髪伏せてそれをやり過ぎす事ができた。

けど、直撃を食らったあいつらは死んでるかもね。

でも、これは最後のチャンスかもしれない。今のうちにトドメを刺して、すぐにこの場から逃げて、みんなを逃がすかしないといけない！！

早速行動を……「早く起きないと、あんた達フーケに殺されるかもよ」っ！！

ウィンドドラゴンに乗って逃げていたタバサって奴がそんな事を言うのと、奴らが起き上がる。……っ無傷！ バカな！！ 信じられない。

魔法の直撃を食らったはずなのに、こいつらは何で出てきてるんだ！

「この魔法はダメね……近くで使うと、耳が痛いわ。

えっとやっぱりフーケなのよね、あんたまだ戦おうとか思ってるわけ？ その心意気を買って叩き潰したいけど、マスオが敵対したく

ないって頼むのよ。

ほら、さっさと説得しなさい！　そして、財宝のありかを吐かせなさい！」

マスオと呼ばれた使い魔の片割れが私の前に立つ。

「あゝえゝ、なんというかですね……財宝云々は無視して良いとして。

家族を養うために犯してる犯罪は裁き難い訳なんだけど、こっちの法律は知らんがメンツとかあるんでソッコー死刑なんだろうなあ。

まあ、と言うわけで、俺としてはこれ以上盗賊行為をして捕まったら、フーケの家族が全滅とかするわけで、そんなのは見たくないの
で、これ以上はやめて欲しいなと、思ったわけですよ」

「あんた、相変わらず甘いわねえ、それがあんたらの国の普通なの？
財宝ってのは冗談だったんだけど……本当だって！」

「まあな、名目上人道的ってこっちでは言うんだけど、俺のガツコの先生が言うには、『人が飢えるようになれば、犯罪を起こしても食べ物を手に入れないといけない。奪われたほうも他から奪うしかない。そこで犯罪の連鎖が起こって治安が悪くなる』という風に考えてるんだよ」

「そそそ、無駄遣いをしなければ誰でも飢えないで生きていくだけの金を配るっていう制度があるんだよ。だから、盗賊の考えが俺達には良く判らん。

楽しんで盗賊をやってるわけじゃなさそうだし、それなら、助けたいなと思ったまでだ。

それに、何でイキナリ俺等と呼ば出したんだ？

あの手紙には盗賊行為をやめろってのと、俺達に用事があったて何か話したいなら、お前の指定した場所で良いってしか書いてなかったはずだぜ」

そ、そんな考えは初めて聞いた。

ヴァリエールの使い魔二人の語った別の国の話しは、常識ではありえない話だった。

納得は出来るし理解もしたいが、そんな事が実現できるとはとても思えない。

現に二人以外の貴族達は「理屈はわかるけど、そんなの無理じゃない？」と声を揃えて言っている。私も同意見だ。

しかも、良く読んでなかったけど、相手の指定した場所で話をしようってのかい！？

どんな罠があるのかわからないんだよ！ その自信は一体どこから……。

マスオってやつは演説は続く。

「今すぐに信じろつとは言わない。ただ、敵対したくないだけだ。俺は可能であれば、この国の虐げられてる人を救いたい。」

今はそんな力なんてないが、いや『力だけはある』か……ま、まあ、そういうわけで不幸な人を進んで生み出したくないと思ってるんだよ」

「お前そんな事考えてるのかよ……危なくないだろうな？ ていうか、計画はちゃんと出来てるのか？」

「実はまだ……けど、サイトも見たら。奴隷とかいるんだぜ？ 意思を持った人間が道具扱いなんて……許せるか？ 許せるか！

？ 許せねーよなー！！」

「「落ち着け！ 興奮するなっ！！」」

「まあ、というわけでだ、計画なんざさっぱり立っちゃいないが、青写真は作ってるぜ。 ずばり、日本に頼み込むっーか巻き込む！！」

「……そう言うだろうと思ってたよ。 ああ、メール打ってた時にな……。 んで、俺が帰れてもココの問題は燻ぶり続けるだろうな
って。」

はあああああああゝゝゝ、まじで、この選択で良いのか？
良いのか!？」

「ちよつと、ソコの二人！ 落ち着きなさいよ！ んで、ここで危険な話はしないでよね！

っていうか、あたしも巻き込むつもりでしょ!？ 冗談じゃないわよ、心の準備が……じゃなくて！

それに、他の誰かに聞かれたら打ち首モノよ、って居るし!!
ううううううう……どうしたらいいのよお……!!」

主人と使い魔が揃って叫んだり頭を抑えて呻いたりしているが、冗談ではない！

私も巻き込まれる可能性がある、こんな危険な空間からはとっとと離脱を図らないと！

「じゃ、この話しは聞かなかった事にするので、私の事も内密に……」

「「俺達もう友達だよな？」」

と、使い魔たちから一瞬の間に肩を掴まれた。 ってもものすごい力だよ！

「痛い痛い!! わかった、わかったから、敵対しないから、放してくれ!」

「本当に敵対しないんだな？ よっしゃー!!」

「信じるの？ それに、問題はほとんど解決してないのよ？ なんです、そこでそんなに喜べるのよ、あんたは」

「喜ばずにいられるか! これで、最悪、一人の虚無持ちを敵に回す可能性が減ったんだよ!」

マスオって奴の語った言葉に、そいつ以外の全員が驚愕の声を上げ

る。もちろん私もだ。

確かにあの魔法以外は爆発するけど、って、そのヴァリエールと同じと言いたいのか？

となると、ヴァリエールも虚無という事になるんだが、私はてつきりあの種族の使う魔法の特性みたいなもんかと思ってたよ、

という事は、あの子があ種族ってことも知ってるんだろうね。

それを踏まえての敵対拒否と勧誘って意味か。

何もかもお見通しって訳だ。

で、私たちをどうするんだ？ 便利に使うつもりか？ それとも…

…本当に助けてくれるのか？

確かめなくては！

こいつらが本当に力となるのか、を！

「……さっき、力なら有るとか言ってたね。その力が本当にあの子達を守る力になるのか、試させてもらおうよ！！」

一言宣言し、精神力を限界まで使いゴーレムを作っていく。

その間私に対する攻撃は、無かった。

……そして、30メートルを超えるゴーレムが完成した。

「さあ、これに勝ってみな！ そうしたら認めてやるよ！ これに勝てないぐらいじゃ、お話にもならないからね！」

大きく啖呵を切った。

精神力の使いすぎでフラついてるが、奴らが言う『力』を確認しなくては、と思った瞬間、私の疲れがいきなり回復した……！？

見れば先ほど滅茶苦茶な演説をしていたマスオとかいうヴァリエールの使い魔が、目の前に小さな窓を出して指で突っついてる。

「試されてるとあっちゃー、お互い絶好調じゃないとな。

という訳で、俺の仕事は終わりっと。 ルイズ、サイトあとは任せ
た！」

「「つて、ここでも他人任せか!!」」

あいつが何かをしたのは間違いないだろうけど、今は私に向かって
る二人を相手にしないと！

ヴァリエールの前にサイトとかいう使い魔が立ち、剣を抜き放つ。

淡く左手の甲が光ってるようにも見える。 なんだいアレは。

「おー、相棒！ オレの出番も久しぶりだぜ！ 話しは聞いてたぜ、
早速暴れようじゃねーか！」

おまけに剣まで喋りだすってのは、何の冗談だい！

私はさっきからの憤りを全てゴーレムに込めて、奴らに鉄に錬金し
たゴーレムの拳をお見舞いするのだった。

「ふんっ!!」

逃げて回避するものと思ってた私の思考は氷付いた。

なんと、あの使い魔のガキが、剣で30メートルのゴーレムの鉄で出
来た拳をはじき返す……？

さらに、恐ろしい速度で剣を振り回すガキ。 その様は剣の刃で出
来た暴風雨のようだった。

それに巻き込まれたゴーレムの拳は、削られ断ち切られ跳ね飛ばさ
れて消し飛んでいた。

「お~~~~い、あ~~~~い~~~~ぼ~~~~!! ふ~~~~、もっとやさしく
使ってくれよ！ 剣^{オレ}がもたねえ~~~~!!」

弱音を吐く剣というのは初めて聞いたね……。

「まだ序の口だぜ、デルフ！　なんかしらんが、ルイズの呪文聞きながらお前を持ってる、力が湧いて来るんだよ！　次はもっと早く行くぜ！！」

「ちょっ！　相棒、勘弁してくれ！！！」

……っ！　と、戦闘中だという事を思い出し、精神力を送りゴーレムを再生しようとする。　が……。

あの使い魔は私のゴーレムの周りを恐ろしい速度で跳び回り、って回ってるのよね……切りつけていく。

時折飛んでくるヴァリエールが放つ光の弾は、なぜかガキに当たらずにゴーレムを破壊し続け、私の精神力を奪っていく。

私にはもう為す術もなかった。　ただ、ゴーレムを維持する精神力を送り続けるだけしか。

なんなの……こいつら？

残像を出して動けるなんて有り得ない。　その速度で剣を振るのは有り得ない。　魔法をその威力で連射するのは有り得ない。

有り得ない事だらけが、目の前で展開されている。

私は人という限界を超えた存在が居るのを初めて目の当たりにした……気分よ、気分！

やがて、ゴーレムを維持する精神力もなくなった私は、ゴーレムと同時に地に伏し、勝鬨をあげる彼らを見るしか出来なくなっていたのだった。

……

…

「という事で、試しは合格ってことで良いかな？」

精神力が戻り漸く立ち上がった私に、マスオって奴が問う。

「……仕方ないね、負けた以上何もう事は出来ないよ。それにしても、あんたらさっきのは何だったんだい？」

「血と！」「汗と！」「涙と！」「努力の！」「結晶よ」

あいつらが一言ずつ言いながら、言葉をつなげて行く。

嘘つくんじゃないよ！ と、それに突っ込みする元気すらもうなかった。

……私はなんで、こんなふざけた奴らに負けたんだろうね。

「……へえ、あんたの使うチートってのはずいぶんと変わった魔法なんだね。

いっそ、あたしも……いや、やめとくよ。 あんたらと付き合う気は更々ないからね。

それよりもだ、学院に保管されている破壊の杖ってのが、あんたらの国の武器って話だよ。

ああ、たまに他所の国のモンが流れてくるらしい。 中には不思議な物が混ざってて好事家に高く売れるんだ。

で、それを使えば、ええと、あんたらみたいな化けモンを倒せるってのかい？

なるほど、そんな武器ね。 流石のあんたらも、飛んでくる爆弾に

はどうしようもない訳だ。　こいつは傑作だ！
そんなすごい物なら、さっさと盗んでおけばよかったよ。　え？
一回しか使えない？」

タバサのウィンドドラゴンの上で私たちは暢気に会話する。
そこには先ほどの確執はちよっぴりしか存在していなかった。

今度学院長にロケラン貰って連射化できるように改造しようぜ！
とか言ってる奴を華麗にスルーする。
そもそも、こいつ……いや、こいつらの使う不思議な魔法は、理解できないのだ。

一体全体、光輝く弾を打ち出したり、噂に聞いた電撃を纏った竜巻を打ち出す魔法なんて聞いたことない。
これが、やつらの国の魔法なんだろうね、と思う。

「まあ、完全に私達を認めては居ないようだし……いつでも掛かってきなさい」

「だけど、寝てる時と」

「ご飯食べてる時と」

「クソしてる時は勘弁な？」

またこいつらは……！　一体いつ練習したんだい！？

「「最後の納得行かない！　私達が下品みたいに聞こえるじゃない！！」」

と、男二人を吊るし上げるのは、地上に降りてからやって欲しい！
そんなに暴れると……って！！

私たちは揃って地面に向かって飛び立ったのだった。

フーケの挑戦（後書き）

いつもこんな拙作を読んでいただき有り難うございます。

なんとか、マスオの本音を書くことが出来ました。

展開が速いと思われるかもしれませんが、皆日々成長してるという事でご納得ください。

さて、これからもプロットなし計画なしのこの怪しげな文章ですが、皆様の暇な時間を潰せれるお役に立てれば幸いです。

書き終わりましたらまた順次投稿していきます。

ご指摘のありました点を修正してみました。

他にもおかしい点ご不明な点がございましたらご指摘ください。

作品自体の設定がおかしいという指摘はご勘弁ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3699w/>

The CHEATER !

2011年11月15日16時04分発行